

# 長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ

長野県長野吉田高等学校サッカーグラウンド造成事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2001・3

長野市教育委員会

## 序

善光寺平は、東縁に上信越国立公園山系より延びる火山性の東部山地、西縁を海底等の隆起による堆積性の犀川丘陵山地に囲まれ、南北に長い盆地が形成されています。

そして盆地の内部では、千曲川によってもたらされた沖積地、そこに注ぎ込む大小の河川による扇状地が発達しております。

このような複雑多岐にわたる地形の上に、現在の長野市が成り立っていて、そこにはそれぞれの地形や立地に応じてさまざまな生活や生産活動が見られ、古代から営々と続いてきた人々の英知の集合と見ることができます。

長野市域には、500余の周知の遺跡があります。川柳将軍塚古墳・大室古墳群などの国指定史跡をはじめ、集落遺跡・生産遺跡・寺院跡・中世城館跡等多種多様に及んでおり、その保護のため日夜努力しているところであります。

ここに「長野市の埋蔵文化財」第97集として刊行いたします本書には、このたびの発掘調査によって得られた成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史の中のほんの一部にしかなさませんが、地域史解明の一助としてお役立て頂ければこのうえない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際しまして多大なご尽力を賜りました関係諸氏、発掘作業に携わっていただきました作業員の皆様、また報告書刊行にいたるまでご指導いただきました関係機関・諸氏各位に深く感謝申し上げます。

平成13年3月

長野市教育委員会  
教育長 久保 健

## 例 言

- 1 本書は 長野県長野吉田高等学校サッカーグラウンド造成事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野県長野吉田高等学校長の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市吉田2丁目367番2他に位置する。
- 4 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 5 本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要領は下記の通りである。
  - ・資料は検出されたものの中から、時期の明確に把握し得るものを中心に掲載した。ただし特殊なものはこの限りではない。時期・性格等不明瞭なものは資料掲載の対象からはずしたが、これらに関しては図面・出土遺物等閲覧し得るように保管してある。
  - ・遺構番号は出土遺物等検索の都合上から、調査時に用いた仮番号をそのまま使用している。
  - ・遺構の測量は 株式会社 写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより 1：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に1：60の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。
  - ・遺物実測図に関しては基本的に土器 1：4、土器拓影 1：3に統一してあるが、その他のものについては、適宜縮尺を明記してある。
  - ・土器の赤彩はスクリーントーンで示している。
- 6 本書の編集・執筆は千野が行ったが、第4章4・5は、町田勝則氏に玉稿を賜った。記して感謝申しあげる。

# 目 次

序	
例言	
第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査体制	3
第2章 調査地周辺の環境	4
第3章 調 査	6
1 長野吉田高校グランド遺跡の調査経過	6
2 遺構と遺物	10
3 第1・2次調査の概要	78
第4章 考 察	85
1 長野吉田高校グランド遺跡の遺跡範囲の想定	85
2 出土土器の様相ー吉田式土器の基礎的検討ー	87
3 天王山式土器と天王山式の文様要素を取り入れた吉田式土器について	94
4 出土土器の様相	98
5 長野吉田高校グランド遺跡から出土した「アメリカ式石鏃」関連資料の検討	114
6 その他の遺物	122

## 挿図目次

第1図 調査地位置図(1:2, 500)	第16図 12号住居址出土土器拓影
第2図 調査地位置図②(1:20, 000)	第17図 13号住居址
第3図 調査地周辺遺跡分布図(1:20, 000)	第18図 13号住居址実測図
第4図 遺跡内調査地点位置図(1:2, 500)	第19図 13号住居址出土土器実測図
第5図 第3次・第4次調査区全測図	第20図 13号住居址出土土器拓影
第6図 第4次調査区全測図	第21図 14号住居址実測図
第7図 11号住居址	第22図 14号住居址実測図ならびに出土土器拓影
第8図 11号住居址実測図	第23図 15号住居址
第9図 11号住居址出土土器実測図①	第24図 15号住居址実測図
第10図 11号住居址出土土器実測図②	第25図 15号住居址出土土器実測図
第11図 11号住居址出土土器拓影	第26図 15号住居址出土土器拓影
第12図 12号住居址	第27図 16号住居址
第13図 12号住居址実測図	第28図 16号住居址実測図
第14図 12号住居址出土土器実測図①	第29図 16号住居址出土土器実測図ならびに出土土器拓影
第15図 12号住居址出土土器実測図②	第30図 17号住居址



- 第31図 17号住居址実測図
- 第32図 17号住居址出土土器実測図
- 第33図 17号住居址出土土器拓影
- 第34図 18号住居址・出土土器実測図
- 第35図 19号住居址
- 第36図 19号住居址出土土器実測図①
- 第37図 19号住居址実測図
- 第38図 19号住居址出土土器実測図②
- 第39図 19号住居址出土土器実測図③
- 第40図 19号住居址出土土器拓影①
- 第41図 19号住居址出土土器拓影②
- 第42図 19号住居址出土土器拓影③
- 第43図 20号住居址
- 第44図 20号住居址実測図
- 第45図 20号住居址出土土器実測図ならびに出土土器拓影
- 第46図 21号住居址
- 第47図 21号住居址実測図
- 第48図 21号住居址出土土器実測図ならびに出土土器拓影
- 第49図 22号住居址
- 第50図 22号住居址実測図
- 第51図 22号住居址出土土器実測図①
- 第52図 22号住居址出土土器実測図②
- 第53図 22号住居址出土土器拓影
- 第54図 23号住居址
- 第55図 23号住居址実測図
- 第56図 23号住居址出土土器実測図
- 第57図 23号住居址出土土器拓影
- 第58図 24号住居址
- 第59図 24号住居址出土土器実測図
- 第60図 24号住居址実測図
- 第61図 24号住居址出土土器拓影
- 第62図 25号住居址
- 第63図 25号住居址実測図
- 第64図 25号住居址出土土器実測図
- 第65図 25号住居址出土土器拓影
- 第66図 26号住居址
- 第67図 26号住居址実測図
- 第68図 26号住居址出土土器実測図
- 第69図 26号住居址出土土器拓影
- 第70図 27号住居址
- 第71図 27号住居址実測図
- 第72図 27号住居址出土土器拓影
- 第73図 27号住居址出土土器実測図ならびに出土土器拓影
- 第74図 28号住居址
- 第75図 28号住居址出土土器拓影
- 第76図 28号住居址実測図
- 第77図 28号住居址出土土器実測図
- 第78図 1号井戸址出土土器実測図
- 第79図 1号井戸址ならびに1号建物址実測図
- 第80図 遺構外出土土器実測図①
- 第81図 遺構外出土土器実測図②ならびに出土土器拓影①
- 第82図 遺構外出土土器拓影②
- 第83図 第1次調査検出遺構分布図
- 第84図 第1次調査検出住居址実測図
- 第85図 第1次調査4号住居址出土土器実測図①
- 第86図 第1次調査4号住居址出土土器実測図②ならびに出土土器拓影
- 第87図 第1次調査5号住居址出土土器実測図①
- 第88図 第1次調査5号住居址出土土器実測図②ならびに出土土器拓影
- 第89図 遺跡範囲想定図
- 第90図 各地点土層堆積状況模式図
- 第91図 壺形土器口縁部形態の類型と構造
- 第92図 壺形土器頸部文様の基本的類型と構造
- 第93図 鋸歯文の成立過程模式図
- 第94図 甕形土器口縁部形態の類型と構造
- 第95図 甕形土器頸・胴部文様の類型と構造
- 第96図 天王山式土器と天王山式の文様要素を取り入れた吉田式土器
- 第97図 長野県内出土弥生時代東北系遺物
- 第98図 出土石器実測図①
- 第99図 出土石器実測図②
- 第100図 出土石器実測図③
- 第101図 出土石器実測図④
- 第102図 出土石器実測図⑤
- 第103図 出土石器実測図⑥
- 第104図 出土石器実測図⑦
- 第105図 流紋岩材の石器製作系
- 第106図 剥片類の基礎統計量（流紋岩材）
- 第107図 剥片B類の分析（流紋岩材）
- 第108図 流紋岩材から製作された器種
- 第109図 「アメリカ式石鏃」類似例
- 第110図 「アメリカ式石鏃」の摩耗痕及び付着物
- 第111図 長野吉田高校グラウンド遺跡出土の「アメリカ式石鏃」
- 第112図 遺構外出土縄文土器拓影
- 第113図 土製品類実測図

# 第1章 調査経過

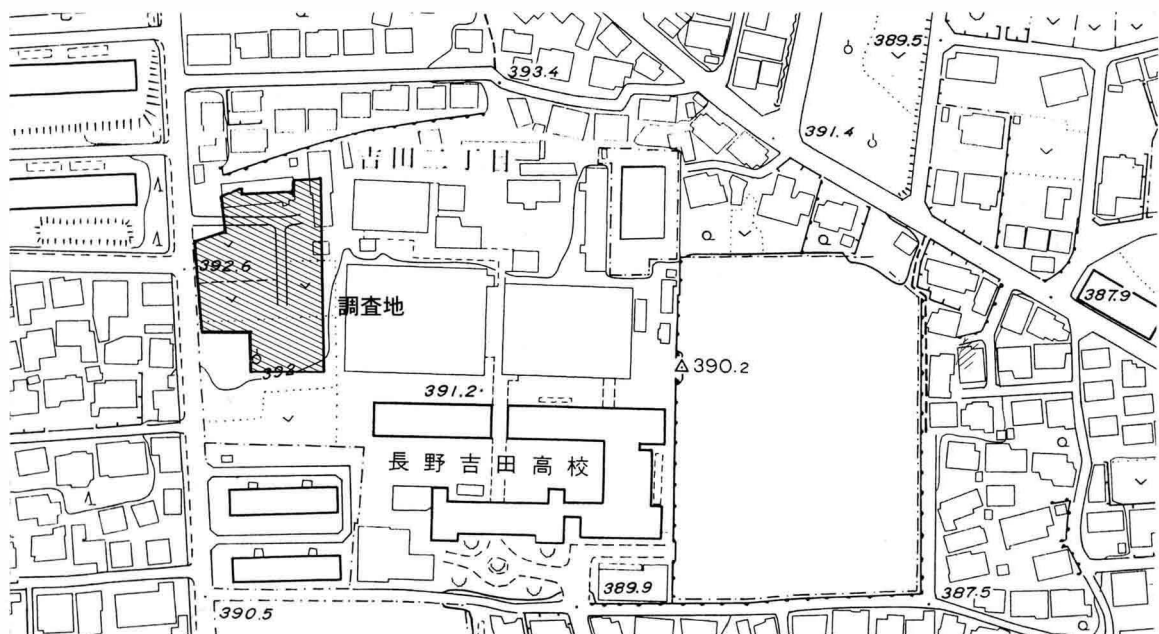
## 1 調査にいたる経過

平成8年2月、長野吉田高等学校より同校の管理混合教室棟建設事業に伴う埋蔵文化財について、保護協議実施の申し出が行われた。事業計画の概要は、吉田高校敷地西側に隣接する信州大学教育学部吉田農場用地を買収し、その部分に仮設プレハブ校舎を建設し管理混合教室棟の建て替えを行うものであり、さらに教室棟完成後には仮設プレハブ校舎を撤去するとともに、旧吉田農場用地にサッカーグラウンドを造成するという大規模な計画であった。

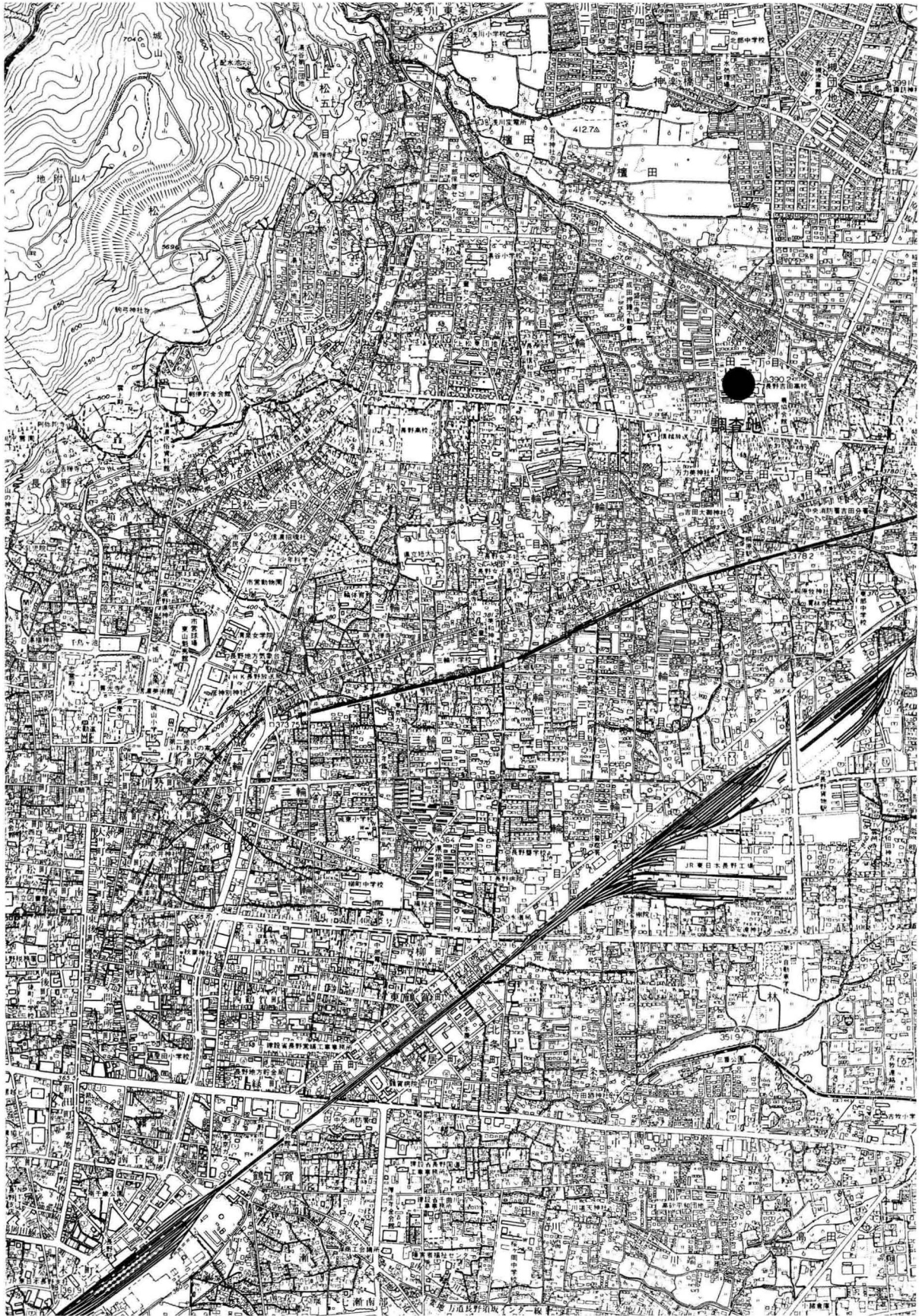
事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「長野吉田高校グラウンド遺跡」の範囲内であり、長野市教育委員会は長野吉田高等学校長の委託を受け、事前に埋蔵文化財の存在の有無を確認するために、2回の試掘調査を実施した。1回目は旧信大吉田農場部分を対象としたもので、平成8年4月18日に実施した。任意の3地点に試掘坑を設定したが、いずれも現地表下50～80cm付近で遺物包含層の存在を確認した。試掘結果をもとにした仮設プレハブ校舎建設に伴う保護協議の結果は、建設に伴う掘削は極力避け遺物包含層に影響のない状況で建設を実施することで、特別な保護措置はとらないものの、仮設校舎撤去後のグラウンド造成時に事業予定地を全面調査することに決定した。2回目は管理混合教室棟建て替え予定地部分についてのもので、現校舎の解体を待って、平成9年1月18日に実施した。任意の2地点に試掘坑を設定したが、校舎造成時の厚い盛り土層とその下の地山と考えられる混礫砂層を確認したのみで、いずれも遺物包含層等の存在は確認されなかった。

以上の結果より、当該事業に関わる埋蔵文化財保護措置として、仮設プレハブ校舎建設ならびに管理混合教室棟建て替えに伴う保護措置は必要ないものの、サッカーグラウンド造成にあたっては、事前に事業予定地約4,500㎡について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認されるにいたった。

その後、市教育委員会は発掘調査計画について起因者との協議を重ね、平成11年7月2日付で長野県長野吉田高等学校長城内一繁を委託者、長野市長塚田 佐を受託者として平成11年度埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、平成11年8月4日重機を援用した表土除去作業をもって現地における発掘作業の開始とし、12月8日にすべての現場作業を終了した。整理・報告書作成作業は翌12年度に行い、本報告書の刊行にいたったものである。



第1図 調査地位置図① (1:2,500)



第2図 調査地位置図② (1 : 20,000)

## 2 調査体制

長野市域における埋蔵文化財の保護については、学術調査および史跡等の保護保存にかかわる調査は長野市教育委員会文化課が対応し、開発行為に対する緊急発掘調査は埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。吉田高校グラウンド遺跡における組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会教育長 久保 健  
 総括責任者 埋蔵文化財センター所長 中島昌之(平成11年度)  
 儀野久夫(平成12年度)

庶務係	庶務係長	北村実寛
	職員	青木厚子
調査係	所長補佐兼調査係長	矢口忠良
	兼務(文化課文化財係長)	青木和明
	主査	千野 浩
	主査	飯島哲也
	主事	風間栄一
	”	小林和子
	専門主事	荒木 宏
	専門員	中殿章子
	”	西沢真弓
	”	山田美弥子
	”	小野由美子
	”	堀内健次
	”	清水竜太
	”	藤田隆之
	”	宮川明美
	”	小林まゆ佳
	”	北村広充
	調査員	多羅沢恵美子

整理作業員 西尾千枝 松澤ナオエ 倉島敬子 塚田  
 容子 清水さゆり 小泉ひろ美 関崎文子 富田  
 景子 田中はま江 村松正子 三好明子

発掘作業員 高林美代子 高橋花美 佐藤俊雄 渋沢  
 幸治 加藤 純 和田五男 塚川孝幸 加藤一樹  
 加藤大次郎 横谷俊介 小口勲子 金子多恵子  
 金子宣夫 藤本寧子 西きよ子 野澤房枝 山口  
 由江 伊藤充明 篠宮和義 阿部直子 外谷忠治  
 宮澤治彦 岸 則子 相馬十寸穂 立岩たまき  
 牧野祐子 坂本 昇 青沼光子



表土剥ぎ作業



遺構掘り下げ作業



測量業務委託



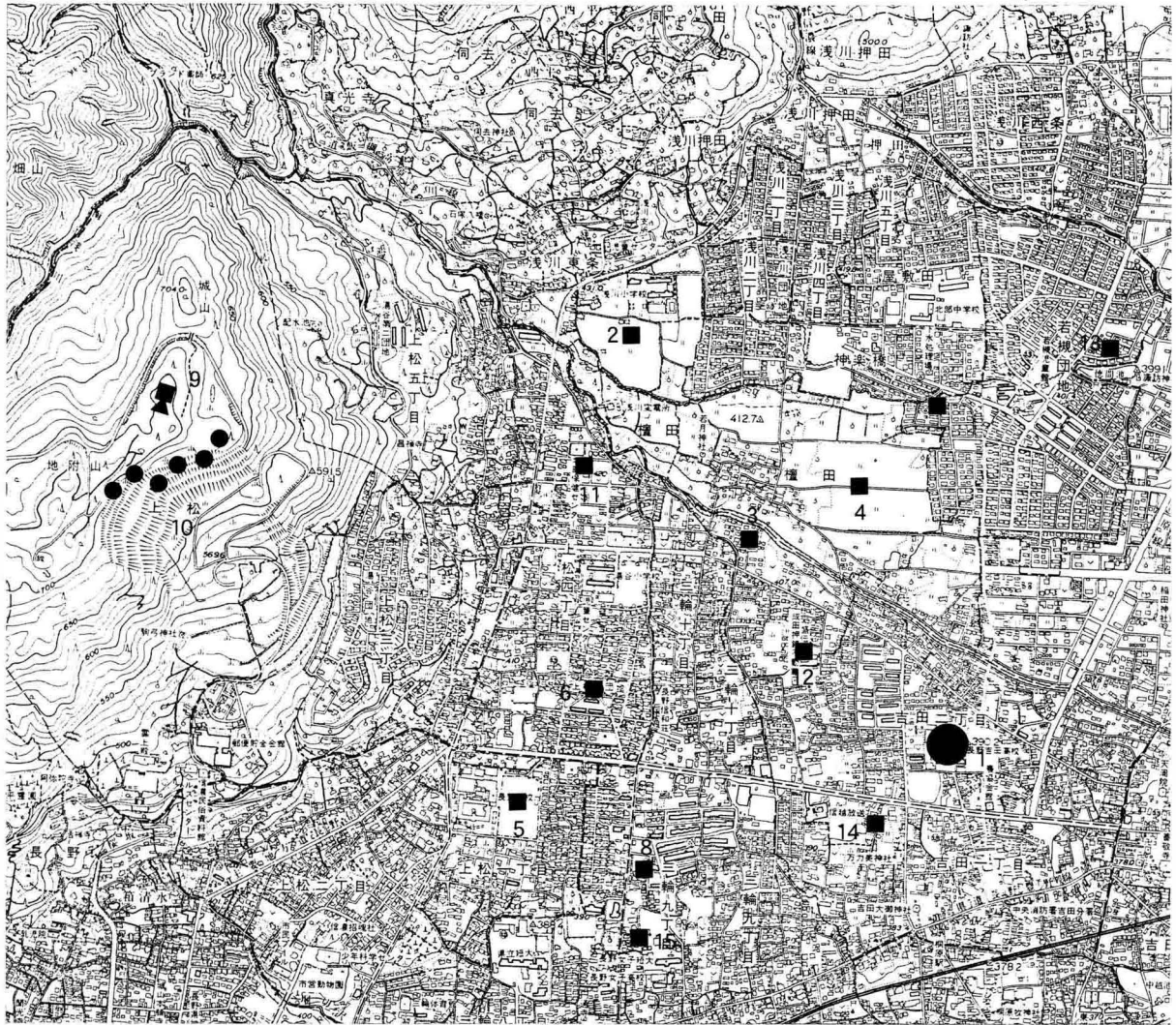
## 第2章 調査地周辺の環境

長野市北西部にそびえる標高1,917mの飯綱山を水源とする浅川は、山間部を浸食しながら盆地内に流れ込んだ後に流路を南東にとり、富竹付近で方向を北東に大きく変え、千曲川と合流する。この浅川によって形成された浅川扇状地は、浅川東条を扇頂とする1000分の25の勾配を持つ扇状地である。南は城東町、西和田（古牧）で裾花川扇状地に接し、扇端は東方にのびて金箱、富竹付近で千曲川氾濫原の後背湿地に接する。また左翼は三才断層による若槻、豊野丘陵に接する。浅川扇状地の形成は古く、その後上流よりの扇状地面を浅川や駒沢川が開析した土砂がその前面の徳間、稲田、吉田2丁目あたりに堆積して新しい扇状地が発達し、本遺跡もその上に立地している。

浅川扇状地には旧石器時代の遺跡は確認されていないが、浅川の源流飯綱高原では、上ヶ屋遺跡が著名である。浅川扇状地に人々の活動の痕跡を見いだせるようになるのは縄文時代前期になってからである。松ノ木田遺跡は、浅川左岸に沿う、北西から南東にのびる微高地に立地し、この微高地は、微高地先端から上部に向かって前期・中期・後期の各段階において、継続的に集落占地が行われたと想定されている。縄文時代前期の住居址が18軒、中期の敷石住居址などが2軒、後期の敷石住居址ならびに集石遺構などが検出されている。特に前期の集落では塊状耳飾りが30点余り出土している。これらは塊状耳飾りの破片を転用した垂飾が多く、製品だけでなく未製品も存在することより、塊状耳飾りを素材にした垂飾生産遺跡と想定されている。その他前期の遺跡としては、浅川右岸沿いの浅川端遺跡で前期前葉の住居址1軒、土壌1基が、また扇状地左翼部の牟礼バイパスA地点遺跡で前期前葉の住居址1軒が検出されている。

浅川扇状地の本格的な開発は次の弥生時代から始まったものといえる。主要な遺跡には本村東沖遺跡、二ツ宮遺跡、本堀遺跡、牟礼バイパスD地点遺跡、浅川端遺跡、神楽橋遺跡、檀田遺跡群などがある。二ツ宮遺跡、本堀遺跡では中期後半の住居址、溝、土壌が検出されている。牟礼バイパスD地点遺跡では中期栗林式期の住居址4軒、浅川端遺跡では同時期の住居址が2軒検出されているが、ともに従来不明瞭であった栗林式前半のもので良好な資料といえよう。集落遺跡としては吉田高校グラウンド遺跡、二ツ宮遺跡、本村東沖遺跡があるが、弥生時代後期初頭から後期中葉の集落形態の推移を示す好例といえる。後期後半の箱清水式期の遺跡はその存在が希薄であり、神楽橋遺跡や下宇木遺跡が知られるにすぎない。少なくとも現状では、中期・後期前半・後期後半の各時期の大規模集落が分布上一致することはない。この状況が善光寺平全般に当てはまるか否か不明であるが、その背景には生産様式の差異といった根本的な要因が認められる可能性もあり、今後の重要な検討課題であろう。ただし、扇状地という地形的特色が水田等の生産遺構の検出に不向きな点も問題の解明を遅らせる要因でもある。墓制に関しては、檀田遺跡群で中期後半の群集する礫床木棺墓と、後期の円形周溝墓群が、また本村東沖遺跡（上松東団地地点）では円形周溝墓と木棺墓群が検出されている。中期の礫床木棺墓は副葬遺物がなく分析は困難であるが、本村東沖遺跡の円形周溝墓とそれをとるまく形での木棺墓群と檀田遺跡群の円形周溝墓のみの群集形態は、それが墓群の時間的経過の差異を示すのかそれとも集落間の階層関係の差異を示すものか興味ある問題である。中心的な主体部からは、檀田遺跡では銅釧・鉄釧・ヒスイ製丁字頭勾玉などが、本村東沖遺跡では、鉄釧・銅釧・管玉等が出土している。後期前半の吉田式期の墓制は甕棺等が知られるのみで、いまだ不明瞭といわざるを得ない。円形周溝墓の導入時期の問題ともからみ、今後の重要な検討課題であろう。

古墳時代に入り浅川扇状地を特徴付けるのは中期集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめ、本村東沖遺跡（長野高校地点）、牟礼バイパスB地点遺跡、下宇木遺跡、二ツ宮遺跡等良好な集落遺跡の検出例が増えており、その集中度は善光寺平の中でも特異である。特に本村東沖遺跡は中期～後期の住居址56軒を検出し、大



1. 吉田高校グラウンド遺跡
2. 松ノ木田遺跡
3. 浅川端遺跡
4. 檀田遺跡群
5. 木村東沖遺跡（長野高校地点）
6. 木村東沖遺跡（上松東団地地点）
7. 神楽橋遺跡
8. 下宇木遺跡
9. 地附山前方後方墳
10. 地附山古墳群
11. 湯谷古墳群
12. 盛伝寺居館跡
13. 若槻里城跡
14. 押鐘城跡
15. 相ノ木城跡

第3図 調査地周辺遺跡分布図 (1:20,000)

型住居址の集中、古式須恵器を大量に保有、石製模造品製作、子持勾玉・土鈴など特殊な祭祀遺物の保有といった特徴を有し、その集落規模からしても当該期における中核的集落であったものといえる。遺跡は地附山の直下に位置し、同山頂付近に位置する地附山古墳群をおおぎ見る立地である。犀川以北の盟主的な古墳群である地附山古墳群の築造年代と集落の継続期間がほぼ一致し、また、ともに多量の古式須恵器を保有するなど、本村東沖遺跡が地附山古墳群の造営に直接かかわった集落である可能性は非常に高いものといえよう。

古墳時代後期から平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。ただし大規模集落が長期間にわたって継続された痕跡は認められず、時期ごとに立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢などはそのなごりと考えられ、広大な扇状地は好適な放牧地であったと推定される。

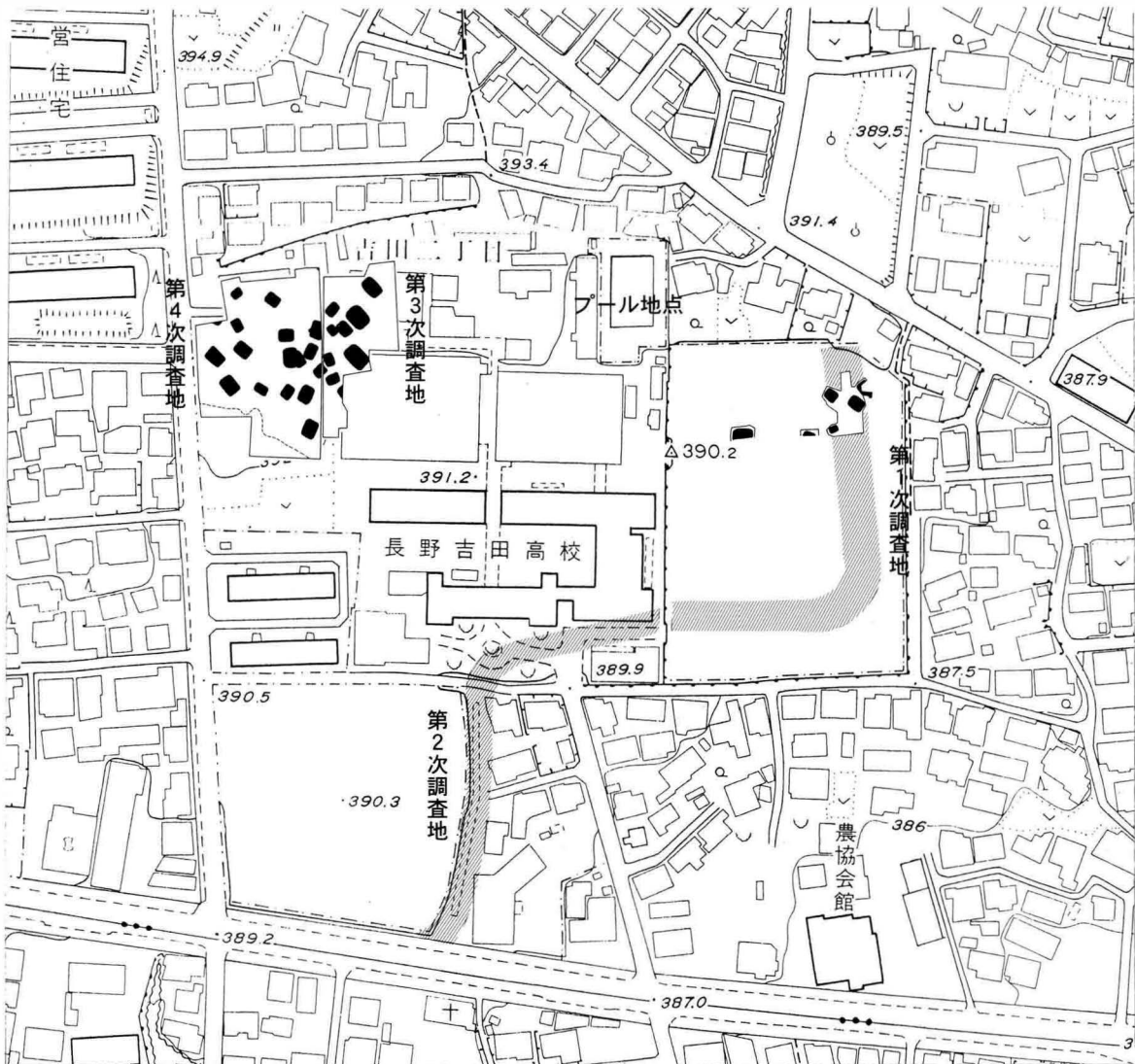
中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城をはじめ本堀・押鐘・相ノ木・平林・和田などの城館跡が多数存在する。

# 第3章 調 査

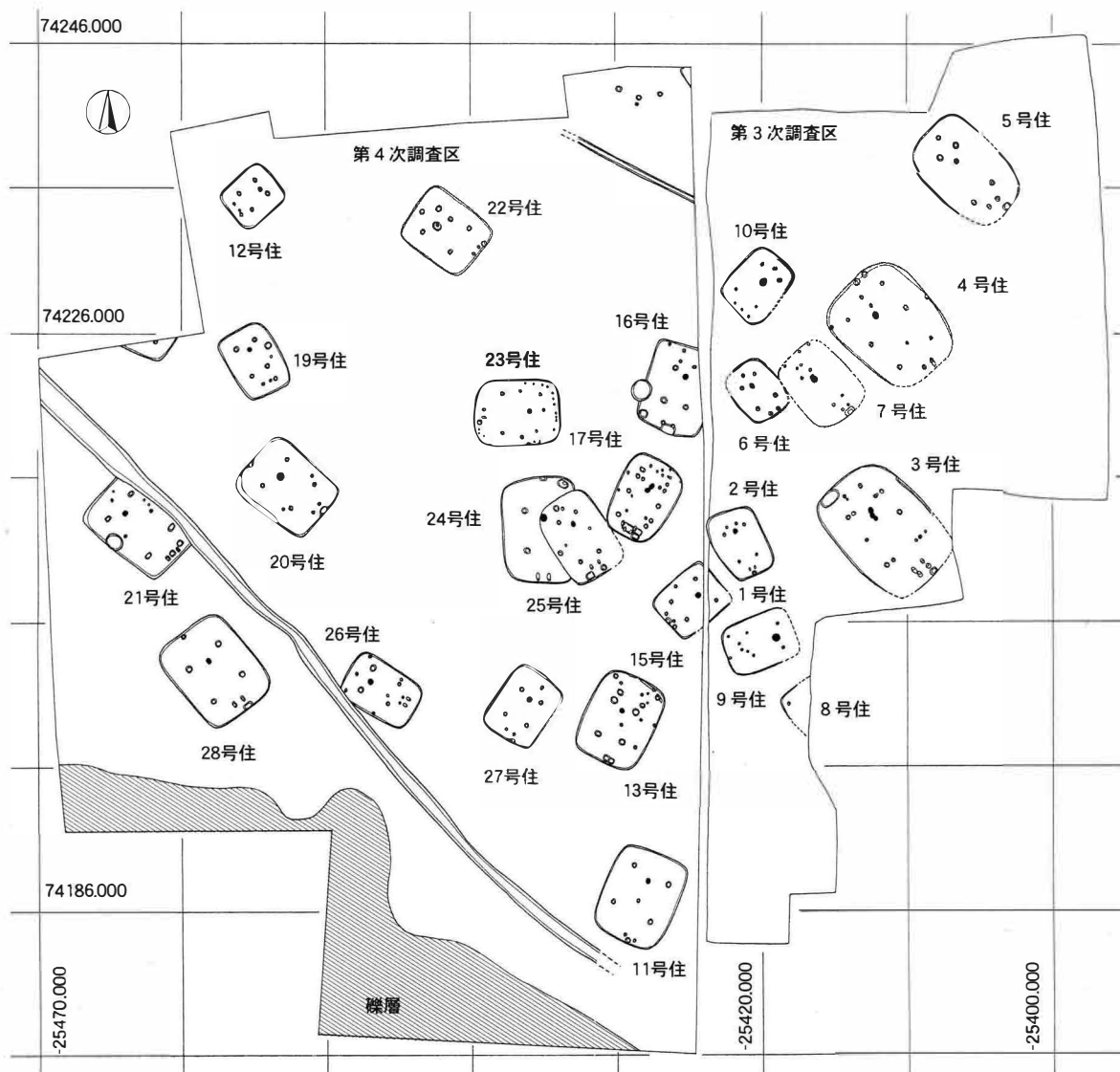
## 1 長野吉田高校グランド遺跡の調査経過

長野市北東部の浅川扇状地には数多くの遺跡が存在し「浅川扇状地遺跡群」と把握されている。この扇状地の扇中央部に位置する長野県長野吉田高等学校においては、昭和45年同校敷地内のプール建設途上において多量の遺物が出土したことにより、遺跡の存在が確認され、それらの出土遺物をもとに弥生時代後期初頭の「吉田式土器」が型式設定されるとともに、「長野吉田高校グランド遺跡」として周知されるにいたった（笹沢 浩 1970「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』第22巻第11号）。

昭和50年には、長野市都市計画北部都市下水路事業に伴う第1次調査、翌51年には第2次調査が実施された。第1次調査においては弥生時代後期初頭の住居址6軒と柱列2が検出され、第1次調査地南半から第2次調査地にかけては遺構の存在が確認できず、遺物包含層が薄くなるとともに、旧地形自体が大きく傾斜する様相が確認されている。（1・2次調査報告はなされておらず代表的な出土土器が長野市立博物館に展示されているのみであったが、遺跡範囲の想定等にも重要な意味を持つため、今回一部再整理を実施した）



第4図 遺跡内調査地点位置図 (1 : 2,500)



第5図 第3次・第4次調査区全測図 (1:500)

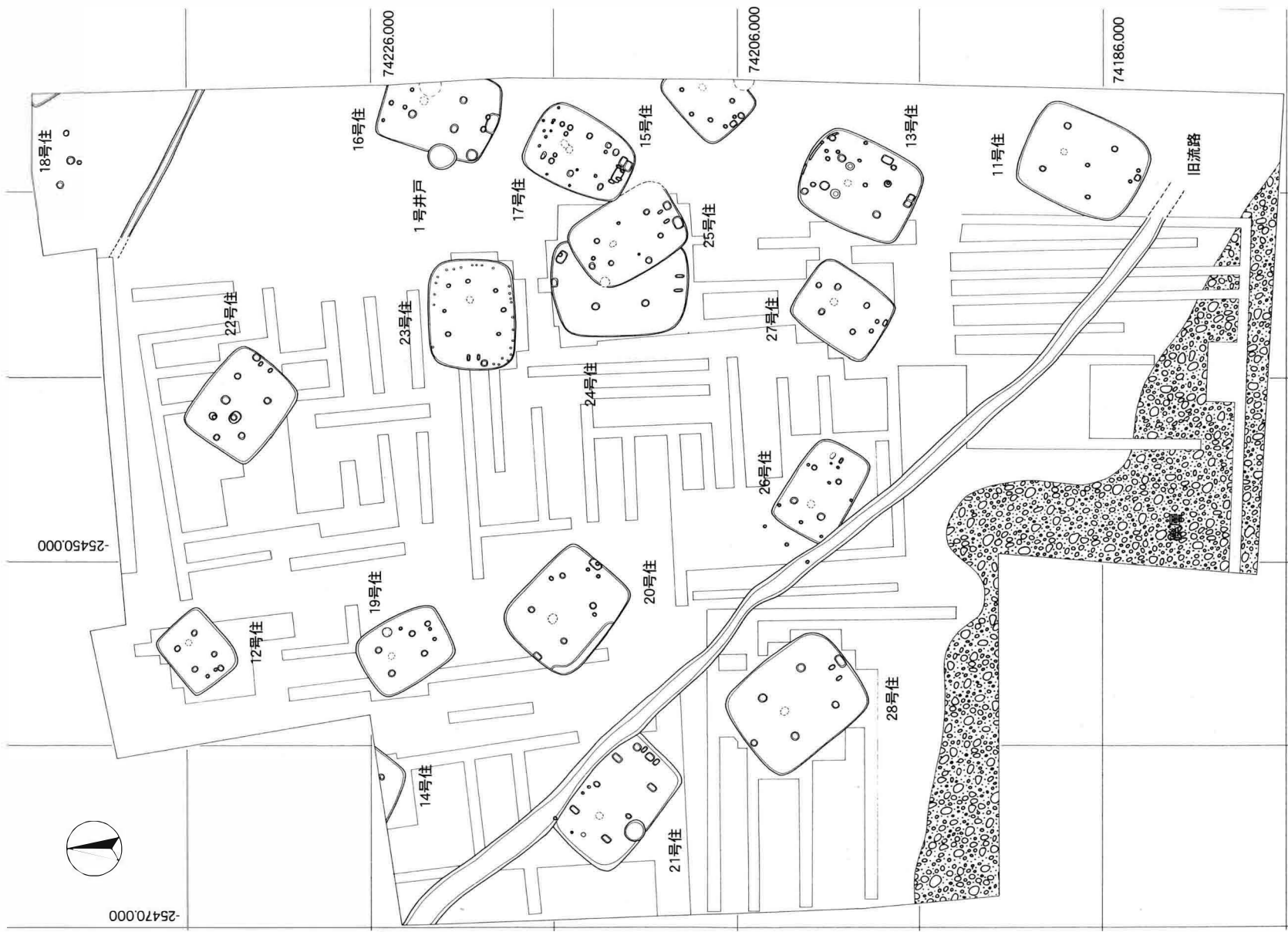
昭和60年には、吉田高校体育館ならびに格技室建設に伴う第3次調査が実施された。本遺跡で初めて面的に行った調査といえ、約1,100㎡にわたる調査で、弥生時代後期初頭の住居址10軒が検出されている。住居の所属時期は「吉田式期」に限定され、若干の時間差は考慮されるものの、ほぼ単相の構造を示す集落遺跡の一部が検出されている。また土器も比較的多量に出土し、型式設定以来、その出土量の少なさから不明瞭さを指摘されていた吉田式土器の型式内容をより具体化したものといえよう（長野市教委 1987『長野吉田高校グランド遺跡』）。

今回報告する第4次調査地は、第3次調査地に西接し、信州大学の農場として利用されていたことより、旧地形に大きな変化が加えられておらず、第3次調査で確認された集落が良好な形で検出されたものといえる。3次調査の1号住居址と同一の住居と考えられる15号住居址を除いて、計17軒の住居址が検出された。遺構どうしの切り合い関係は若干認められるものの、住居址の所属時期は第3次調査同様、後期初頭の「吉田式期」に限定され、第3次調査の成果と合わせ考えるならば、長野県内では現状でもっとも良好な後期初頭の弥生集落の調査例といえよう。また大量の吉田式土器の出土とともに、天王山式系土器やアメリカ式石鏃の出土など、東日本全体の弥生時代研究にとっても重要な問題を投げかける調査となったといえよう。



表1 検出住居址一覧表

	住居No	時期	形態	主軸方向	規模 (m)	面積 (㎡)	炉	炉縁石	主柱配置	出入口施設	遺物投棄	その他の施設・備考
第3次調査	1号住居址	弥生後期										4次15号住居址と同一
	2号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-24°-W	5.00×3.60	14.8	地床炉		4本長方形	○	○	
	3号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-42°-W	9.40×6.50	51.7	地床炉		6本長方形	○	○	ベッド状遺構、建替え
	4号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-44°-W	8.20×6.60	46.1	地床炉		4本長方形	○	○	
	5号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-46°-W	7.90×5.10	34.7	地床炉		4本長方形	○		
	6号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-42°-W	4.30×3.40	11.6	地床炉		4本長方形	○	○	
	7号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-45°-W	5.70×4.40	21.6	地床炉	○	4本長方形	○	○	
	8号住居址	弥生後期	(隅丸長方形)									
	9号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-64°-E	5.10×3.80	16.8	地床炉	○	4本長方形	○		
	10号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-42°-E	4.90×3.90	15.8	地床炉	○	4本長方形	○		
第4次調査	11号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-28°-E	6.70×5.30	30.5	地床炉		4本長方形	○	○	
	12号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-51°-E	3.90×3.30	11.3	地床炉		4本長方形	○	○	
	13号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-27°-E	6.50×5.00	27.4	(地床炉)		4本長方形			工作ピット、壁周溝、建替え
	14号住居址	弥生後期	隅丸長方形?									
	15号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-48°-E	4.75×3.80	16.0	地床炉		4本長方形	○		3次1号住と同一
	16号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-18°-E	6.40×(4.80)	(27.5)	地床炉		4本長方形	○		
	17号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-28°-E	5.90×4.30	21.0	地床炉		6本長方形	○		建替え
	18号住居址	弥生後期										
	19号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-30°-W	5.10×3.70	15.7	地床炉		4本長方形	○	○	
	20号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-41°-W	6.40×5.10	28.1	地床炉	○	4本長方形	○		ベッド状遺構
	21号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-48°-W	7.15×(5.10)	(29.5)	地床炉		6本長方形	○		
	22号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-52°-W	5.40×4.50	21.6	地床炉		4本長方形	○	○	
	23号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-89°-E	6.00×4.75	24.5	地床炉		4本長方形	○	○	
	24号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-1°-E	7.50×5.20	33.7	地床炉	○	4本長方形	○		
	25号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-35°-W	6.00×4.20	22.6	地床炉		4本長方形	○		
	26号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-60°-W	5.40×3.60	17.2	地床炉		4本長方形	○		
	27号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-35°-E	5.10×4.10	18.5	地床炉		4本長方形	○		
	28号住居址	弥生後期	隅丸長方形	N-38°-W	7.10×5.70	35.6	土器埋設炉	○	4本長方形	○		



第6図 第4次調査区全測図 (1 : 300)

## 2 遺構と遺物

### 11号住居址（第7～11図）

調査区南東端で検出された住居址で、本住居址より南側は旧地形の落ち込みに伴う礫層となり、住居等の遺構は検出されていない。また遺物包含層自体もそれに伴って希薄化し、遺跡範囲の南端を示すものかと思われる。

平面プランは隅丸長方形を呈し、短辺はともにやや胴張りぎみとなる。規模は長軸6.70m、短軸5.30m、床面積は約30.5㎡を測り、住居址主軸は北東方向に取る。他遺構との切り合い関係はない。

覆土は黒褐色粘質土の単層で、奥壁側は20～25cm前後、入口側は5cm前後の堆積が認められた。覆土内からは拳大の自然礫（河原石が多い）と多量の土器破片が混在して出土しており、廃絶後の住居址内に一括投棄された状況で出土している。

床面の状況は全体に非常に不明瞭で、特に入口側は地山の礫層を掘り抜いて構築されているために、判然としないものである。貼り床や特に固く締まった部分等は確認されていない。

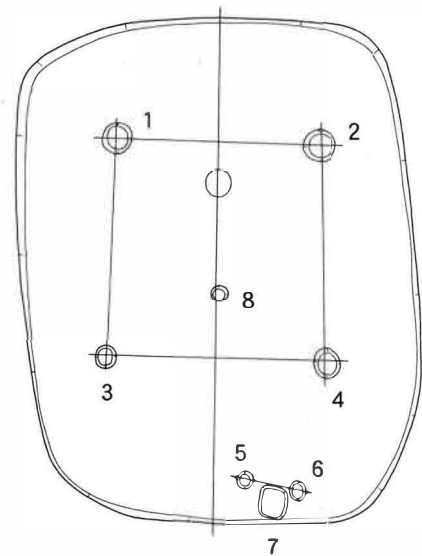
主柱穴（P1～P4）は4本長方形配列で、短辺2.7～3.0m、長辺2.9～3.0mに配列される。P7は出入口施設のはしご受け穴と考えられ、P5・P6の2本一対の小ピットが伴うが、出入口施設としては住居主軸より大きく東側にずれ、特異である。住居主軸

上にP8のような小ピットも存在するが、床面の不明瞭さを考慮するなら、他にも支柱的な小ピットが存在した可能性は高い。

炉は地床炉で、奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、直径35cm、深さ5cm程の掘りこみで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されている。

出土遺物には、土器（図9～11）の他、覆土内より流紋岩製のアメリカ式石鏃2点（379A・B）、有孔磨製石鏃2点（381・382）、同未製品1点（380）、ヒスイ製小型勾玉未製品1点（383）砥石2点（386・387）、石錐1点（384）が、また床面直上より環状石斧未製品1点（385）が出土している。

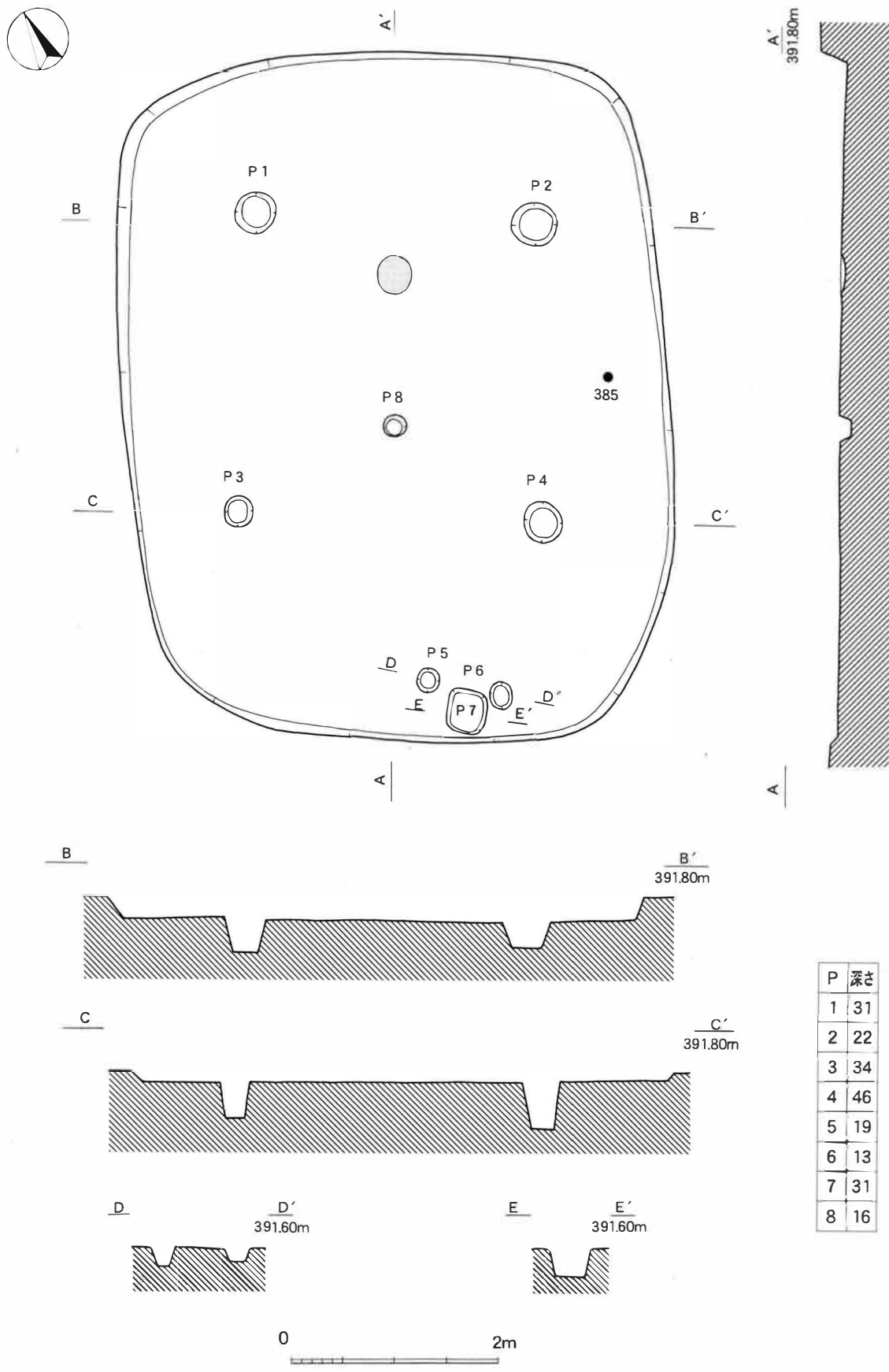
床直上や柱穴内出土の数点の土器を除いて、住居址埋没過程に廃棄された遺物と位置づけられる。



第7図 11号住居址（1：100）



11号住居址



P	深さ
1	31
2	22
3	34
4	46
5	19
6	13
7	31
8	16

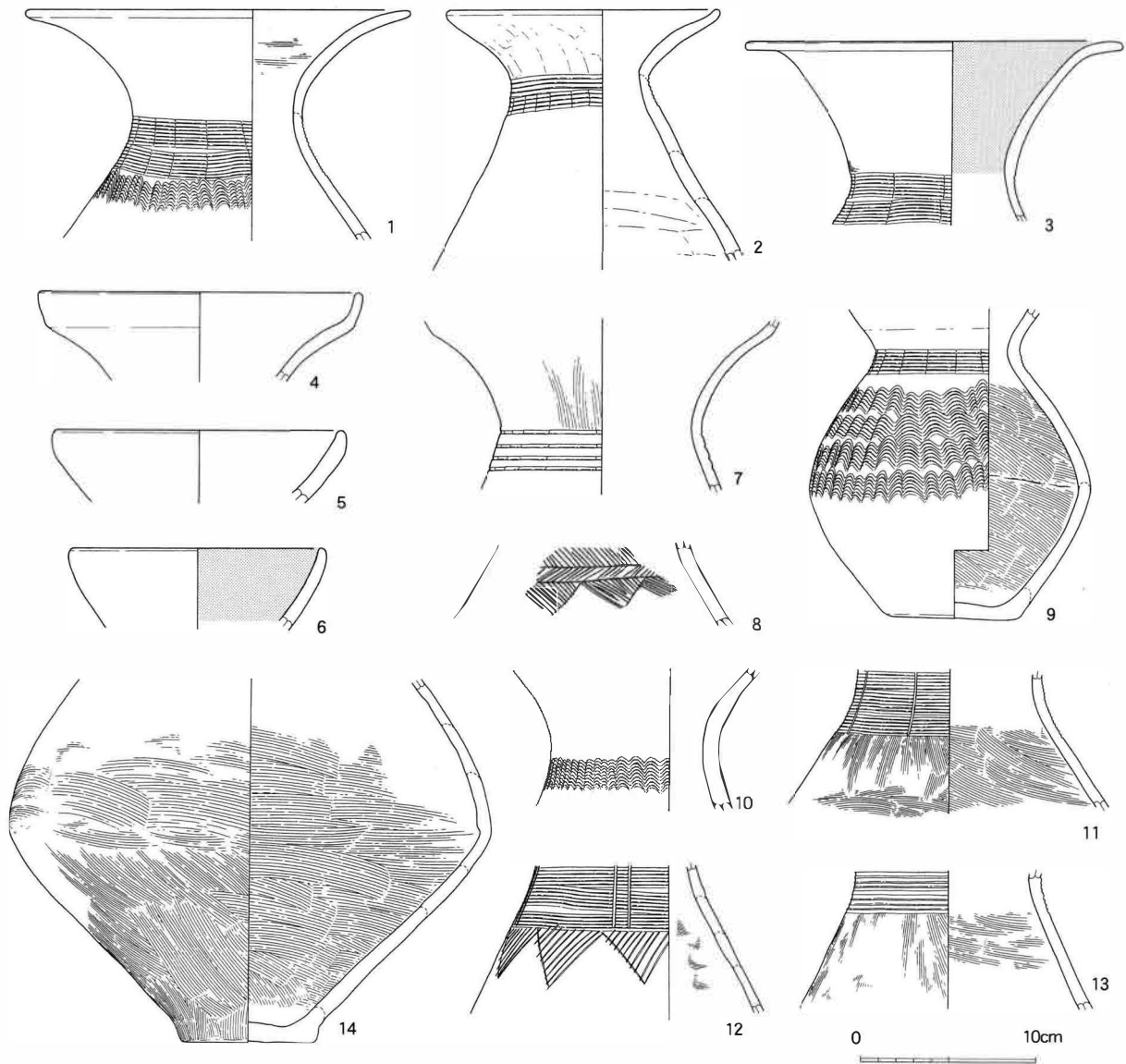
第8図 11号住居址実測図 (1:60)



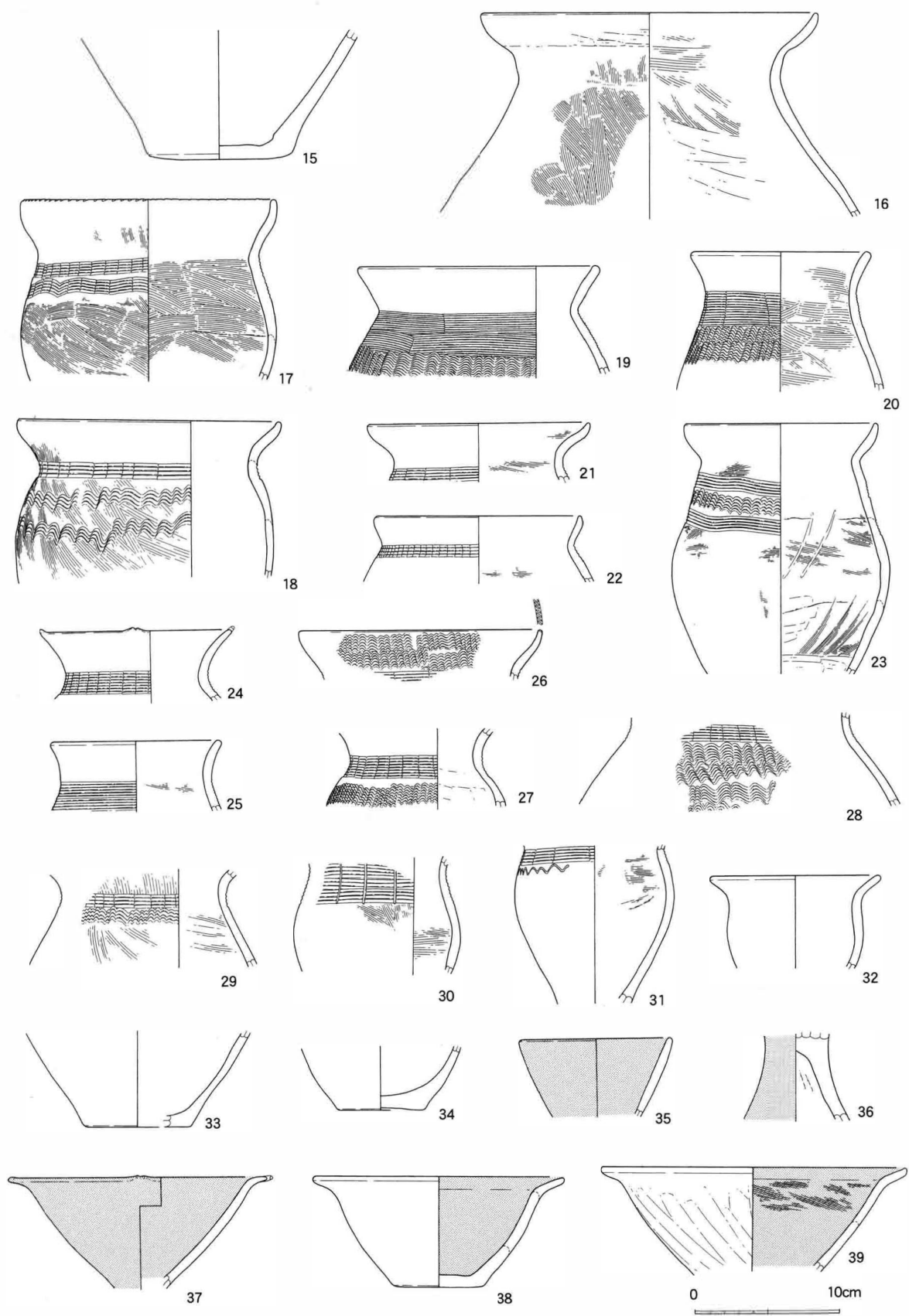
11号住居址柱穴内土器出土状况



11号住居址環状石斧未製品出土状况

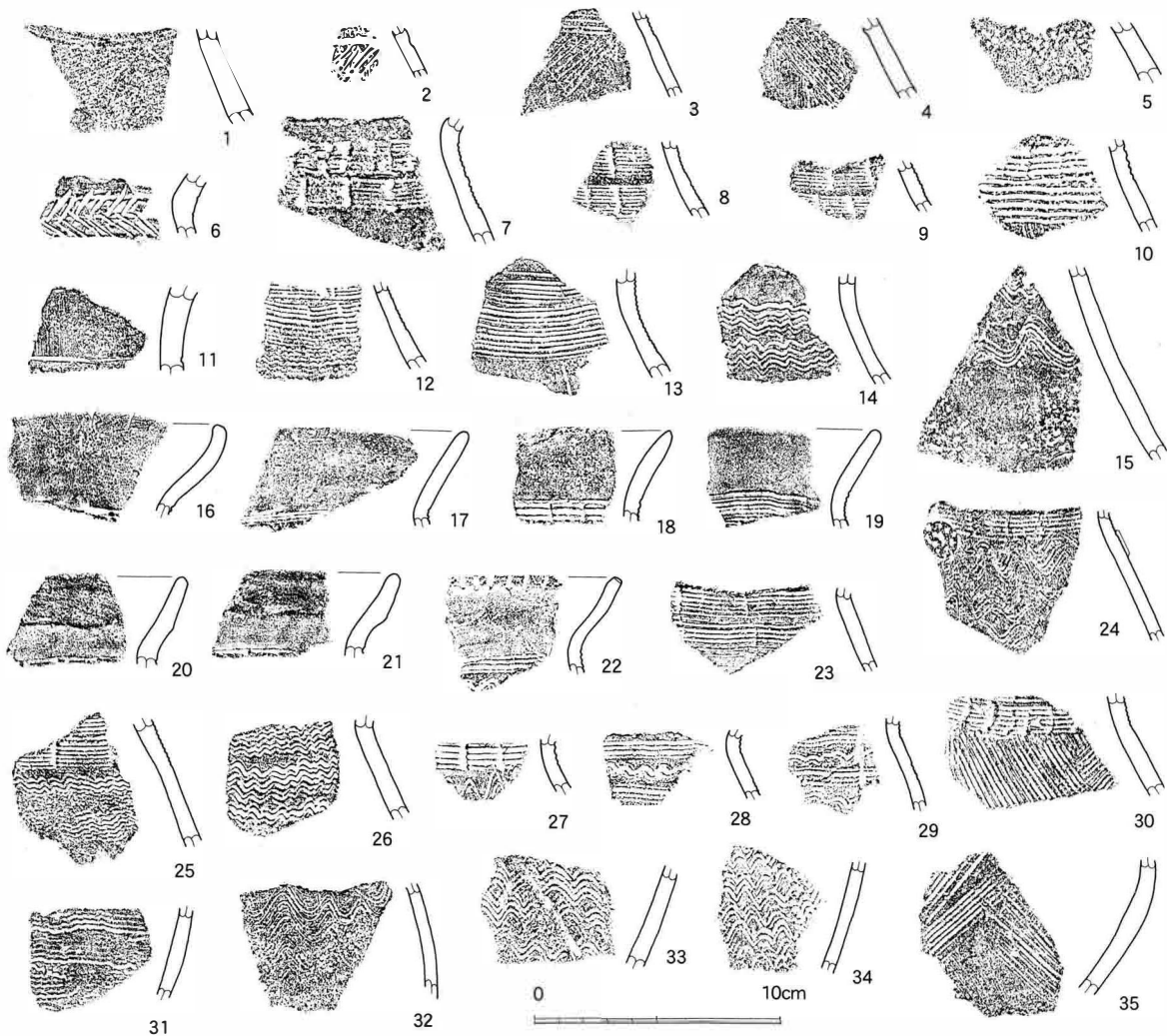


第9图 11号住居址出土土器实测图① (1:4)



第10图 11号住居址出土土器实测图② (1:4)





第11図 11号住居址出土土器拓影（1：3）

12号住居址（第12～16図）

調査区北西端で検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。本住居址より以北では、遺物包含層が漸移的に消失する状況が確認されており、遺跡範囲の北西端付近に位置する住居址と考えられる。

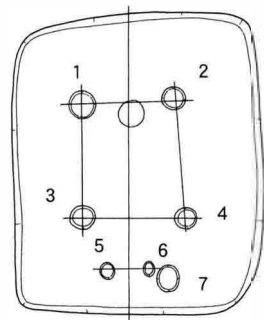
平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.90m、短軸3.30m、床面積は11.3㎡を測り、今回検出された住居址の中では最小のものである。住居址主軸は北東方向に取る。

覆土は黒褐色粘質土の単層で、確認面からの掘り込みは平均15cm前後である。

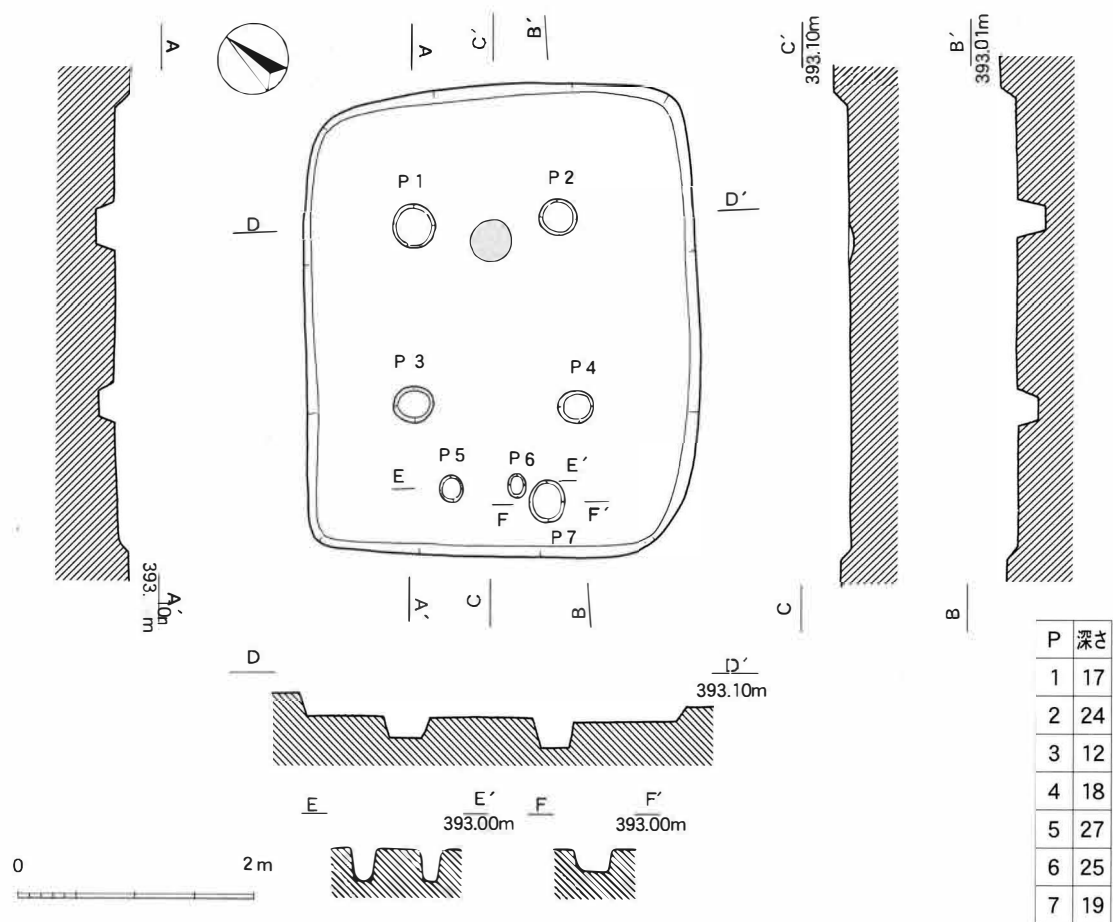
覆土内からは拳大～人頭大の自然礫とともに、多量の土器群が出土しており、これらは住居址埋没過程に廃棄されたものと考えられる。

床面は地山の礫層を掘り抜いて構築されており、きわめて不明瞭で柱穴・地床炉等の検出をもって床面と判断した状況である。全体に軟弱で、貼り床や固く締まった部分は確認されていない。

主柱穴（P 1～P 4）は4本長方形配列で、短辺1.25～1.40m、長辺1.50～1.60mに配列される。P 5・P 6は出入り口施設に伴う2本一対の小ピットと考えられ住居址主軸上に位置するが、はしご受け穴は認められない。P 7は、P 5・P 6の



第12図 12号住居址(1:100)



第13図 12号住居址実測図 (1 : 60)

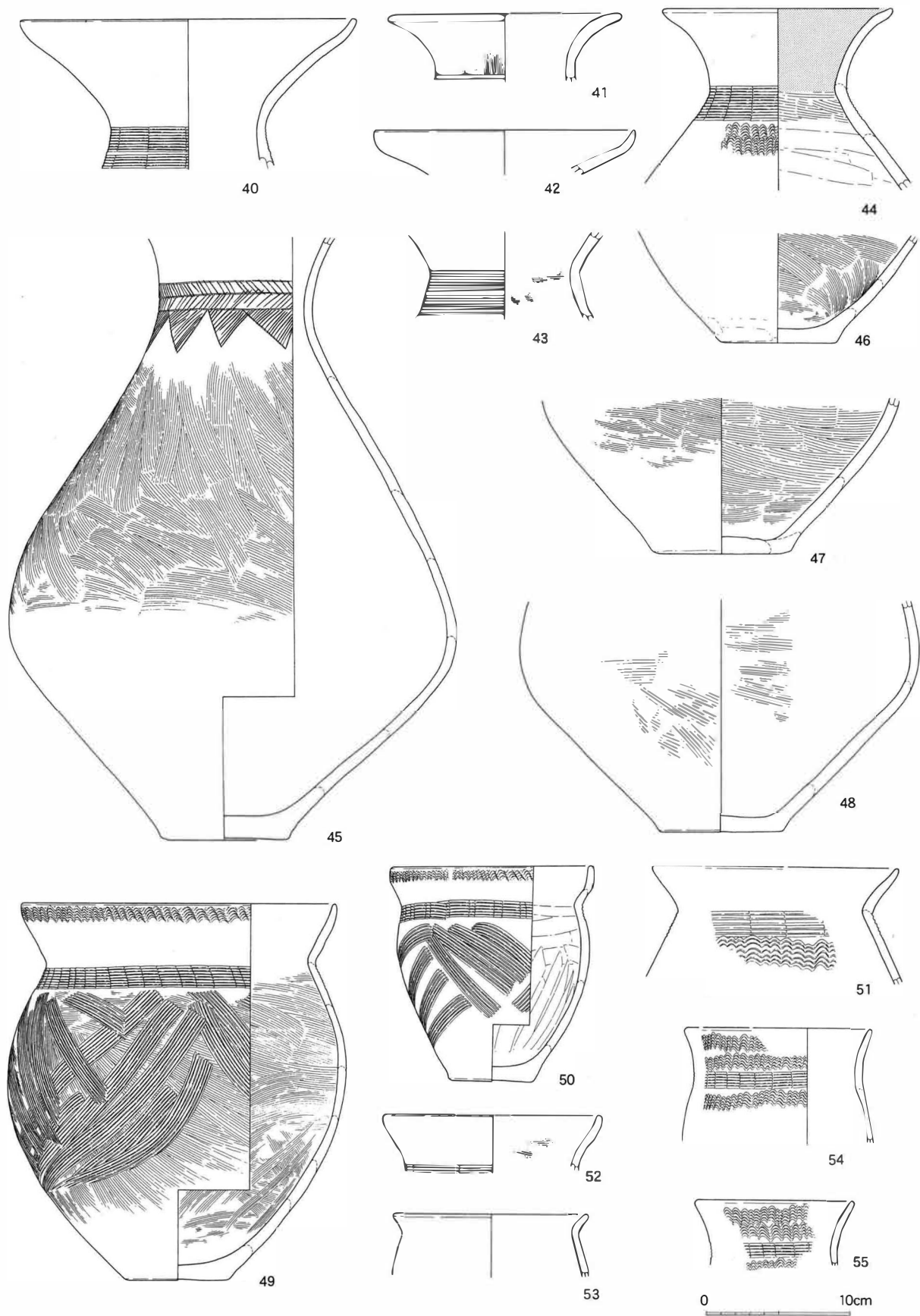
小ピットに付随するピットで、従来貯蔵穴的な機能が想定されてきたピットであるが、貯蔵穴としての機能を想定し得る出土遺物はなく、また規模も小さい。直径30cm、深さ19cmを測る。

炉は地床炉で、奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、直径35cm・深さ3cmほどの掘り込みで、炉底面は火熱を受けているもののさほど焼き締まった状況は認められなかった。出土遺物には土器(第14~15図)がある。出土した土器群のほとんどは、前述のごとく住居廃絶後の埋没過程に投棄されたものと考えられ、床面からの出土遺物はほとんどない。

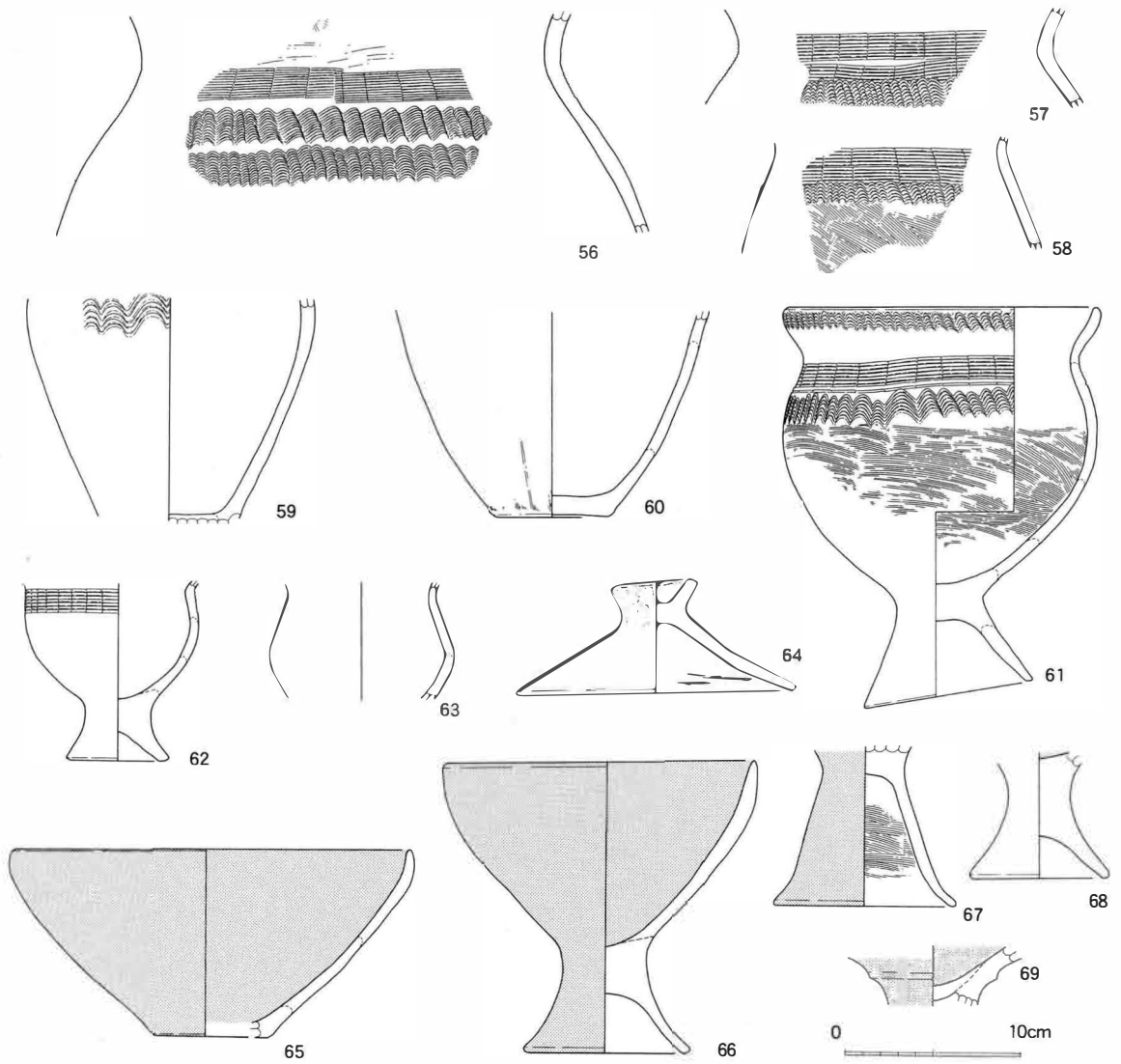


12号住居址

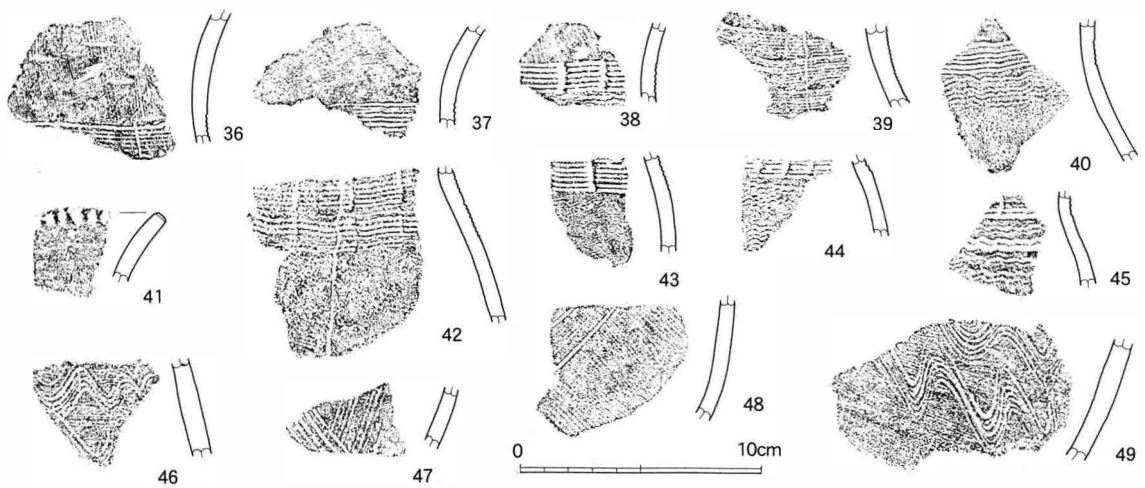




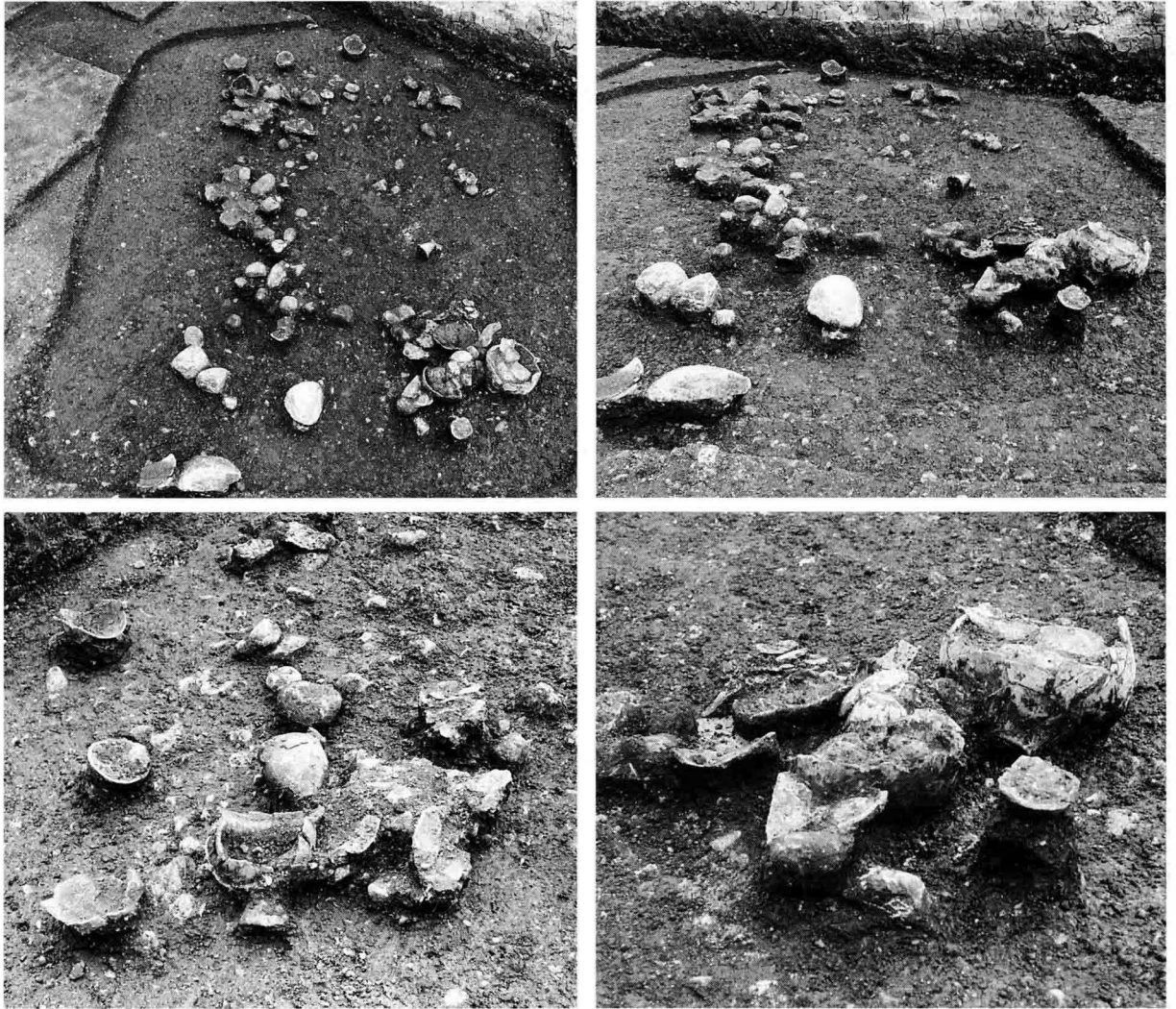
第14图 12号住居址出土土器实测图① (1:4)



第15图 12号住居址出土土器实测图② (1 : 4)



第16图 12号住居址出土土器拓影 (1 : 3)



12号住居址遺物出土状況

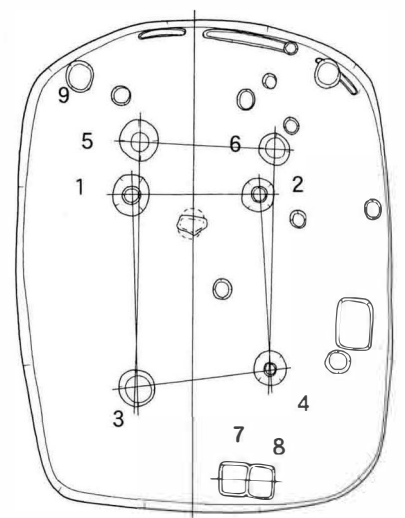
13号住居址 (第17~20図)

11号住居址の北側で検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。工事工程との関係から、住居址南西隅は同時に調査を実施し得なかったが、最終的に図面上で一軒の住居址と判断されたものである。

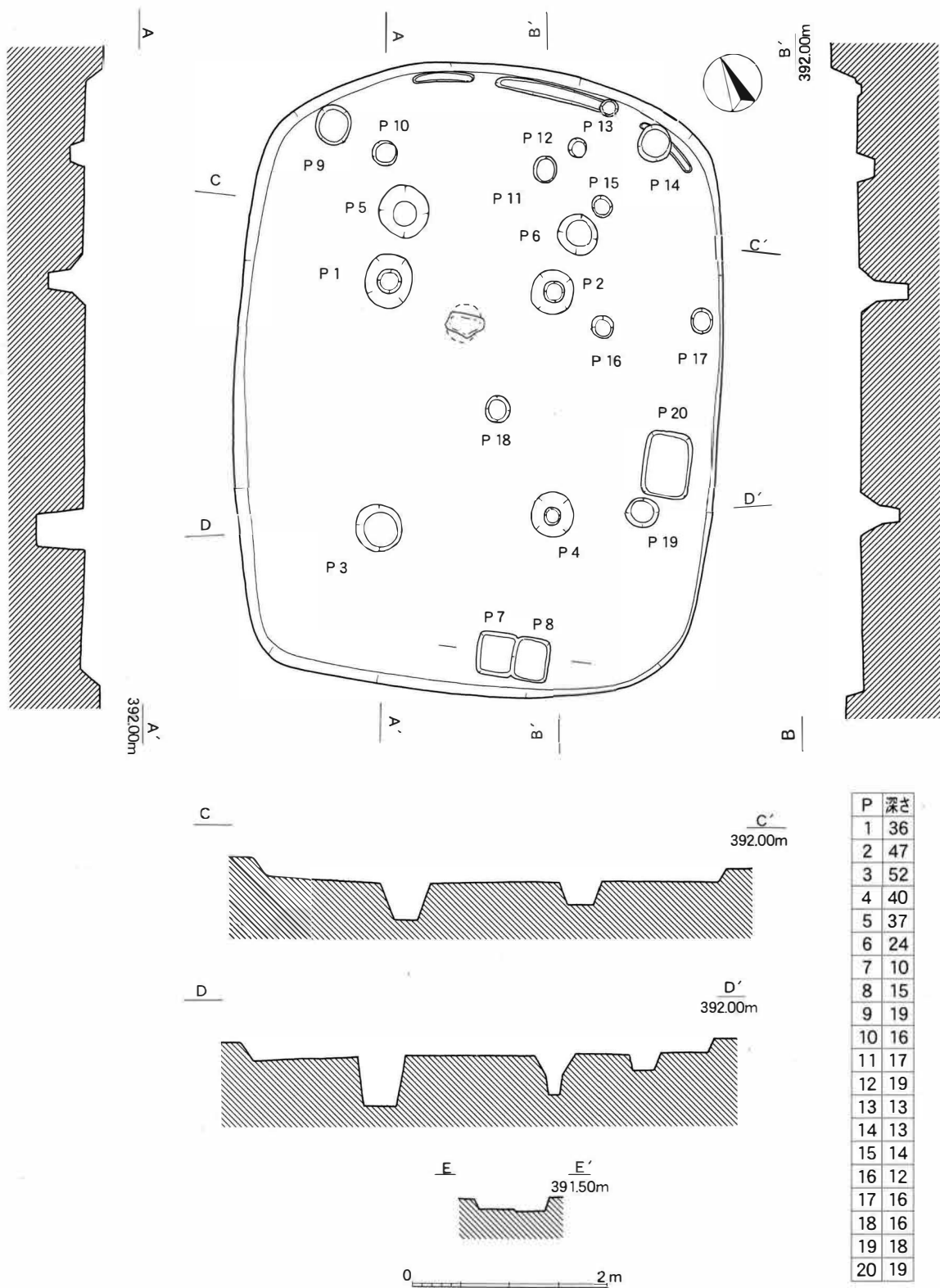
平面プランは隅丸長方形を呈するが、奥壁側の短辺はやや胴張りぎみとなる。規模は長軸6.50m、短軸5.00m、床面積は27.4㎡を測り、住居址主軸は北東方向に取る。覆土は黒褐色粘質土の単層で、全体に平均して20~25cm前後の堆積が認められた。

床面の状況は、入口側および住居址西側は地山の礫層を掘り抜いて構築されており、不明瞭なものであったが、奥壁から住居址中央付近にかけては、色調の上では比較的明瞭なものであった。ただし、全体に軟弱で、貼り床や固く締まった部分は確認されていない。

主柱穴はP1~P4の4本長方形配列と、P3~P6の4本長方形配列の二組が認められ、前者は短辺1.70~1.80m・長辺2.30~2.50m、後者は短辺1.80m・長辺2.90~3.20mに配列され建て替えもしくは拡張の結果と想定される。P7・P8は、ともに一辺35~40cmの方形のピットで、深さ10



第17図 13号住居址(1:100)



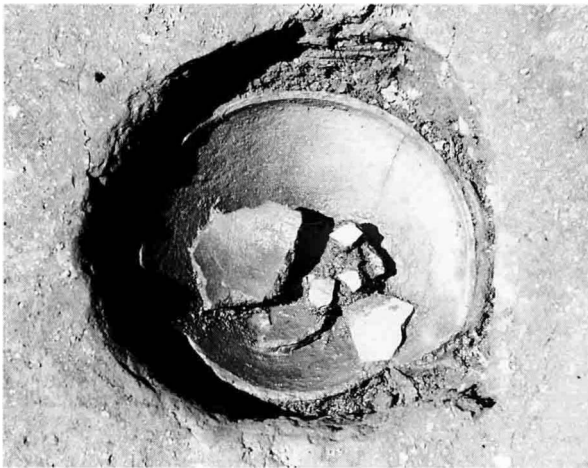
第18図 13住居址実測図 (1 : 60)

~15cmを測るが、2本一対の支柱を伴わないものの、それぞれが出入り口施設に関連するピットと考えられ、主柱にみられる二重構造同様、建て替えもしくは拡張の結果を示すものととらえられる。



13号住居址

住居址北西隅に位置するP 9は、径35cm、深さ19cmを測る円形の掘り込みで、内部には甕形土器破片（84）を敷き、さらにそのうえに壺胴部下半（79）を埋置していた。覆土内からは、アメリカ式石鏃の素材と考えられる流紋岩の剥片が多量に出土しており、工作ピット的な性格が想定される。吉田式期の住居址で工作ピットが確認されたのは、本例が初例であろう。また覆土中層から下層にかけてであるが、住居址南西隅から同様に流紋岩の剥片が多量に集中して



工作ピット



砥石出土状況

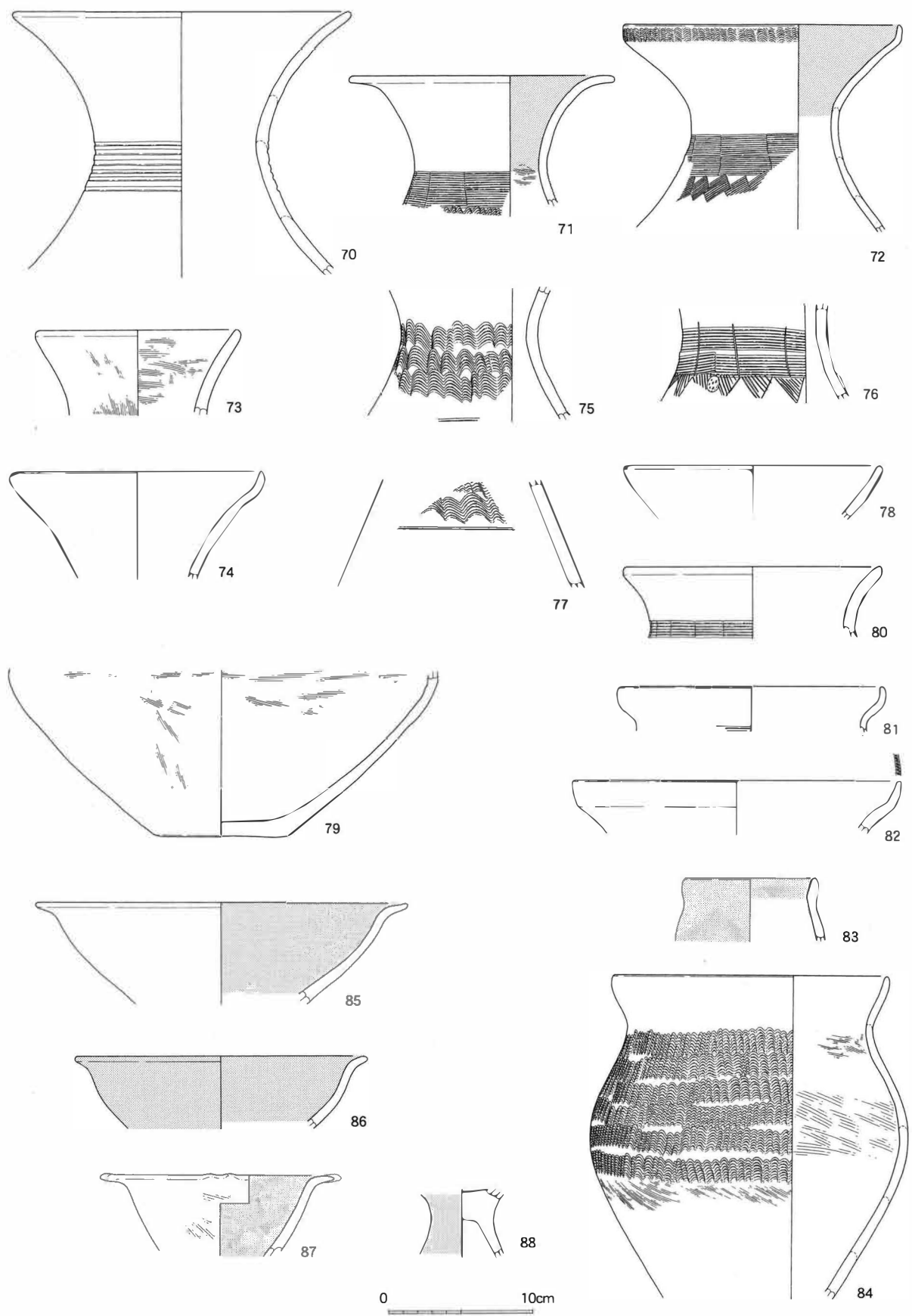


流紋岩原石出土状況

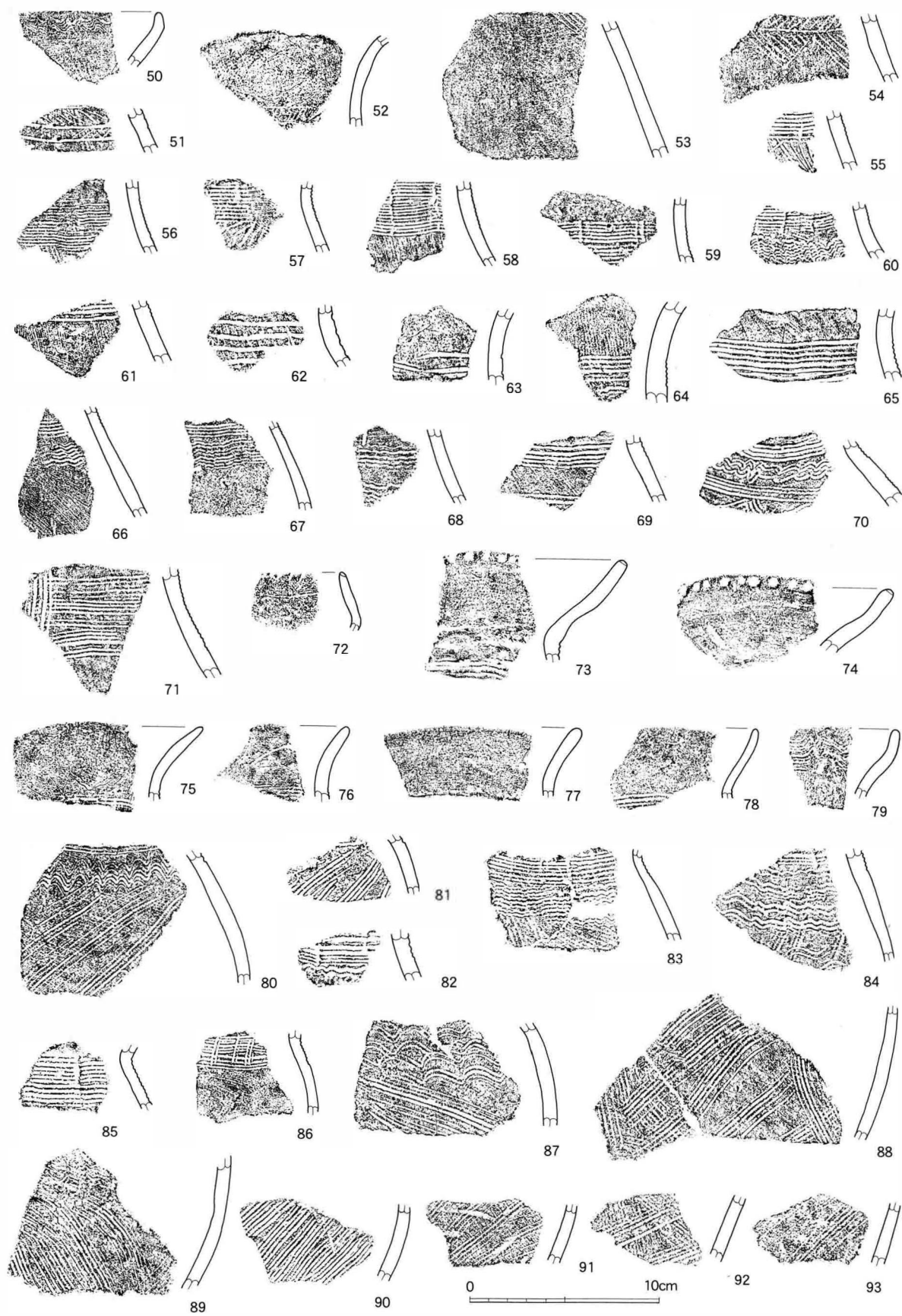


流紋岩剥片出土状況





第19图 13号住居址出土土器实测图 (1:4)



第20图 13号住居址出土土器拓影 (1:3)

出土しており、さらに、原石と想定される流紋岩の石塊も覆土下層より出土している。

炉は、P 1・P 2 間中央やや内側に位置する。径40cmほどの範囲内に焼土が薄く堆積するのみで、底面は焼き締まった状況を呈するわけではなく、常時炉としての機能を果たしていたものとは考えられない。検出時には炉の上面に工作台等を使用されたと考えられる平な河原石が置かれていた点もその傍証となろう。

その他の施設としては、奥壁側部分にのみ、幅12~13cm、深さ5cmほどの周溝が確認されているが全周はしない。P 10~P 19のような小支柱が不規則な状況で検出されており、また、P 20のような方形の掘り込みも確認されているが、出土遺物もなく性格は不明である。

出土遺物には土器（77~88）、砥石（393）、石皿（394・395）、凹石（396）などがある。

#### 14号住居址（第21~22図）

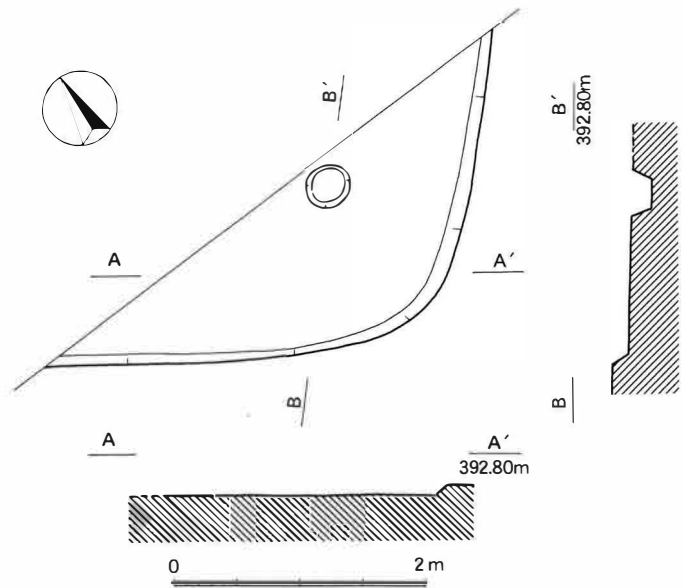
調査区北西端で検出された住居址で、大半が調査区外となり詳細は不明である。

12号住居址同様、遺跡範囲の北西端付近に位置する住居址と考えられる。

住居址南東隅の一部を検出したにすぎず、規模等詳細は不明であるが平面プランは隅丸長方形を呈するものと思われる。住居址主軸方向は不明。覆土は黒褐色粘質土の単層で、平均15cm前後の堆積が認められた。

床面の状況は全体に非常に不明瞭で判然としないものである。貼り床や特に固く締まった部分等は確認されていない。

柱穴は1本のみ確認されているが、深さは13cm程と掘り込みも浅く、支柱穴と考えられるものではない。炉等その他の施設は確認されていない。柱穴上面から東側の壁にかけての覆土内から、土器破片と自然礫が投棄されたような状況で出土しているが、量的には少ない。出土遺物には土器（第22図）がある。



第21図 14号住居址実測図（1：60）

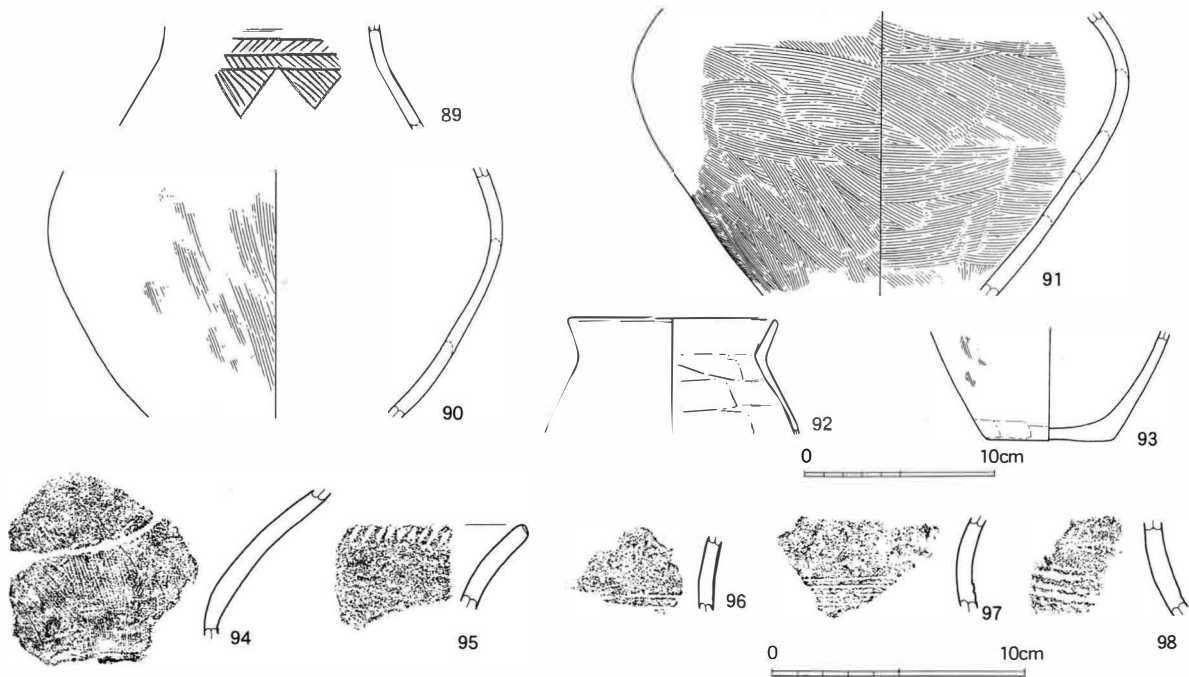


14号住居址



土器出土状況





第22図 14号住居址出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

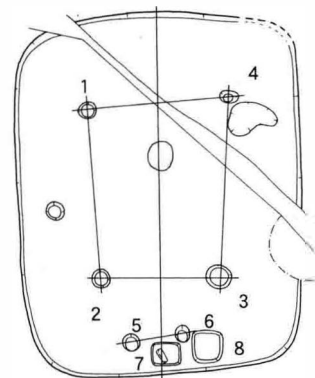
15号住居址（第23～26図）

第3次調査で検出された1号住居址と同一の住居址と考えられる。南側の一部に攪乱を受けるが、他遺構との切り合い関係はない。

平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.75m、短軸3.80m、面積16.0㎡を測るやや小型の住居址である。住居址主軸は北東方向に取る。

覆土は黒褐色粘質土の単層で、平均15cm前後の堆積が確認されている。床面は全体に軟弱ではあるが、地山を掘り抜いているために色調は明瞭なものであった。貼り床や、特に固く締まった部分は認められていない。

主柱穴（P1～P4）は4本長方形配列で、短辺1.60～1.80m、長辺2.20～2.30mに配列される。

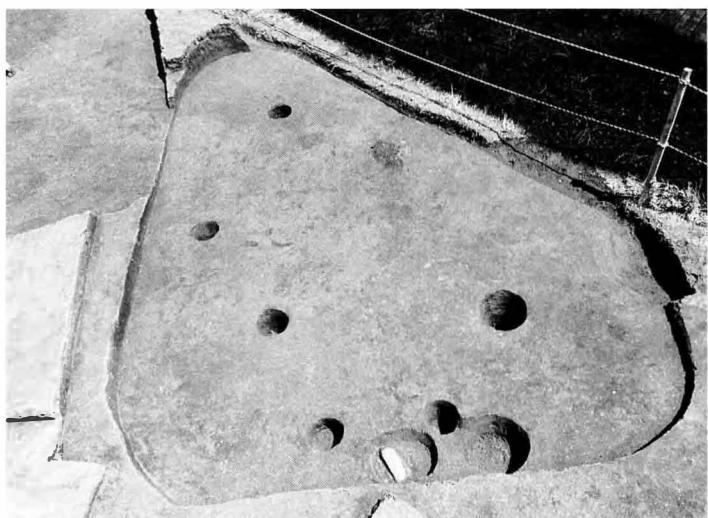


第23図 15号住居址（1：100）

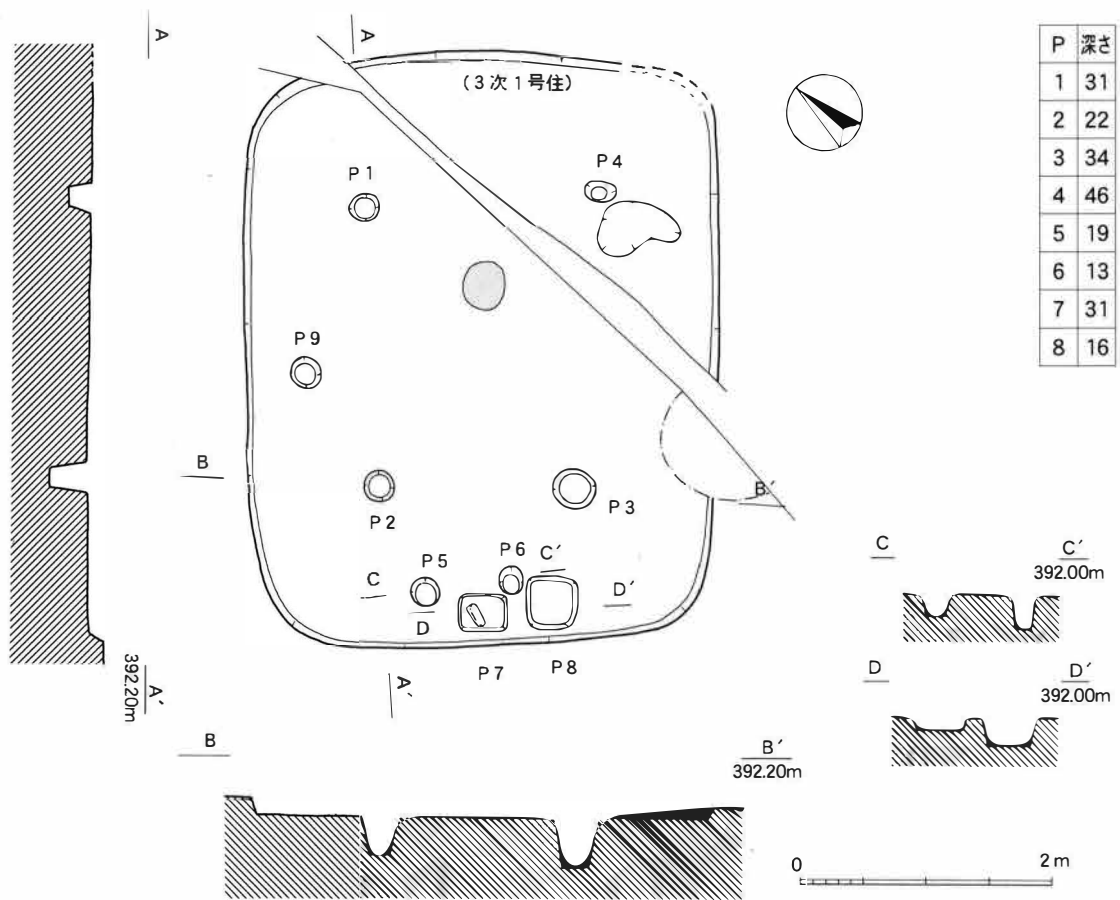
P7は出入り口施設のはしご受け穴と考えられ、P5・P6の2本一対の小ピットが伴い、ほぼ住居址主軸上に位置する。P5～P7の右側には、一辺40cmほどの方形の掘り込みP8が存在する、深さは21cm程を測るが、出土遺物はない。

炉は地床炉で、奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する。直径35cm、深さ5cmほどの掘り込みで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されている。

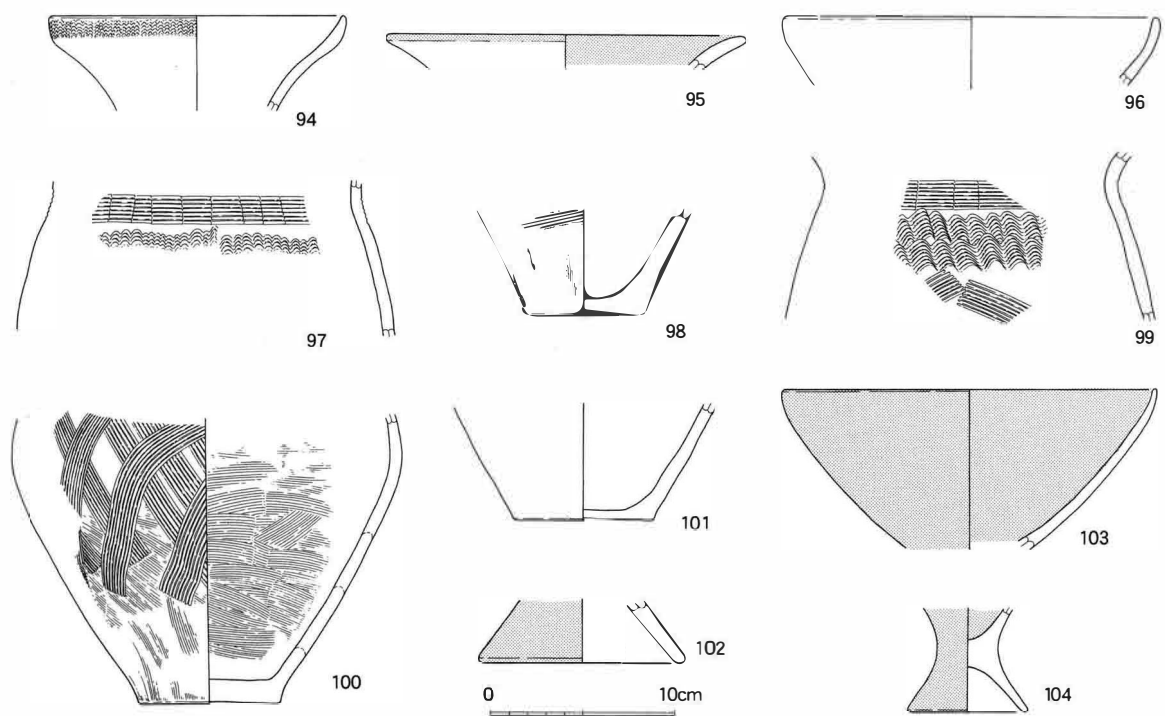
出土遺物には土器（第25～26図）があるが、いずれも覆土内からの出土である。



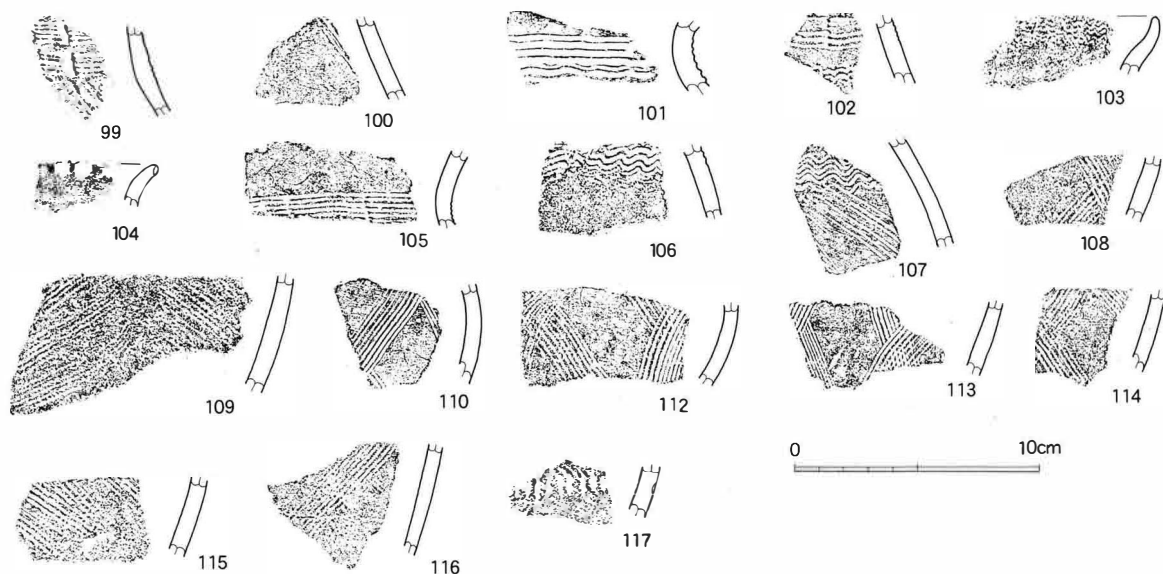
15号住居址



第24図 15号住居址実測図 (1 : 60)



第25図 15号住居址出土土器実測図 (1 : 4)



第26図 15号住居址出土土器拓影 (1:3)

16号住居址 (第27~29図)

調査区北東で検出された住居址で、住居址北東隅1/4程が調査区外となる。弥生時代の井戸址SK1に西壁の一部を切られ、また一部に後世の攪乱を受ける。他住居址との切り合い関係はない。

平面プランは隅丸長方形を呈するが、出入り口側の短辺はやや胴張りぎみに突出する。規模は長軸6.40m、短軸(4.80)m、床面積は(27.5)m<sup>2</sup>を測る。

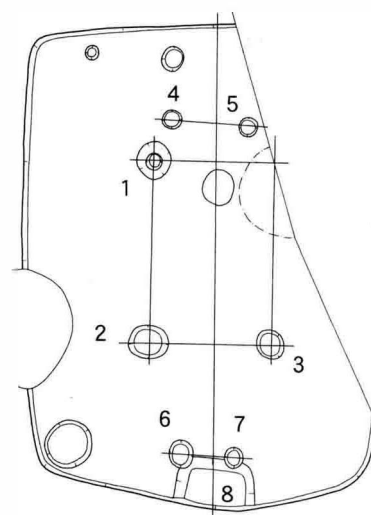
覆土は黒褐色粘質土の単層で、奥壁側は20cm前後、入口側は15cm前後の堆積が認められた。床面より若干浮いた状況で比較的多くの土器と石斧類が出土しており、住居廃絶後に投棄されたものと想定される。

床面は全体に軟弱ではあるが、地山の黄褐色土を掘り込んでおり色調は明瞭であった。貼り床や特に固く締まった部分は認められていない。

主柱穴はP1~P3が検出されているが、4本の長方形配列と想定され、短辺1.70m、長辺2.40mに配列される。主柱配列北側に位置するP4・P5は2本一対をなし、棟持柱的な性格を有する支柱であろうか。P8は出入り口施設のはしご受け穴で、P6・P7の2本一対の支柱を伴い、ほぼ住居址主軸上に位置する。

炉は地床炉で、奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する。直径40cm、深さ5cmほどの掘り込みで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されていた。

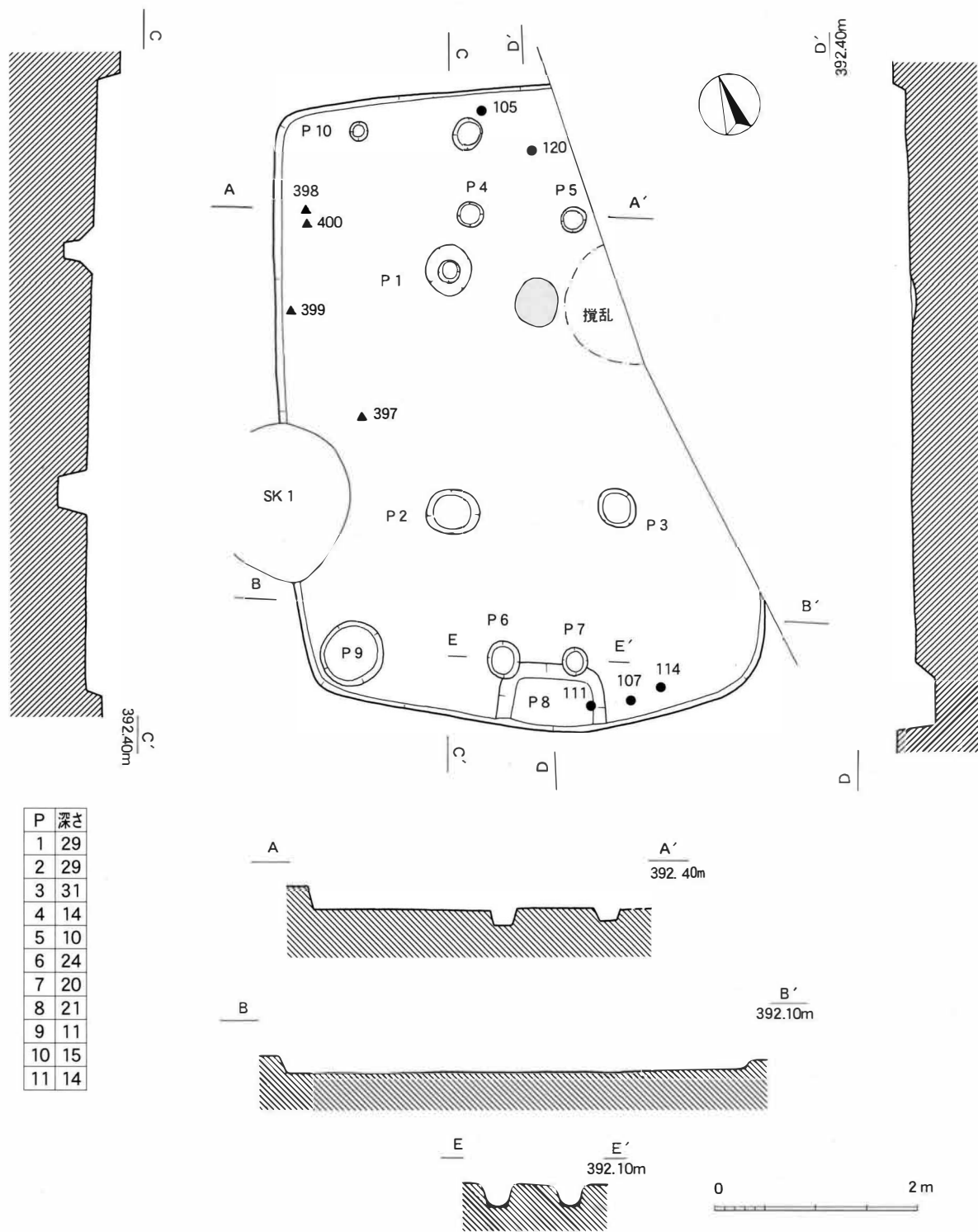
出土遺物には、土器(105~120)、太型蛤刃石斧(400)、扁平片刃石斧(399)、小型勾玉未製品(397)などがある。



第27図16号住居址 (1:100)



16号住居址



第28図 16号住居址実測図 (1:60)

土器は大きく入口側と奥側の壁際付近2か所より比較的まとまって出土している。はしご受け穴と想定されるP8に落ち込むような形で出土した壺胴下半(111)の内部には、土器の製作用と推定される黄白色の粘土が詰められていた。石斧類はいずれも西壁際より出土している。出土状況はみな床面より若干浮いた状況であり、住居廃絶後に投棄されたものと推定される。覆土内より天王山式土器破片が1点出土している(第96図6)。



16号住居址遺物出土狀況



粘土出土狀況



土器出土狀況

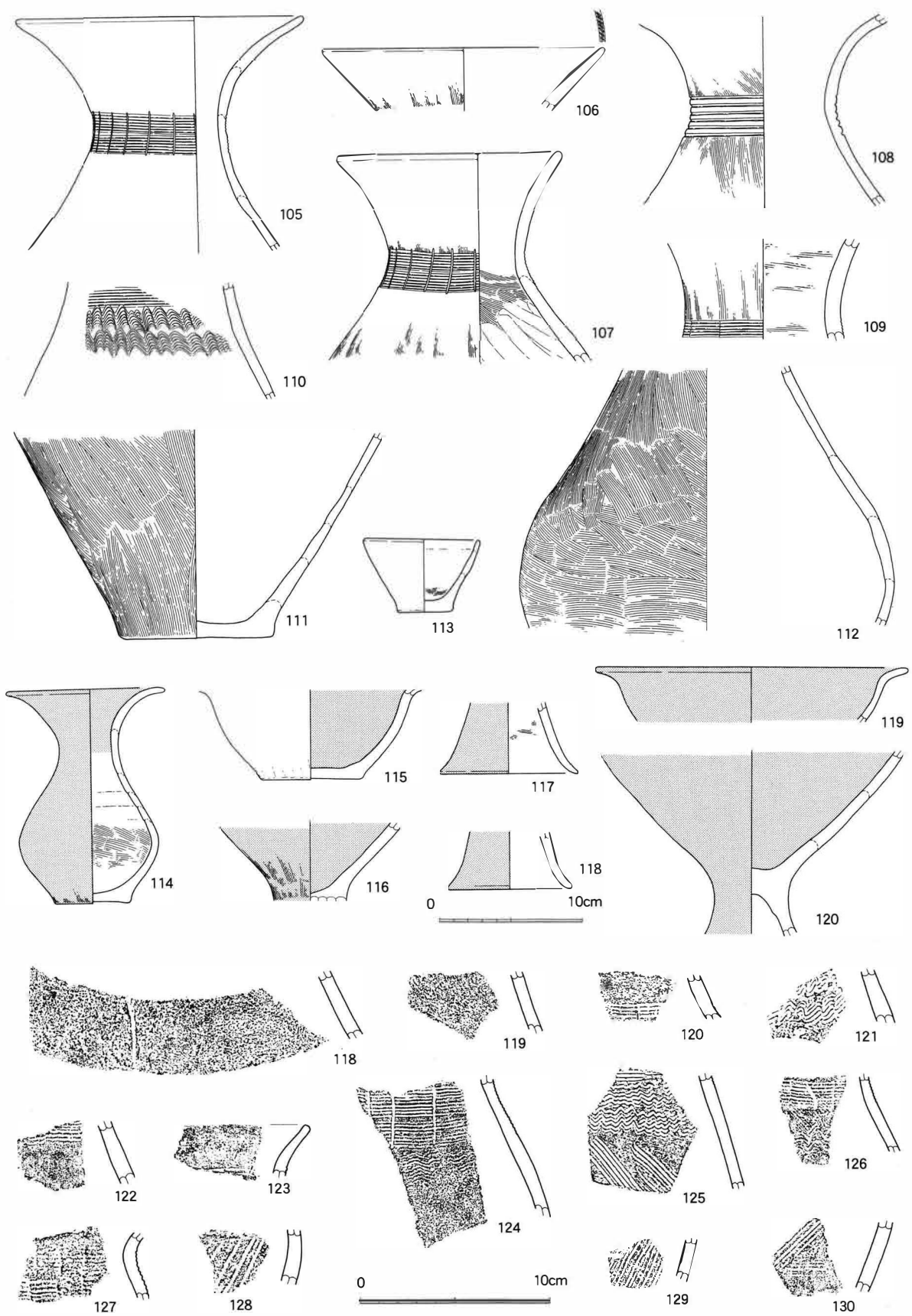


太型蛤刃石斧出土狀況



扁平片刃石斧出土狀況





第29図 16号住居址出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

### 17号住居址 (第30～33)

調査区東側中央付近で検出された住居址で、25号住居址と近接するが、明確な切り合い関係は不明である。

平面プランは隅丸長方形を呈するが、入口側短辺が短くやや不整な形態を呈する。規模は長軸5.90m、短軸3.90～4.30m、床面積は約21.0㎡を測り、住居址主軸は北東方向を取る。覆土は黒褐色粘質土の単層で、15～25cmの堆積が認められた。

床面は全体に軟弱であるが、地山の黄褐色土を掘り込んでおり色調は明瞭であった。貼り床や、特に固く締まった部分は認められていない。

住居址の建て替えもしくは拡張が行われており、柱穴配列は複雑である。

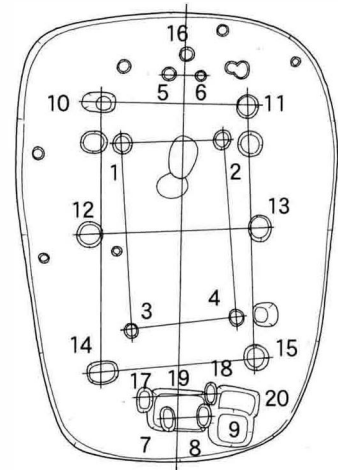
当初の支柱穴はP1～P4の4本長方形配列で、短辺1.30～1.40m、長辺2.

40～2.50mに配列される。支柱配列北側に位置するP5・P6は2本一対をなす小支柱で、棟持柱的な性格を有するものであろうか。P7・P8は出入口施設に伴う2本一対の小支柱で、はしご受け穴は伴わないものの、出入口施設の右側に方形の掘り込みP9を伴う。

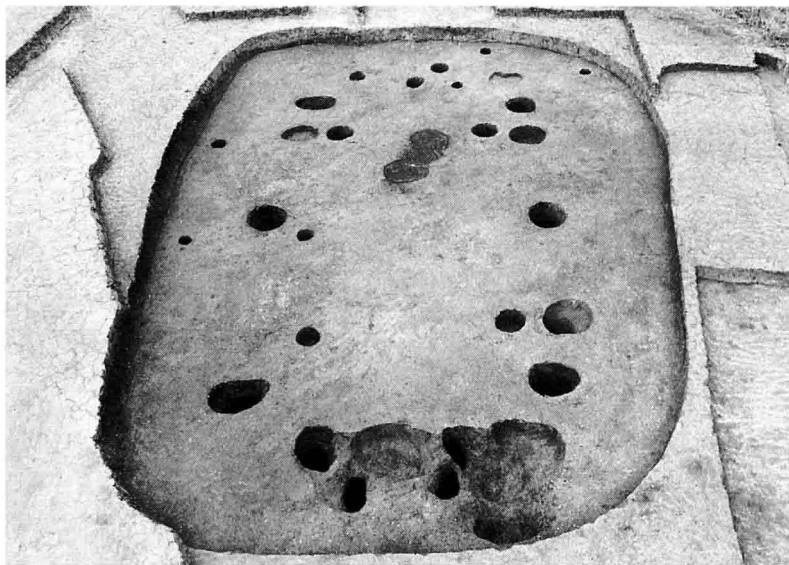
建て替えもしくは拡張後の支柱穴はP10～P15の6本長方形配列で、短辺1.90～2.10m、長辺3.30～3.50mに配列される。長軸中央に位置するP12・P13はいずれも支柱主軸よりやや外側にずれており、P10・11・14・15の4本長方形の支柱穴と、P12・P13の支柱穴といった関係も想定されるが、いずれも掘り込み規模は均一的である。支柱配列北側に位置するP16は棟持柱的な支柱であろう。P19は出入口施設のはしご受け穴で、P17・P18の2本一対の小支柱を伴い、ほぼ住居址主軸上に位置する。また、出入口施設の右側には方形の掘り込みP20を伴う。

炉も建て替えもしくは拡張を反映してか、地床炉が2個検出されている。土層断面の観察より、南側の炉から北側の炉へと時間的に推移するものととらえられ、想定される支柱配列との関連ではともに奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する。南側の炉は長径40cm、北側の炉は長径50cmの楕円形を呈し、掘り込みは5cm程である。底面もともに火熱を受けて、焼土塊が形成されている。

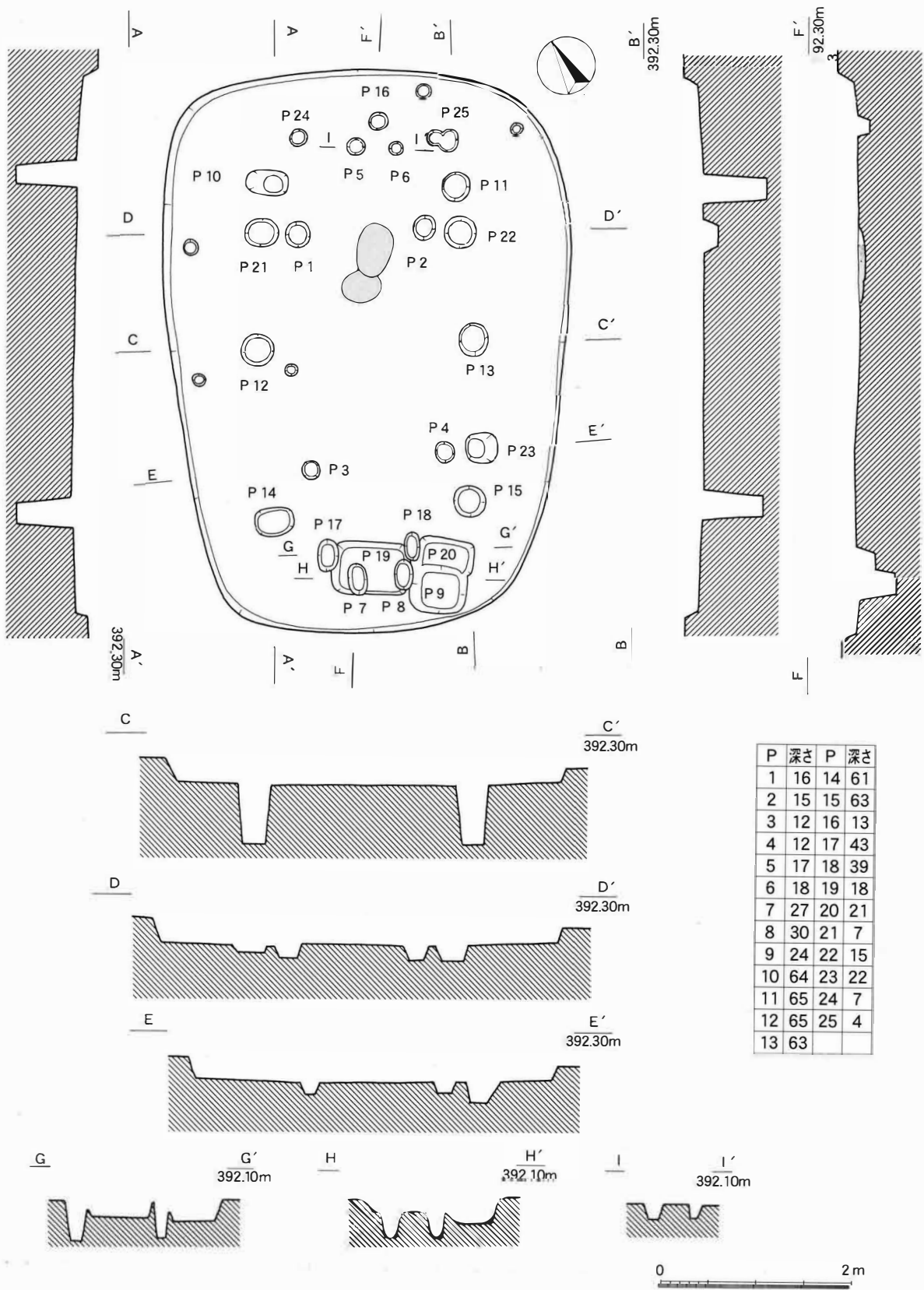
出土遺物には土器(第32～33図)、土製勾玉(第113図13)がある。



第30図 17号住居址(1:100)

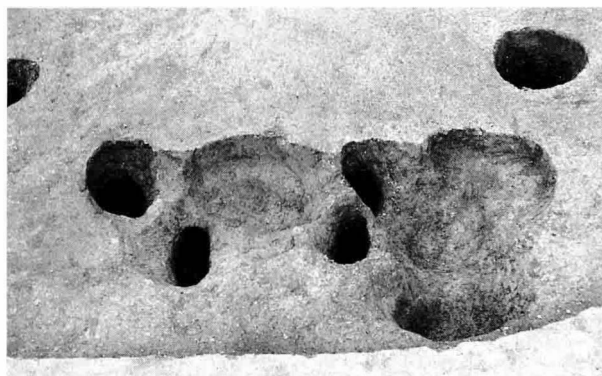


17号住居址



第31図 17号住居址実測図 (1 : 60)

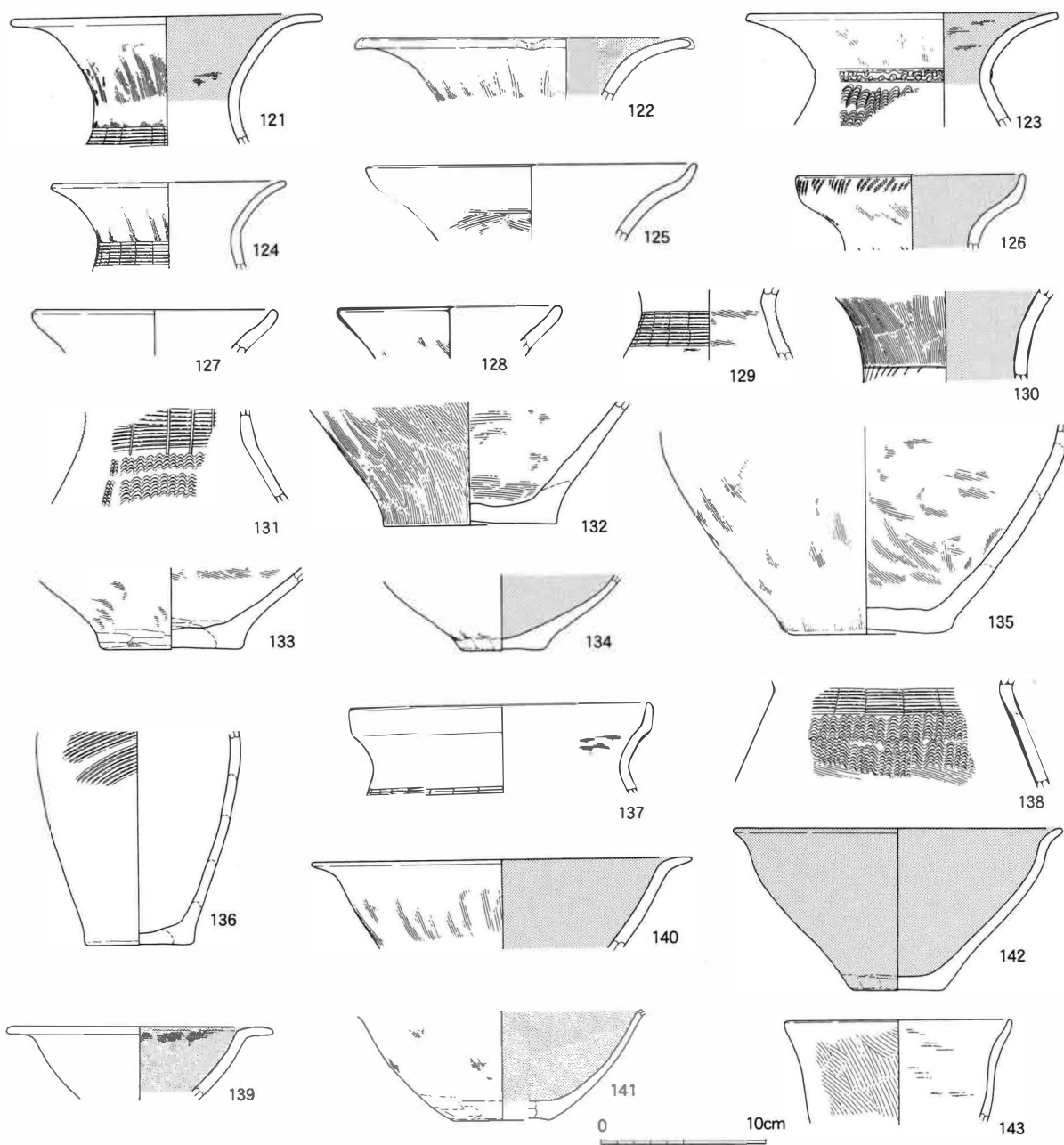




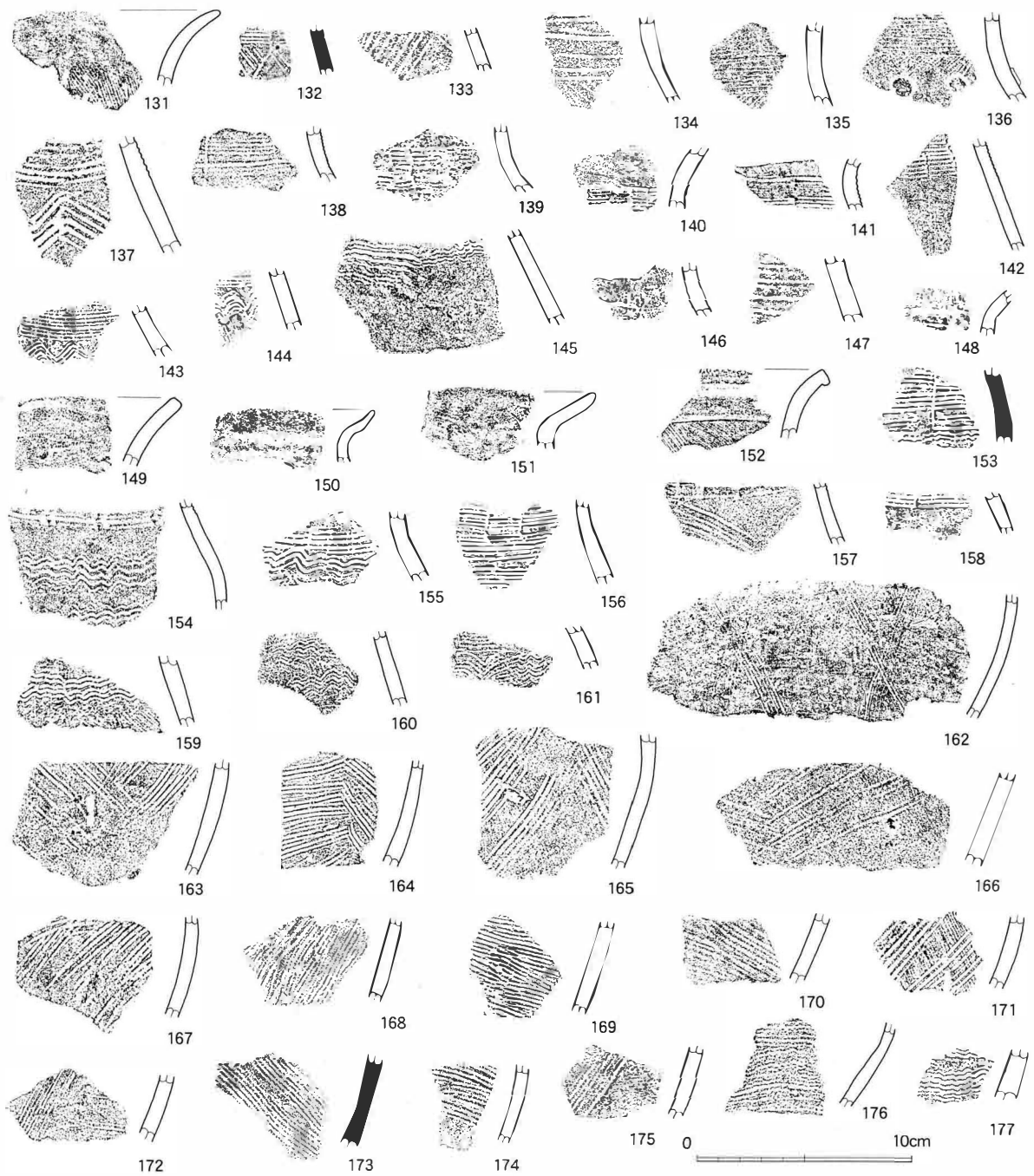
17号住居址出入口施設



地床炉



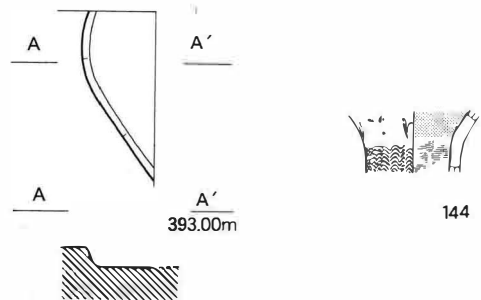
第32图 17号住居址出土土器实测图 (1:4)



第33図 17号住居址出土土器拓影 (1:3)

18号住居址 (第34図)

調査区北東端で検出されたもので、住居址隅のごく一部を検出したのみで、大部分が調査区外である。住居址の規模・主軸方向等詳細は不明である。覆土は黒褐色粘質土層で、確認面からの掘り込みは20cm前後である。床面は軟弱で不明瞭なものであった。住居址覆土内より壺の頸部破片と、有孔磨製石鏃(404)が出土している。



第34 図18号住居址・出土土器実測図

19号住居址 (第35~42図)

平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.10m、短軸3.70m、床面積は約15.7㎡を測る、比較的小型の住居址である。

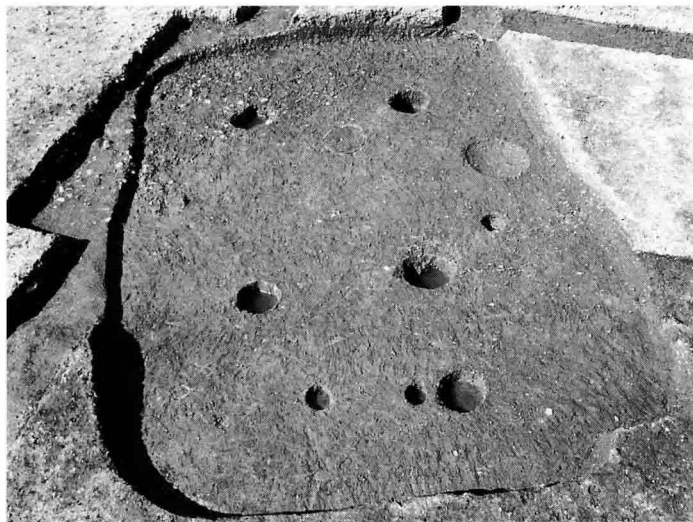
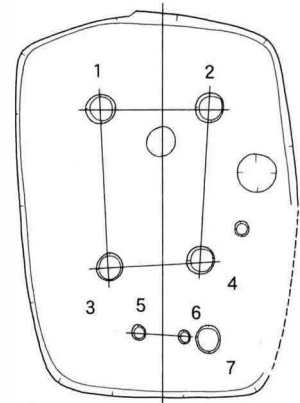
住居址主軸は北西方向に取る。他遺構との切り合い関係はないが、掘り込みの不明瞭さから、東壁の一部を破壊してしまった。覆土は黒褐色粘質土の単層で、残存状況のよい部分では25~30cm前後の堆積が認められた。

床面は地山の黄褐色土を掘り抜いており色調は明瞭であったが、全体に軟弱で、貼り床や固くしまった部分は認められていない。

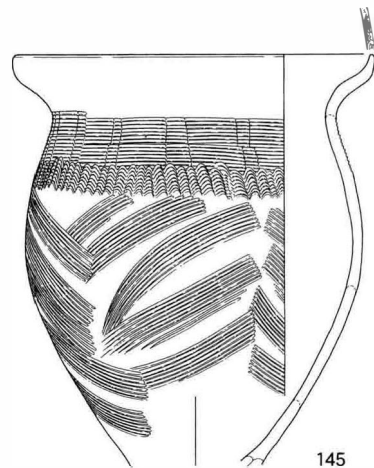
支柱穴 (P 1~P 4) は4本長方形配列で、短辺1.30~1.50m、長辺2.00~2.10mに配列される。P 5・P 6は出入り口施設に伴う2本一対の小ピットで、はしご受け穴は伴わないものの、右側に径30cm、深さ14cmの円形の掘り込みP 7を 第35図 19号住居址(1:100) 伴う。P 7からは特別出土遺物はない。

炉は地床炉で、奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、直径40cm、深さ5cmほどの掘り込みで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されている。

P 3からP 5にかけての覆土下層から床面直上付近にて、アメリカ式石鏃の石材である流紋岩の剥片やチップが集中してかなりの量出土している。その他の出土遺物には土器 (36~39図) がある。



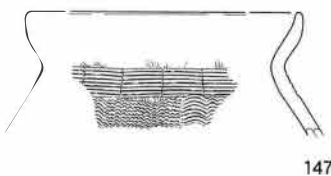
19号住居址



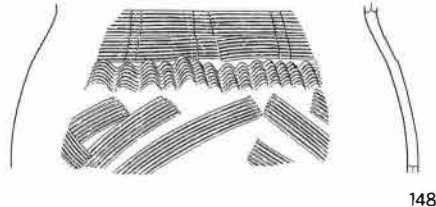
145



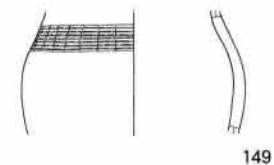
146



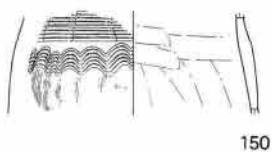
147



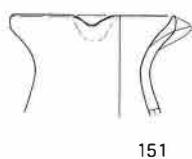
148



149

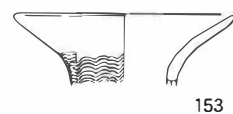


150



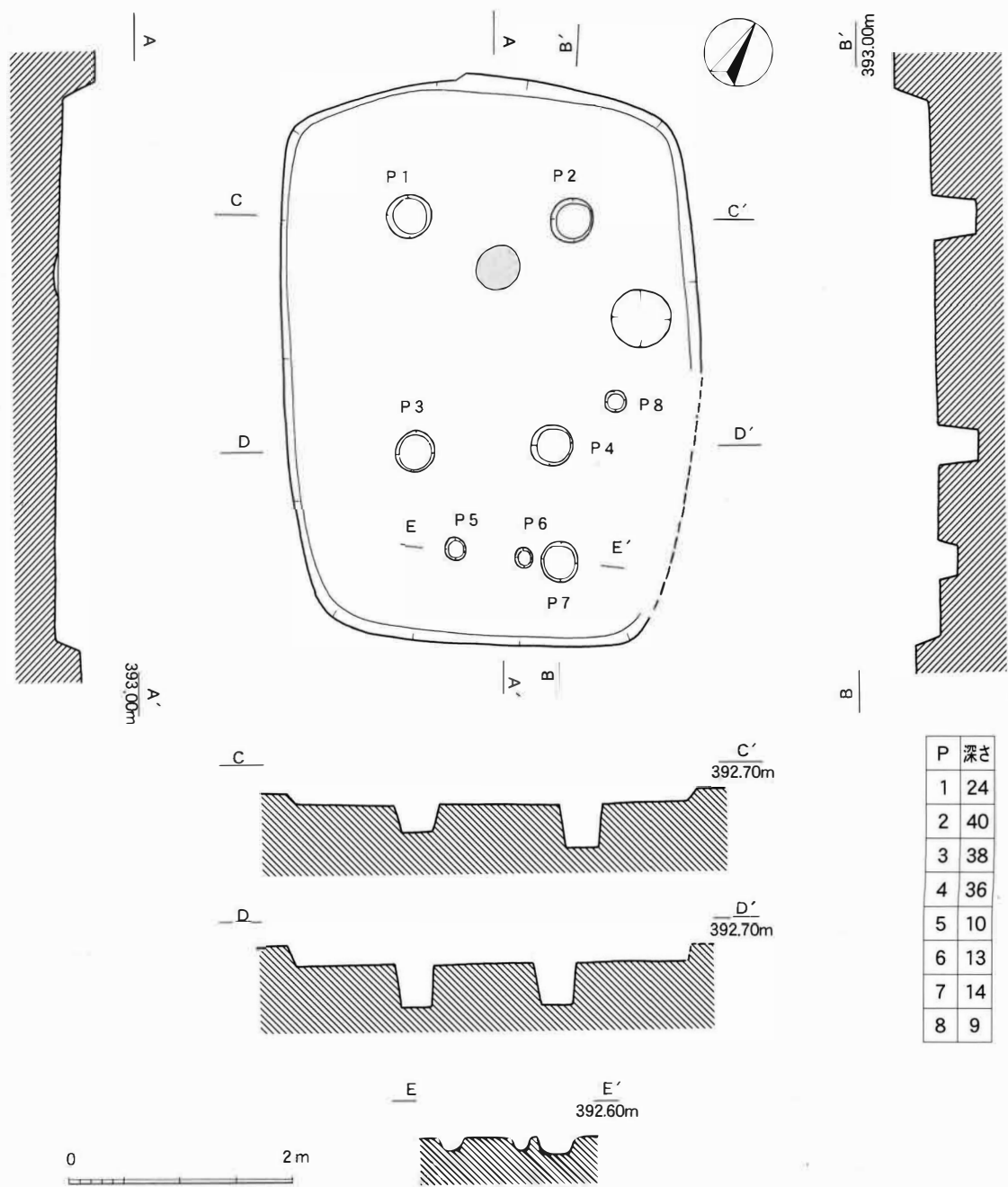
151

0 10cm

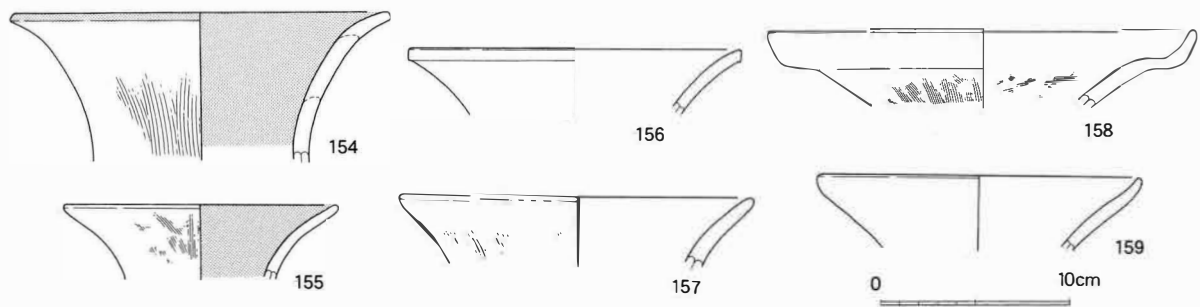


153

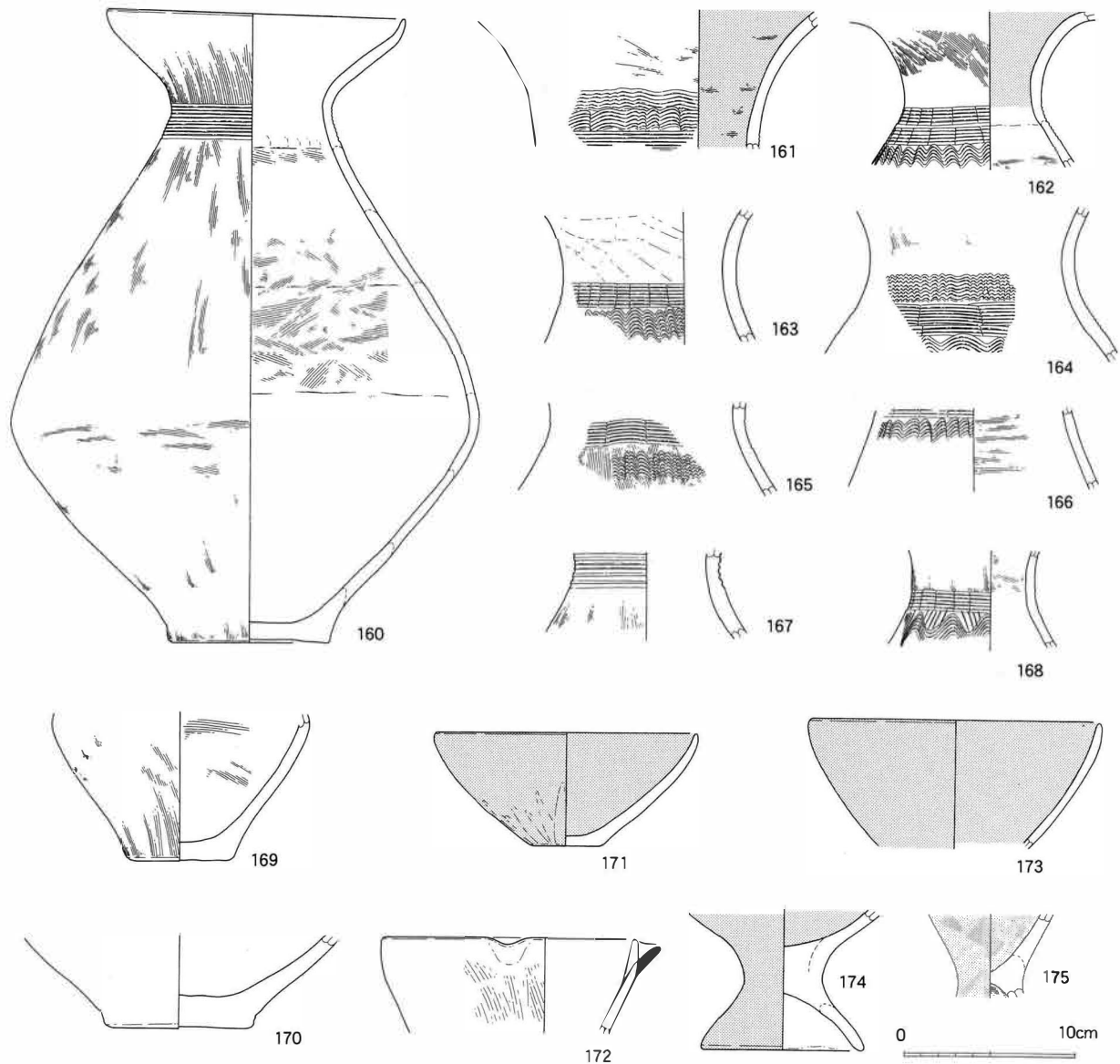
第36図 19号住居址出土土器実測図① (1:4)



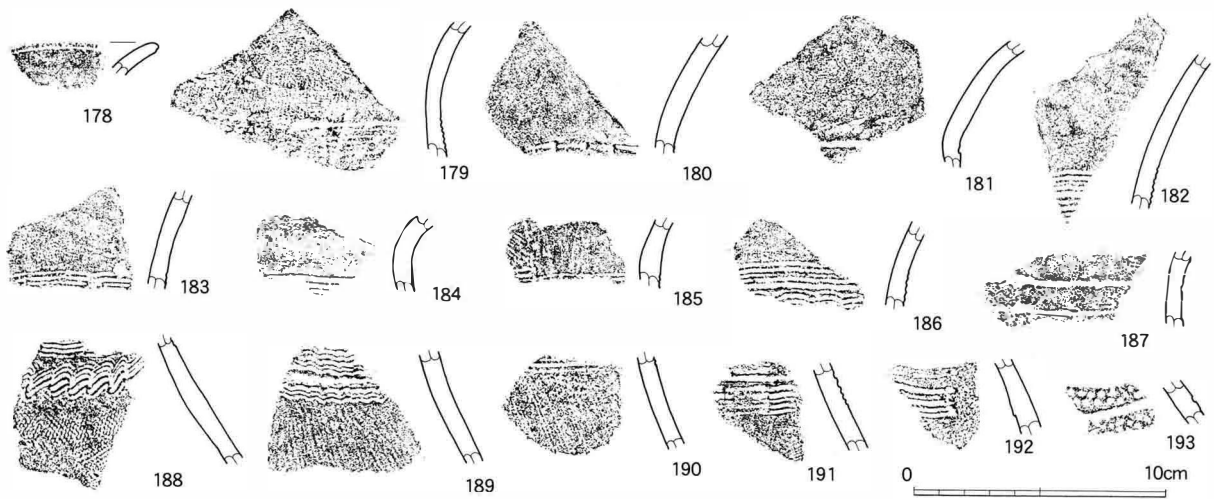
第37図 19号住居址実測図 (1 : 60)



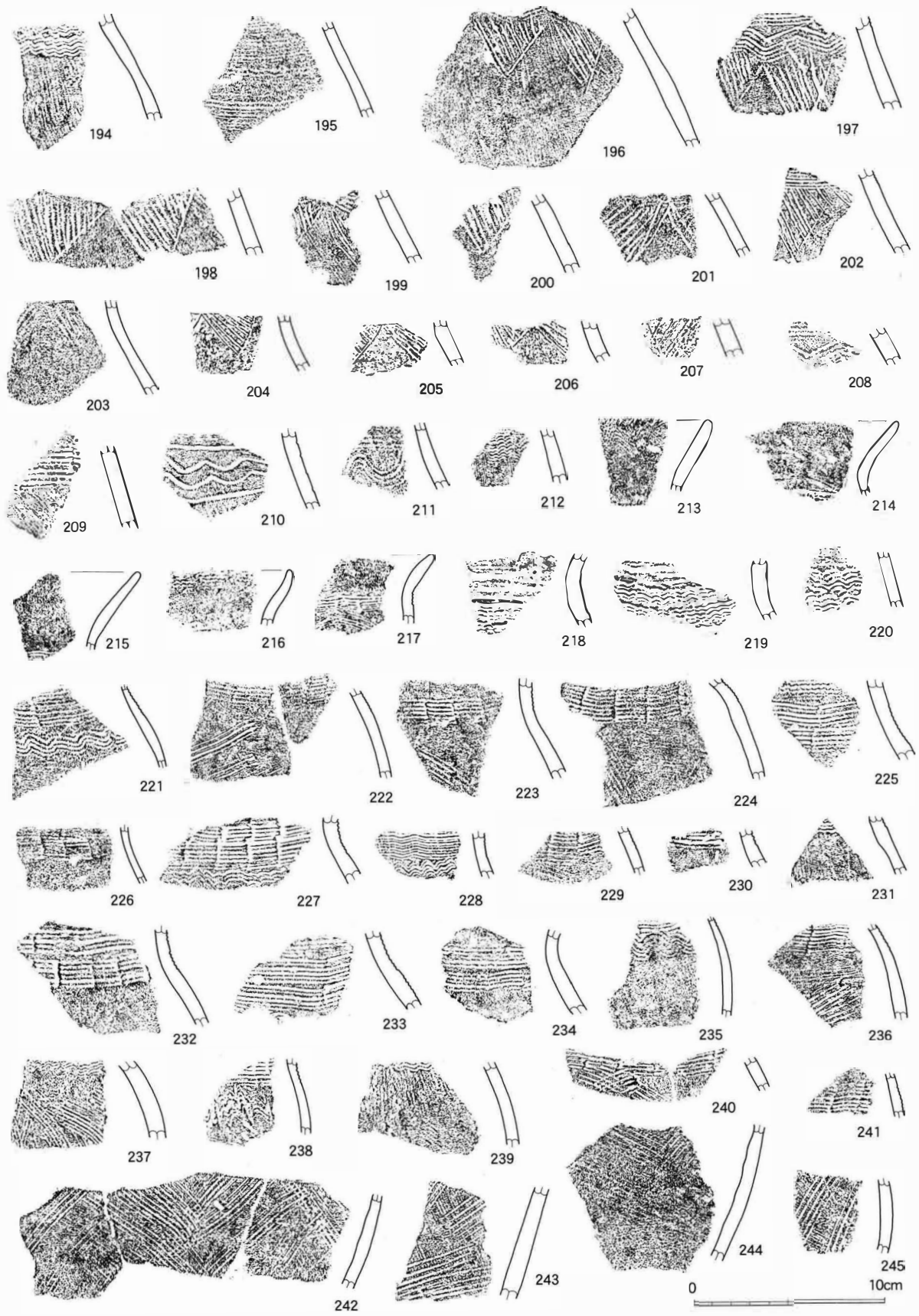
第38図 19号住居址出土土器実測図② (1 : 4)



第39图 19号住居址出土土器实测图③ (1 : 4)

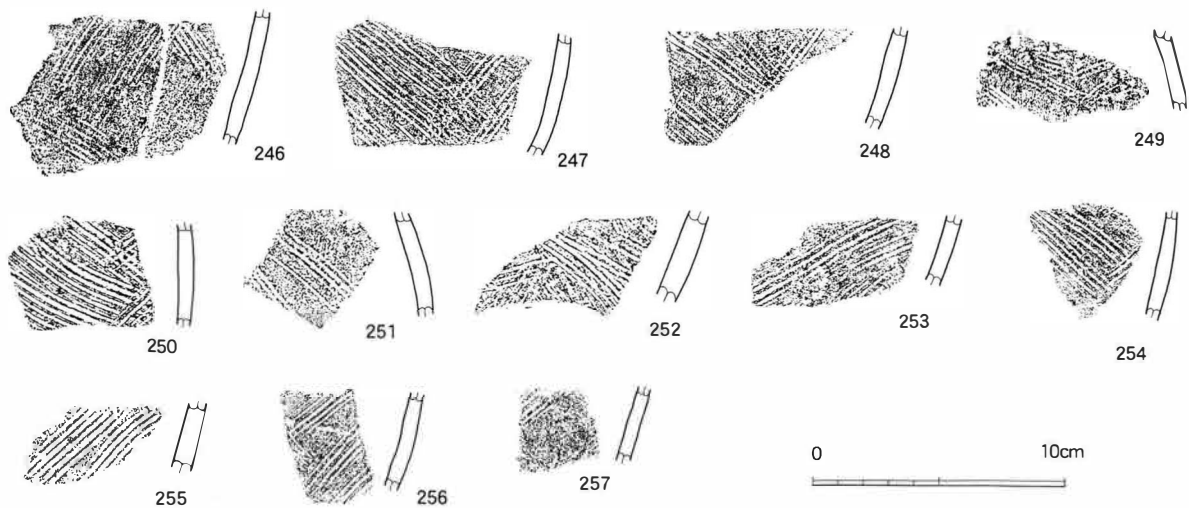


第40图 19号住居址出土土器拓影① (1 : 3)



第41图 19号住居址出土土器拓影② (1:3)





第42図 19号住居址出土土器拓影③（1：3）

20号住居址 （第43～45図）

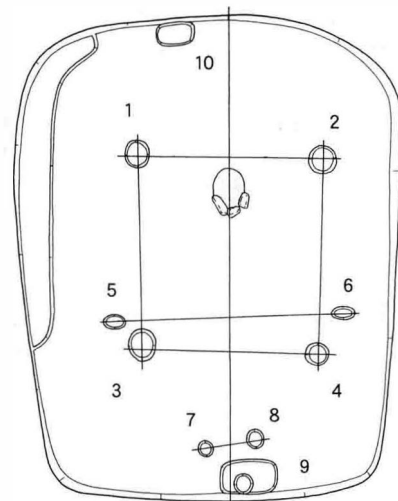
調査区中央付近にて検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。住居址主軸は北西方向に取る。

平面プランは隅丸長方形を呈するが、奥壁側の短辺はやや胴張りぎみとなる。規模は長軸6.40m、短軸5.10m、床面積約28.1㎡を測るやや大型の住居址である。

覆土は黒褐色粘質土の単層で、残りのよい部分では30cmほどの堆積が確認されている。覆土内からは比較的多量の土器が出土しているが、他住居にみられる住居廃絶後に円礫とともに投棄されたような状況とは異なる。

床面は地山の黄褐色土を掘り抜いており、色調は明瞭であったが、全体に軟弱で、貼り床や特に固くしまった部分は認められていない。

主柱穴（P1～P4）は4本長方形配列で、短辺2.40m、長辺2.60mに配列される。P3・P4の両脇に位置するP5・P6は長径30cmほどの楕円形をなし、補助支柱的な性格が



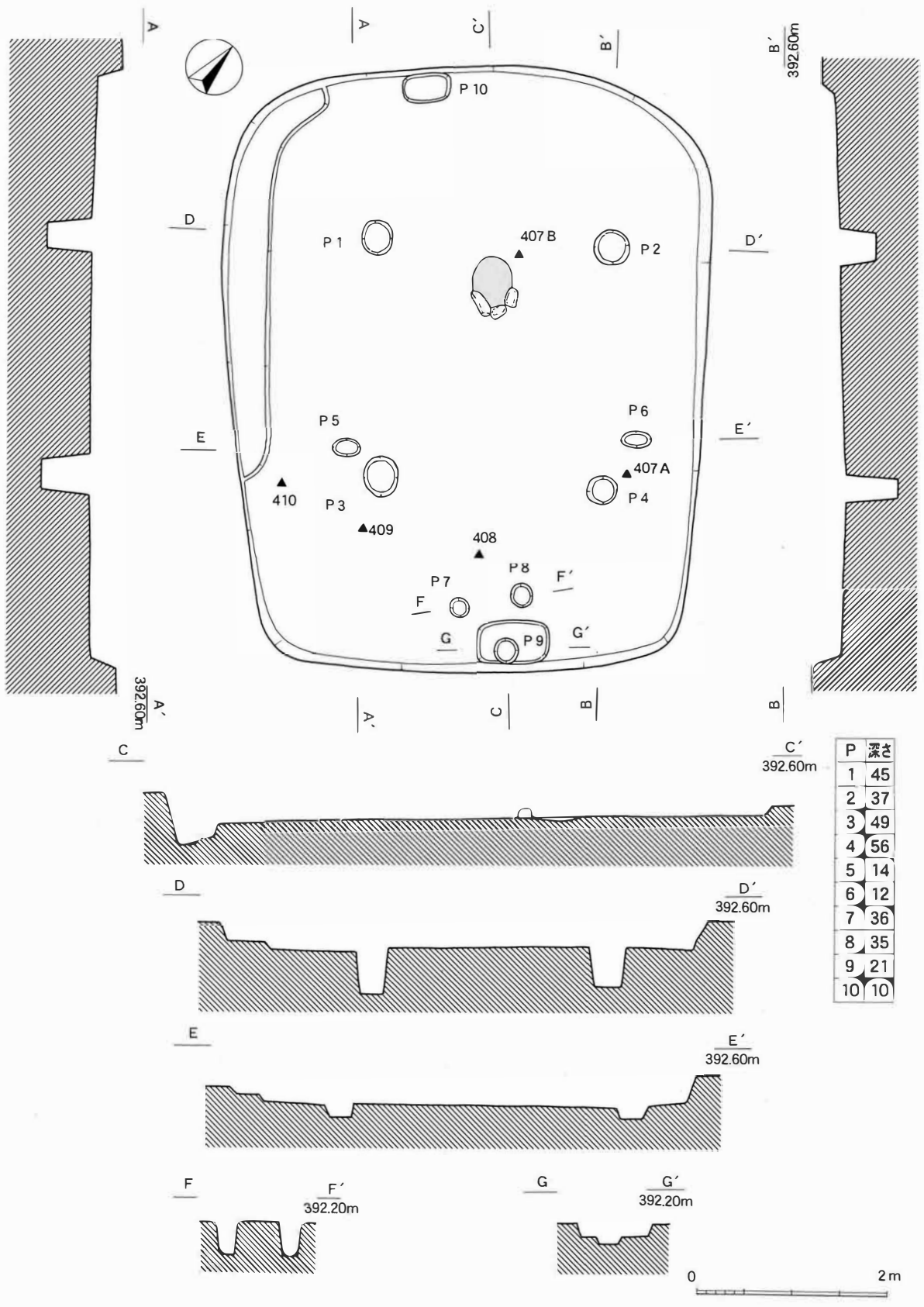
第43図 20号住居址(1:100)



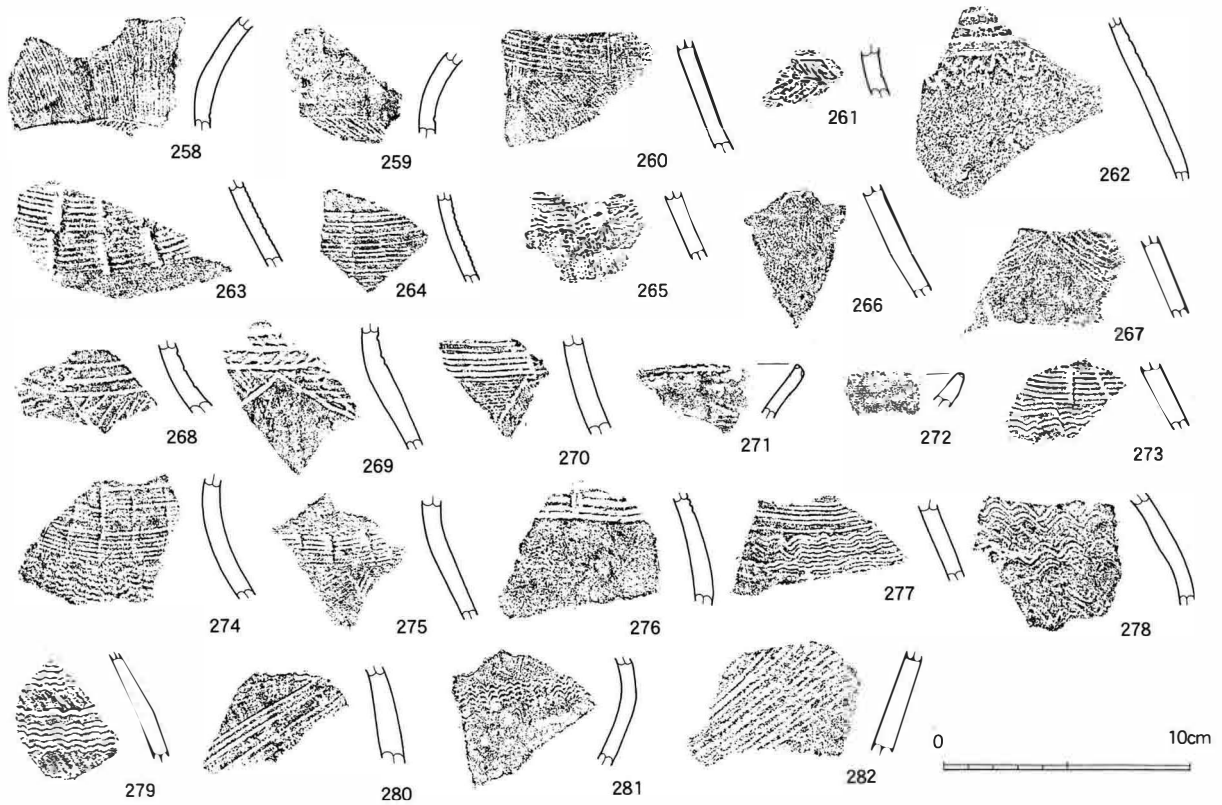
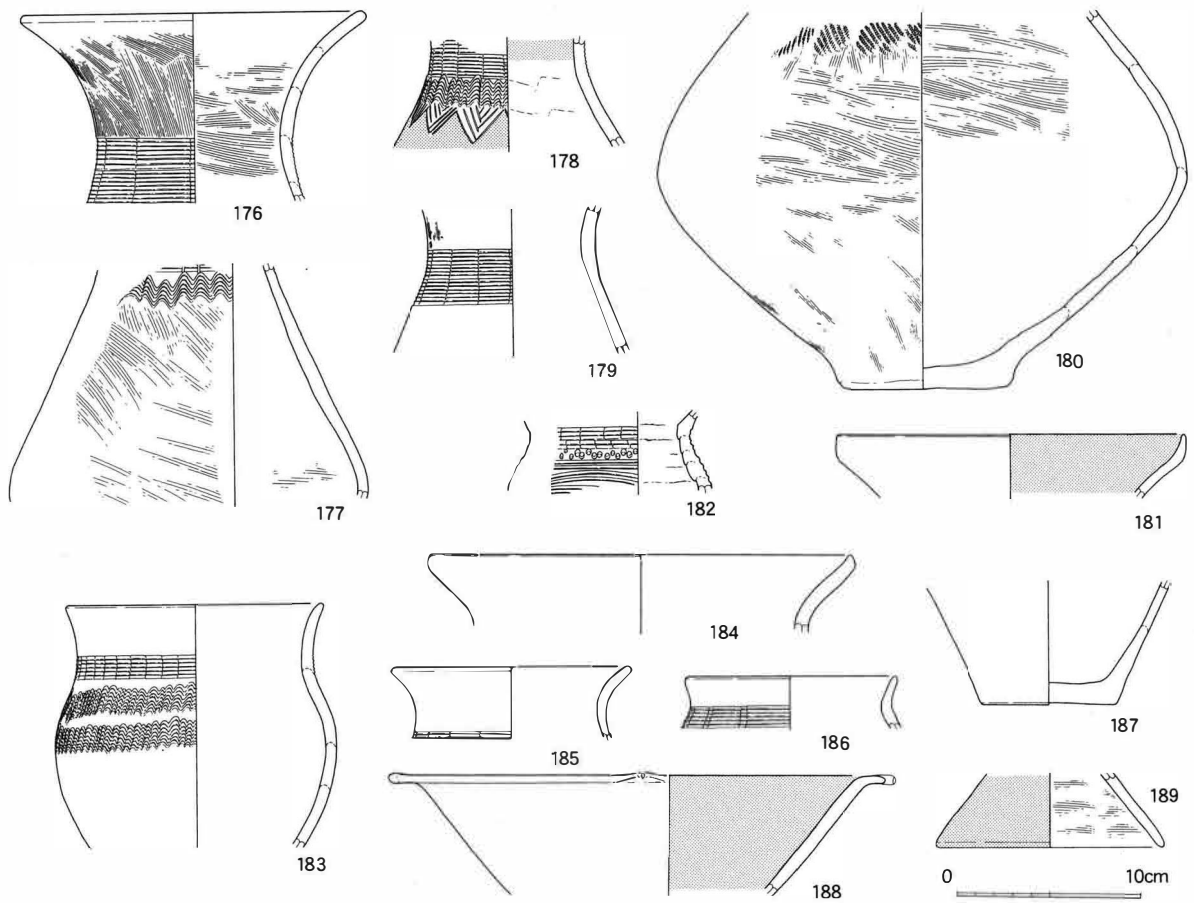
20号住居址



アメリカ式石鏃出土状況



第44図 20号住居址実測図 (1:60)



第45図 20号住居址出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

考えられる。P 9は出入り口施設のはしご受け穴と考えられ、P 7・P 8の2本一対の小支柱が伴う。奥壁際中央やや西寄りに位置するP 10は40×30cm、深さ5cmほどの掘り込みである。内部に2cmほどの炭化物の堆積が確認されたが、底面は熱変を受けた痕跡もなく性格不明である。

炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する地床炉であるが、入口側に3個の河原石をならべ炉縁石としている。深さ5cmほどの掘り込みで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されている。

北西壁には平均幅40cm・高さ10cmほどの掘り残し部分が認められ、いわゆるベッド状遺構と判断されるが、床面は硬化した様子もなく、また特別な遺物の出土もない。

特殊な出土遺物として、P 4付近の覆土下層からアメリカ式石鏃(407A)が、また炉の右側の床面直上付近より同石鏃の未製品(407B)が各1点出土している。本住居址からは製作に伴うと考えられるチップ類は出土していないが、隣接する19号住居址からは多量の剥片やチップ類が出土しており、注目される。また、この他に覆土内からではあるが、在地の有孔磨製石鏃の未製品が3点出土している。

### 21号住居址 (第46～48図)

調査区西側で検出された住居址で、東側1/4程を後世の流路に切られ、また西側は井戸址SK 2に切られる。住居址主軸は北西方向を取る。

平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長軸7.15m、短軸(5.10)m、床面積は約(29.5)㎡程と想定される、やや大型の住居址である。

覆土は黒褐色粘質土の単層で、残りのよい部分では20cmほどの堆積が認められた。出土土器も僅少で、住居廃絶後の土器や自然礫の投棄は認められない。

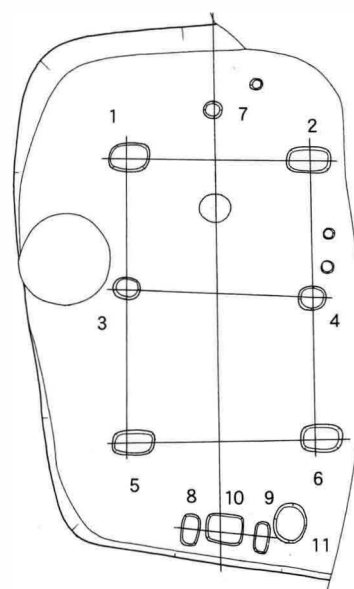
床面は地山の黄褐色土を掘り抜いており色調は明瞭であったが、全体に軟弱で、貼り床や固くしまった部分は認められていない。

主柱穴はP 1～P 6の6本長方形配列で、短辺2.30～2.40m、長辺3.70mに配列される。P 1・P 2・P 5・P 6は掘り込み規模に差異はあるものの、それぞれ50×35cmほどの横長の楕円形を呈し、また、中央に位置するP 3・P 4がともに径30cmほどの円形を呈するといった企画性が認められることよりすれば、主柱穴をP 1・P 2・P 5・

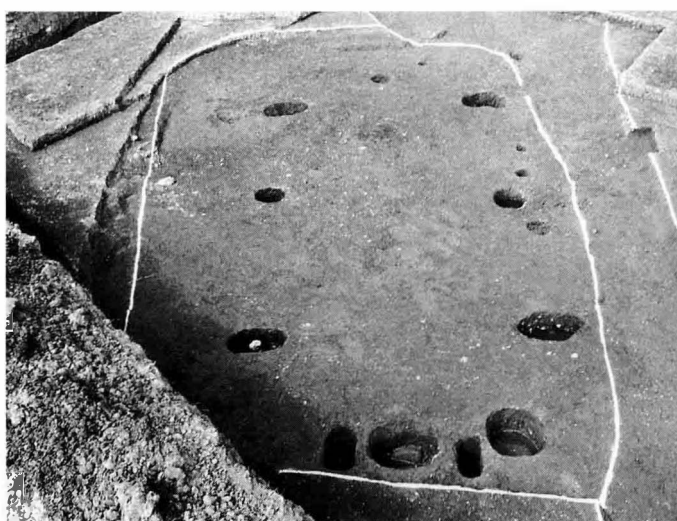
P 6の4本長方形配列ととらえ、P 3・P 4を補助支柱的なものと想定することもできよう。奥壁側の住居址主軸上に位置するP 7は棟持柱的な性格が考えられる。

P 10は出入り口施設のはしご受け穴で、両脇にP 8・P 9の2本一対の支柱を伴い、さらに入り口施設の右側に径50cm、深さ24cmほどの円形の掘り込みP 11を伴う。

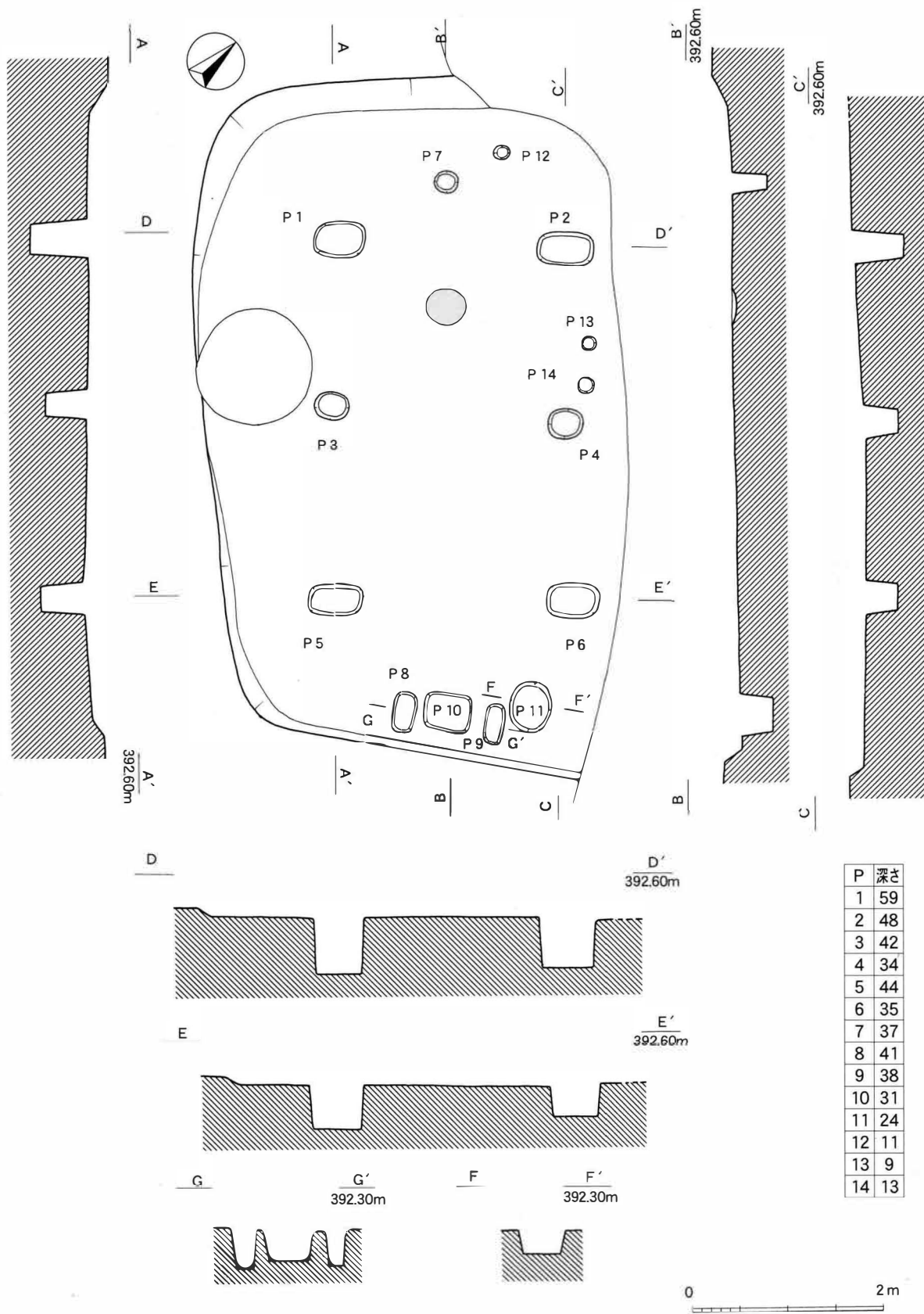
炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する地床炉で、径40cm、深さ5cm程を測り、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されていた。



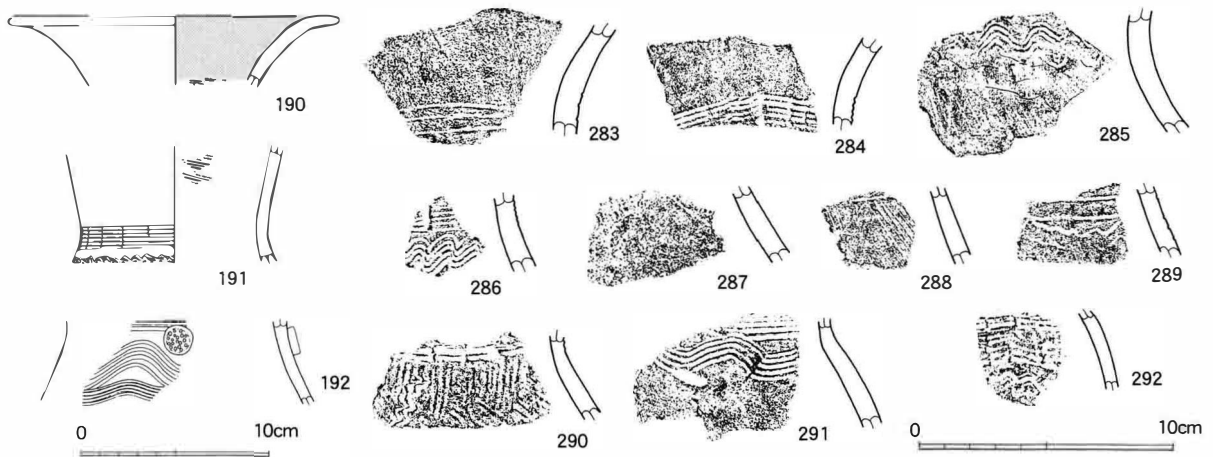
第46図 21号住居址(1:100)



21号住居址



第47図 21号住居址実測図 (1 : 60)



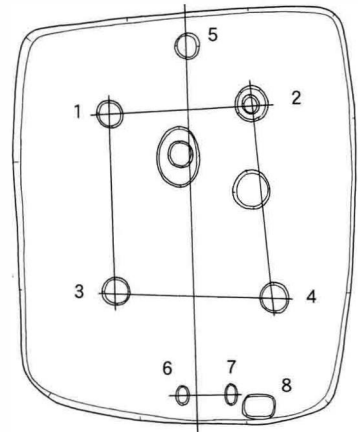
第48図 21号住居址出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

22号住居址（第49～53図）

調査区北側で検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。住居址主軸は北側取る。

覆土は黒褐色粘質土の単層。覆土内からは住居址廃絶後に拳大～人頭大の自然礫と土器破片が投棄されたような状況で出土しており、床面上からの出土遺物は少ない。

平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.40m、短軸4.50m、床面積約21.6㎡を測る。床面の状況は全体に非常に不明瞭で、特に北西側は地山の礫層を掘り込んでいるために判然としない。また貼り床や特に固くしまった部分等も確認されていない。



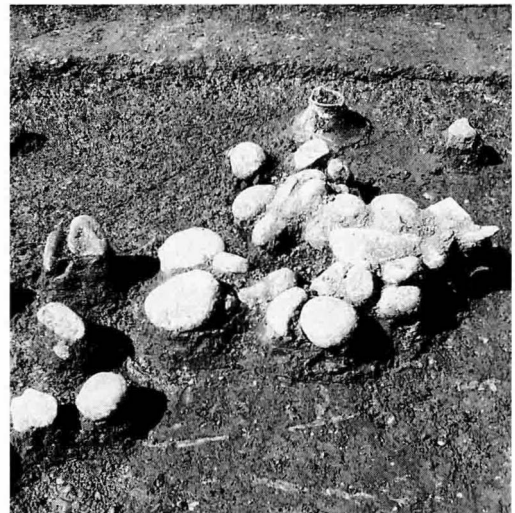
第49図 22号住居址（1：100）

主柱穴はP1～P4の4本長方形配列で、短辺1.90～2.10m、長辺2.40～2.60mに配列される。奥壁側の住居址主軸上に位置するP5は棟持柱的なものであろう。P6・P7は出入り口施設に伴う2本一対の小支柱で右側にP8を伴っている。通常炉が位置する部分にはP9が存在するが、本住居址に直接伴うものか否か不明である。炉址は確認されていない。

出土土器のうち、小型壺（201）の内部にはベンガラと考えられる赤色顔料がつめられた状態で出土している。

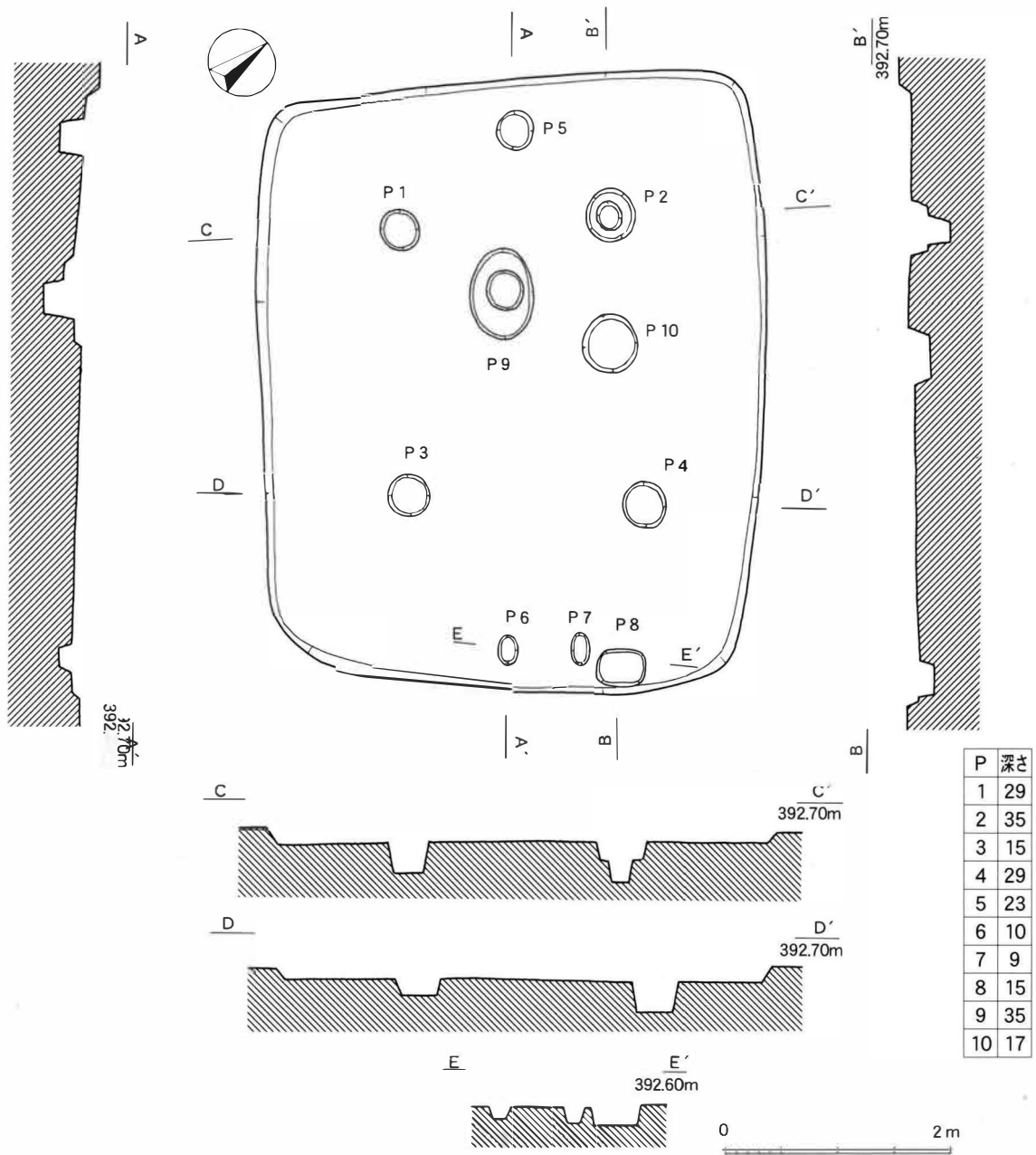


22号住居址

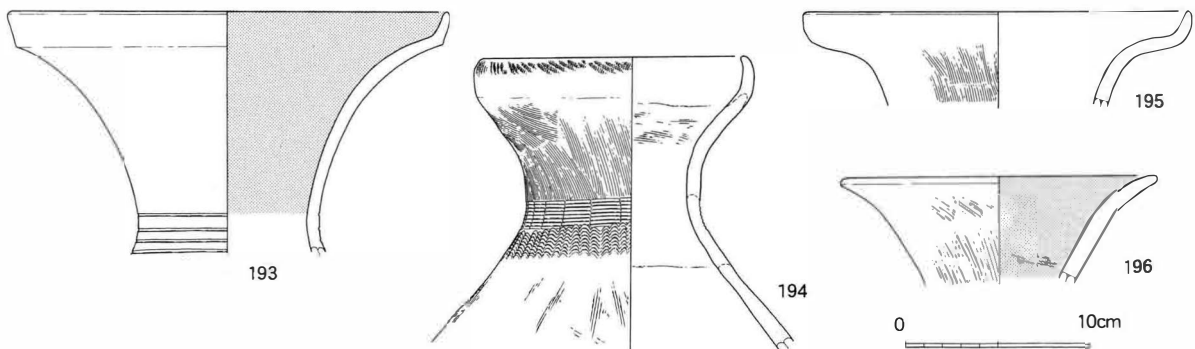


土器・礫出土状況

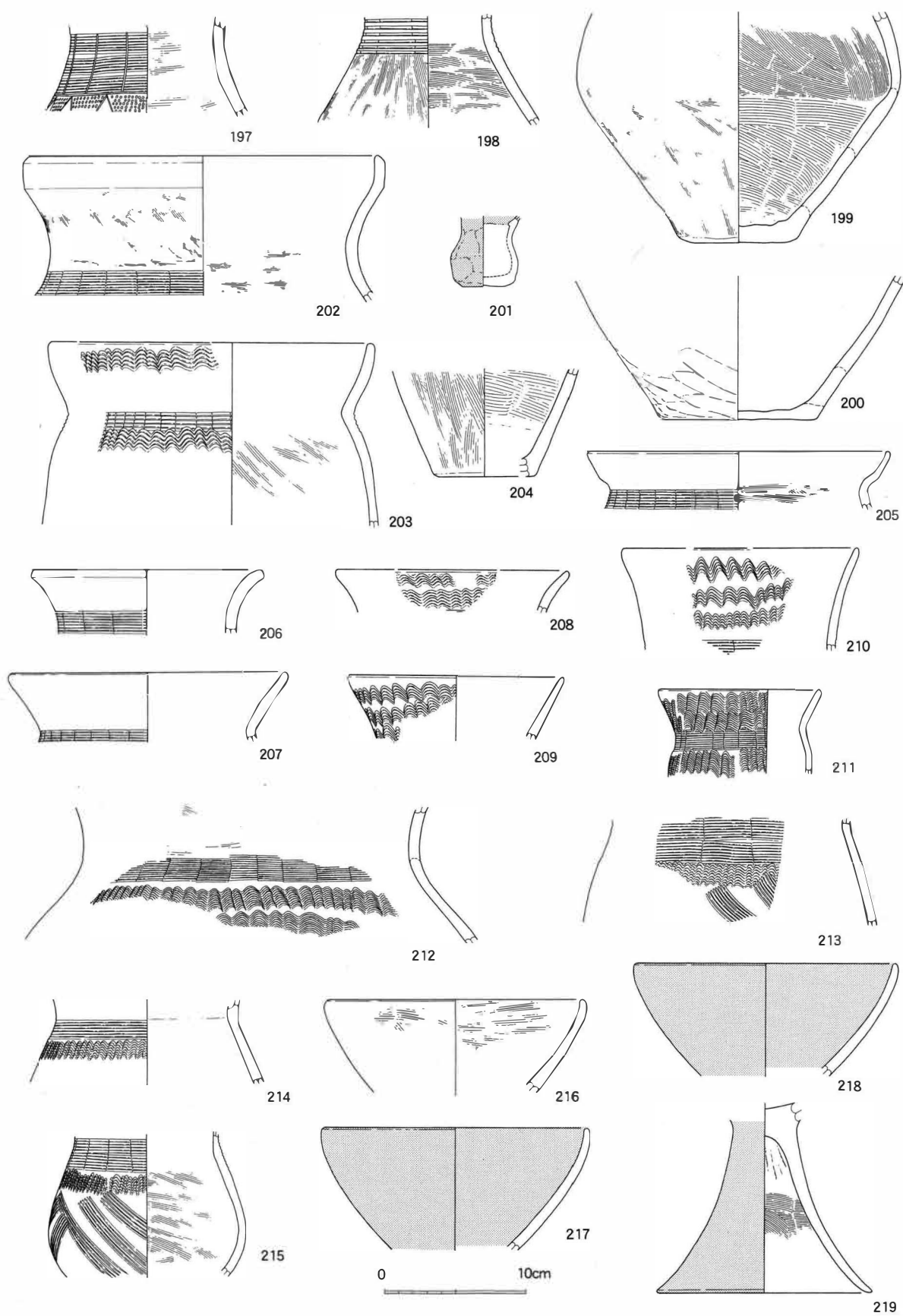




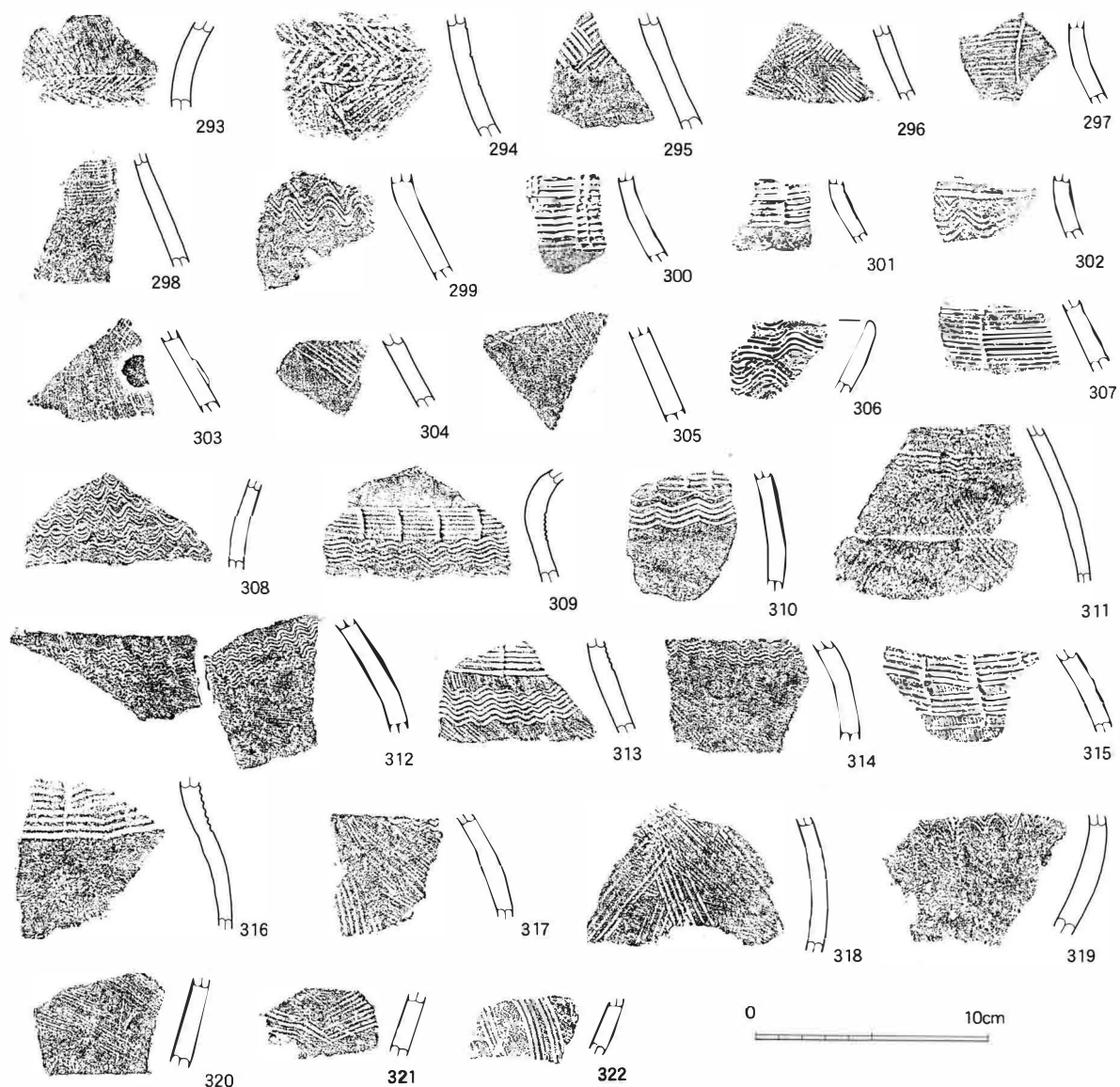
第50図 22号住居址実測図 (1 : 60)



第51図 22号住居址出土土器実測図① (1 : 4)



第52图 22号住居址出土土器实测图② (1:4)



第53図 22号住居址出土土器拓影 (1:3)

23号住居址 (第54~57図)

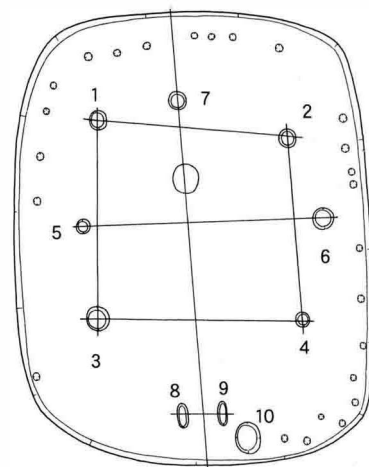
調査区東側中央付近で検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。今回検出された住居址の中では、唯一住居址主軸を東西方向に取るものである。

平面プランはやや胴張りぎみの隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.00m、短軸4.75m、床面積約24.5㎡を測る。

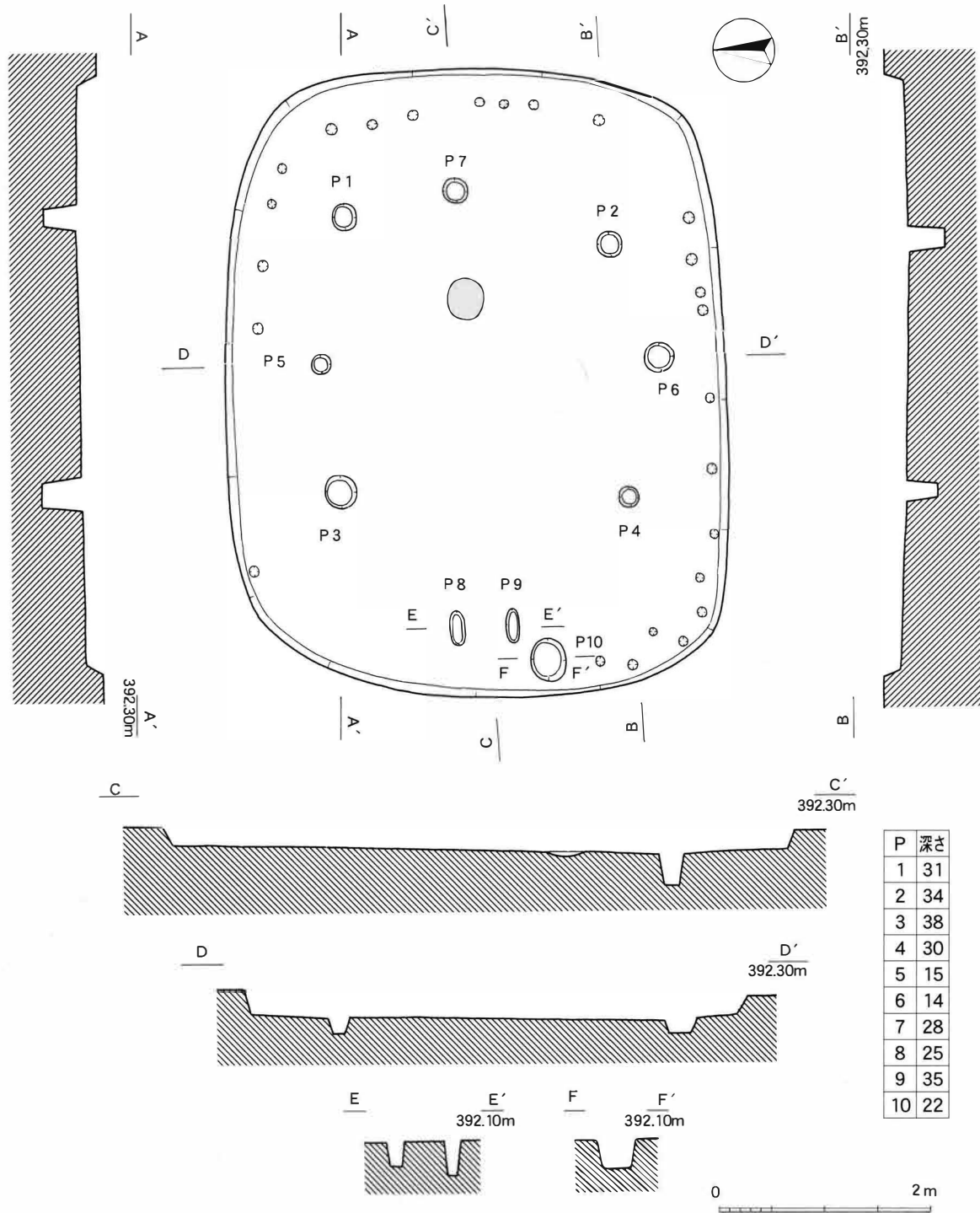
覆土は黒褐色粘質土の単層で、全体に平均して20cm前後の堆積が認められた。住居廃絶後に若干の土器の投棄がなされているようであるが、量的には少なく、また自然礫などの投棄は認められていない。

床面は地山の黄褐色土を掘り抜いており、色調は明瞭であるが、全体に軟弱で貼り床や特に固くしまった部分等は確認されていない。

主柱穴 (P1~P4) は4本方形配列で、長軸方向は2.40~2.60m、短



第54図 23号住居址(1:100)



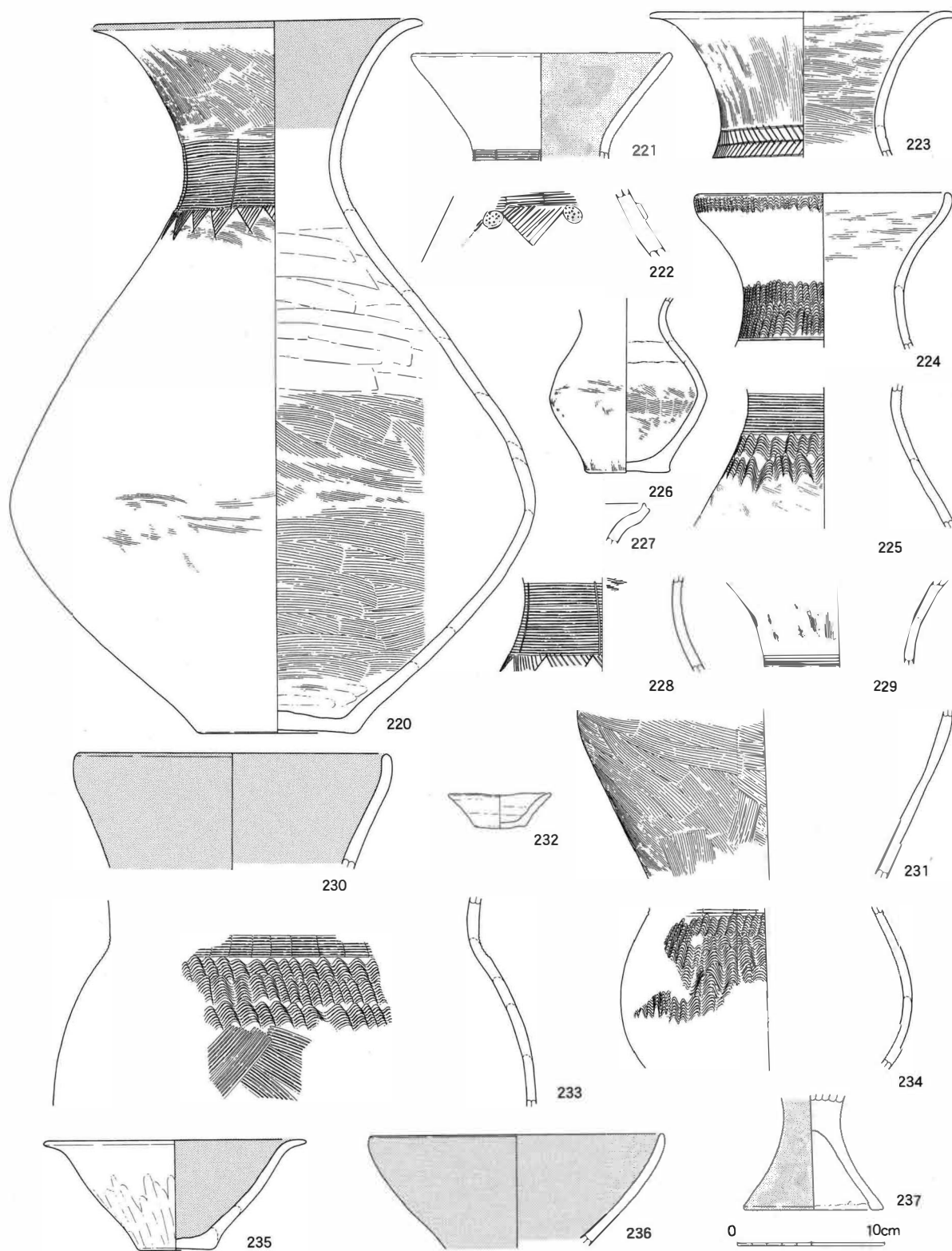
第55図 23号住居址実測図 (1:60)

軸方向は2.60~2.70mに配列される。長軸中央に位置するP5・P6はいずれも主柱主軸よりやや外側に位置しており、また掘り込み規模も小さい点より、補助的な支柱と想定される。奥壁側の住居址主軸上に位置するP7は棟持柱的な支柱であろう。

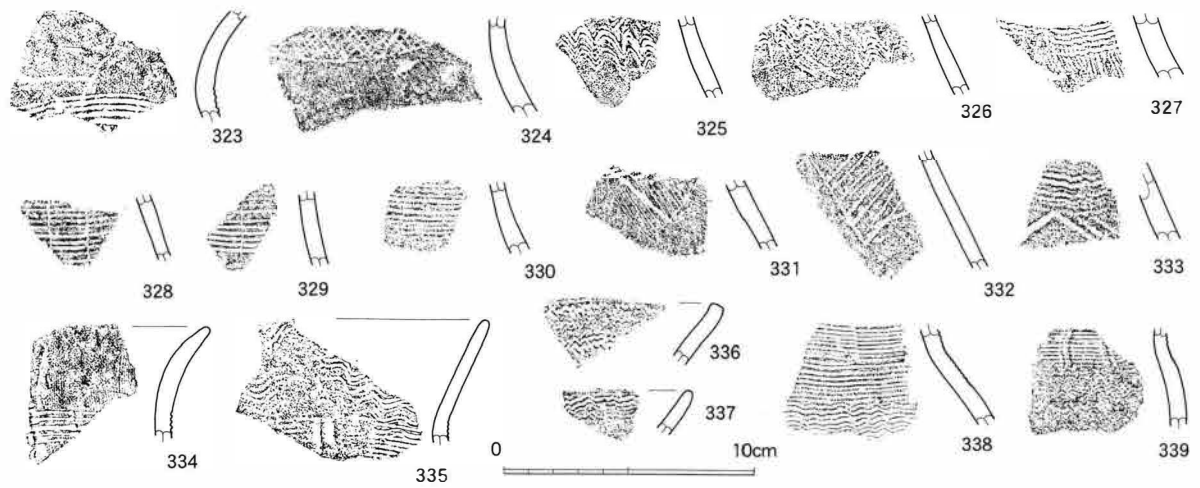
出入口施設にはP8・P9の2本一対の支柱が存在するがはしご受け穴は伴わない。P8・P9の右側には径30cm、深さ20cmほどの円形の掘り込みP10が伴う。北東から南西の壁際にかけて、径10cm前後、深さ5cm前後の小ピットがある程度のもたまりを持って列状に検出されている。壁面保護のための土留めの施設の痕跡の可

能性が考えられる。今回の調査で、このような施設が確認されたのも本住居址のみである。

炉は地床炉で、奥壁側柱穴間中央やや内よりに位置する。径30cm、深さ5cmほどの円形の掘り込みで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されている。



第56図 23号住居址出土土器実測図（1：4）



第57図 23号住居址出土土器拓影



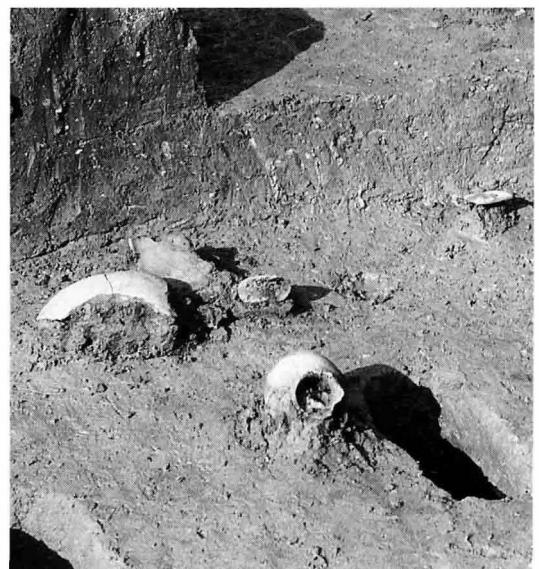
23号住居址



土器出土状況



遺物出土状況



出入口施設付近遺物出土状況



24号住居址 (第58~61図)

調査区東側中央付近にて検出された住居址。25号住居址の上部に構築された住居址で、今回の調査では唯一、明確に住居址どうしの切り合いが確認された遺構である。

平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈する。規模は長軸7.50m、短軸5.20m、床面積は約33.7㎡を測る比較的大型の住居址である。住居址主軸はほぼ南北方向に取る。

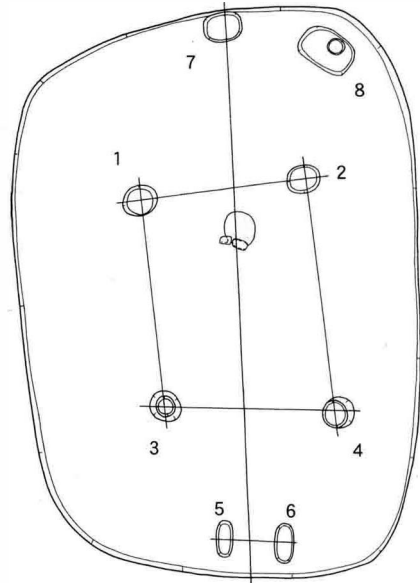
覆土は黒褐色粘質土の単層であるが、遺構の検出は困難をきわめ平均して10cmほどの堆積しか確認できなかった。出土遺物はほとんどが覆土内からの出土であるが、出土量は僅かである。

床面は地山の黄褐色土層を掘り込んでおり、色調は明瞭であったが、全体に非常に軟弱で、貼り床や特に固くしまった部分は確認されていない。

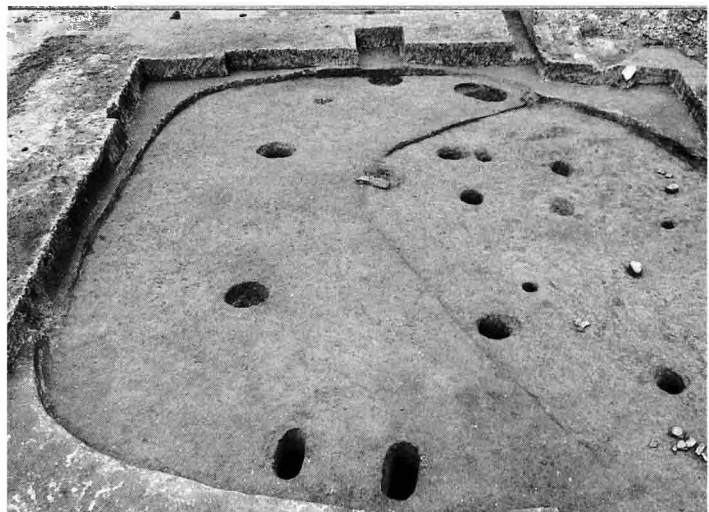
主柱穴 (P 1~P 4) は4本長方形配列で、長辺2.70~3.10m、短辺2.20~2.30mに配列される。P 7は奥壁際の主軸上に位置する。

P 5・P 6は出入口施設に関する2本一対の支柱であるが、はしご受け穴やピットは伴わない。P 8は二段にわたる掘り込みを有する柱穴で、内部からは焼土は伴わないものの、炭化物が集中して出土しているが、性格は不明である。

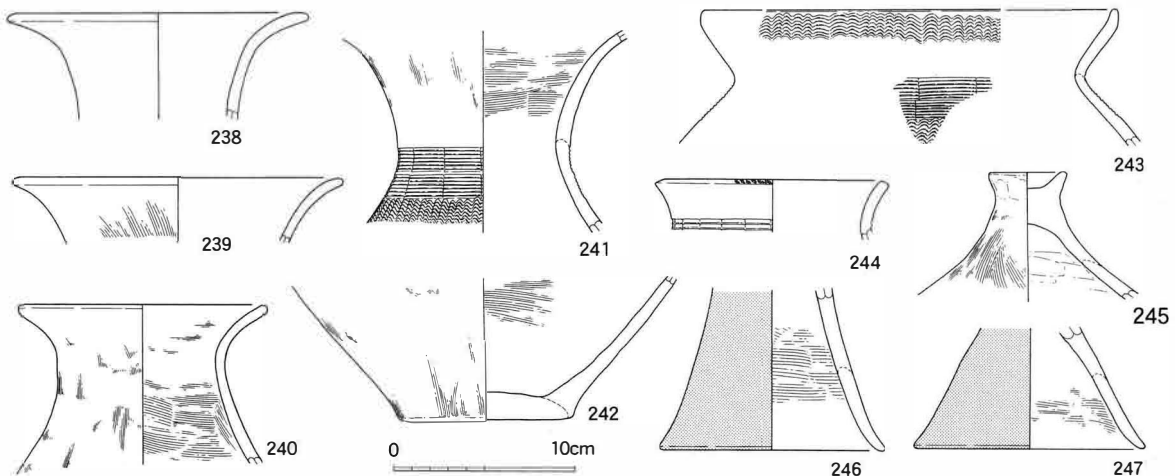
炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する地床炉で、南側に2個の河原石をならべて炉縁石としている。径40cm程を測り、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されている。



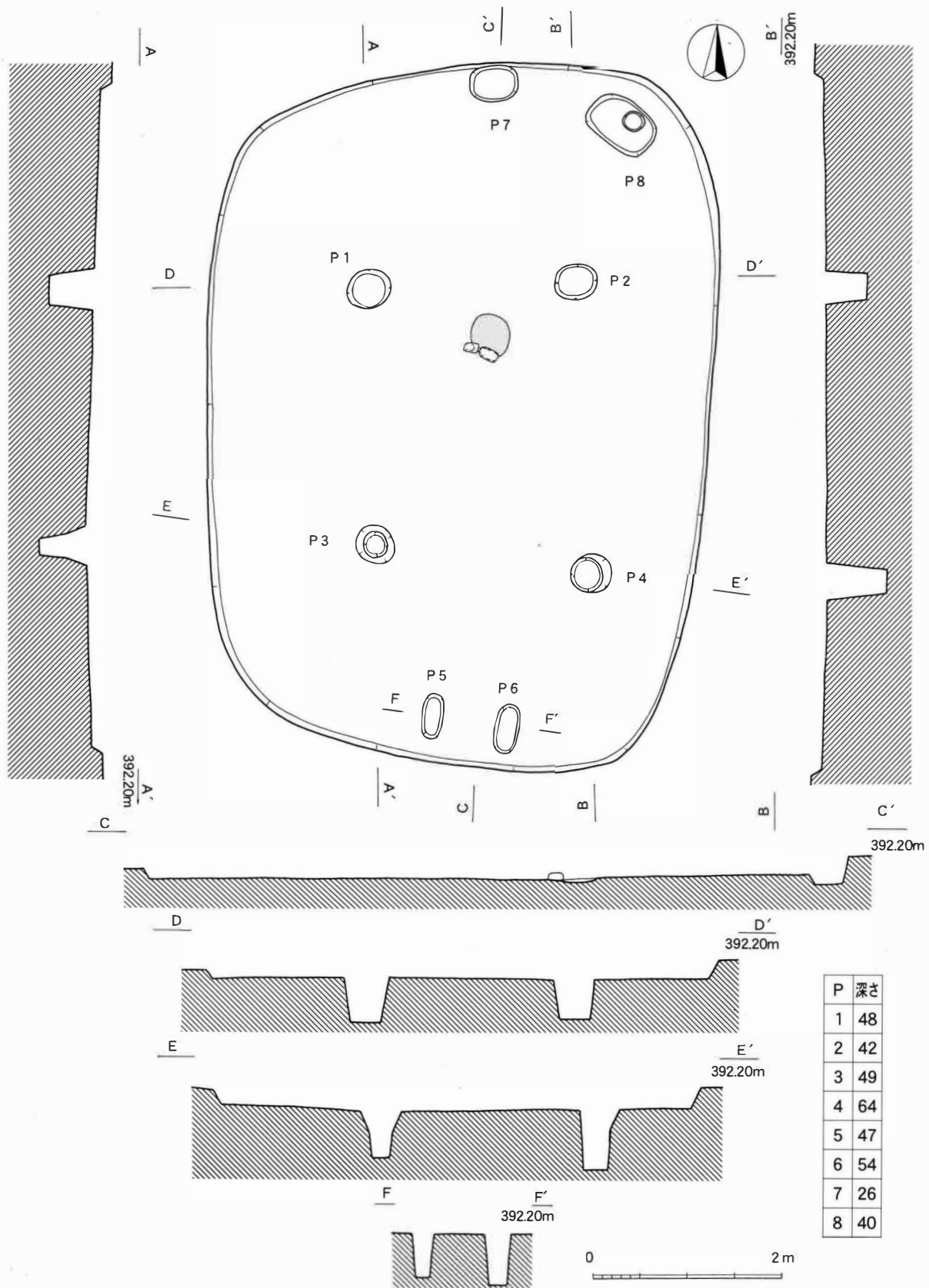
第58図 24号住居址 (1 : 100)



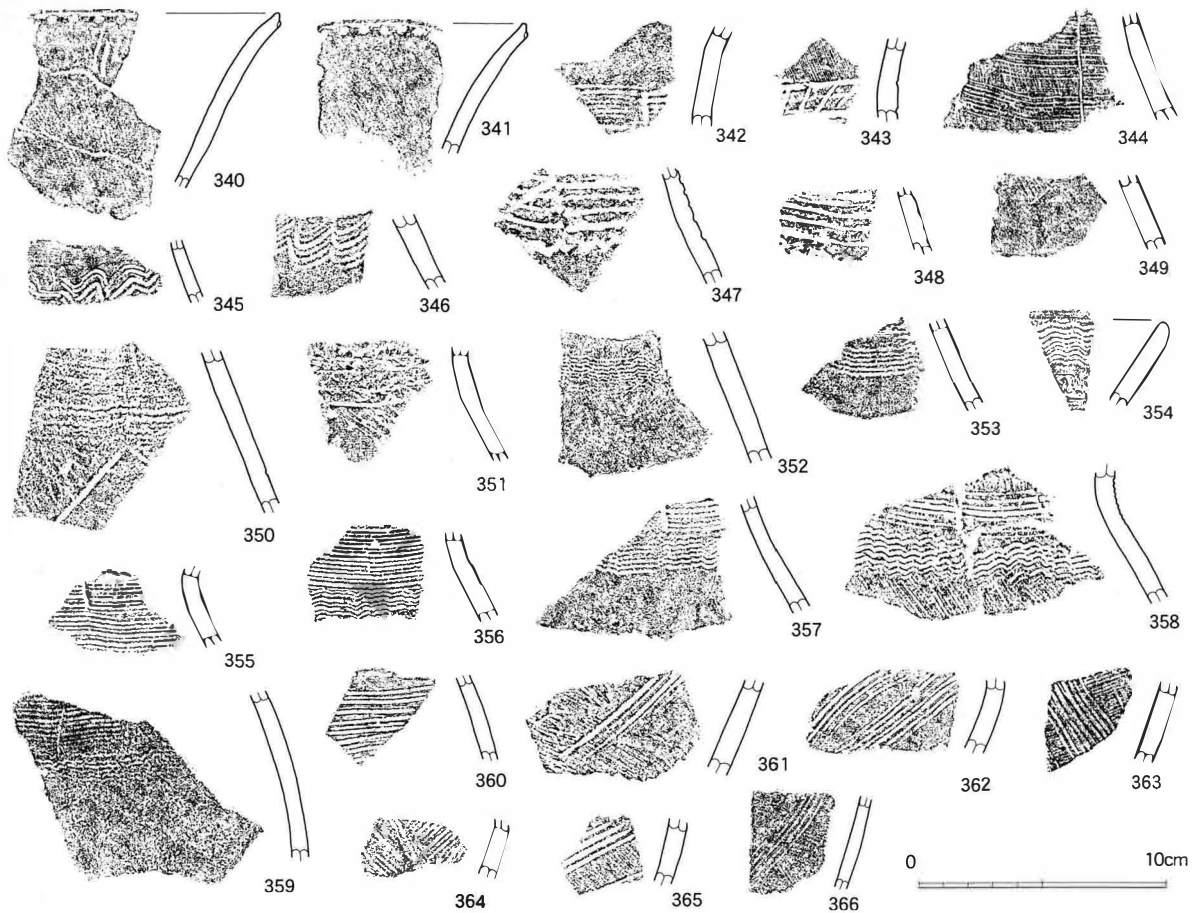
24号住居址



第59図 24号住居址出土土器実測図 (1 : 4)



第60図 24号住居址実測図 (1 : 60)



第61図 24号住居址出土土器拓影 (1:3)

25号住居址 (第62~65図)

調査区東側中央付近にて検出された住居址で、24号住居址に上層を切られる。17号住居址とも近接するが、工事工程に伴う調査区設定の都合上、17号住居址が検出された調査区を埋戻した後に本住居址の調査を実施したために、17号住居址との切り合い関係は把握し得なかった。

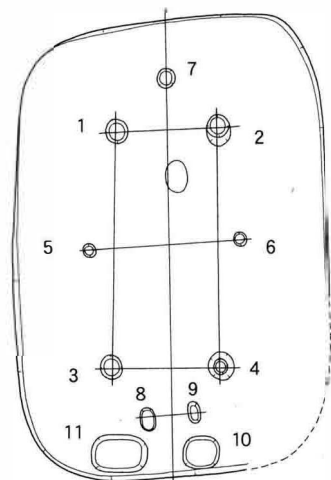
平面プランは隅丸長方形を呈し、住居址主軸は北西方向にとる。規模は長軸6.00m、短軸4.20m、床面積は約22.6㎡を測るやや小型の住居址である。

覆土は黒褐色粘質土の単層であるが、住居址北西隅付近は24号住居址の床面とほとんどレベル差がない状況で、出土遺物の一部には24号住居址のものが混入している可能性が高い。

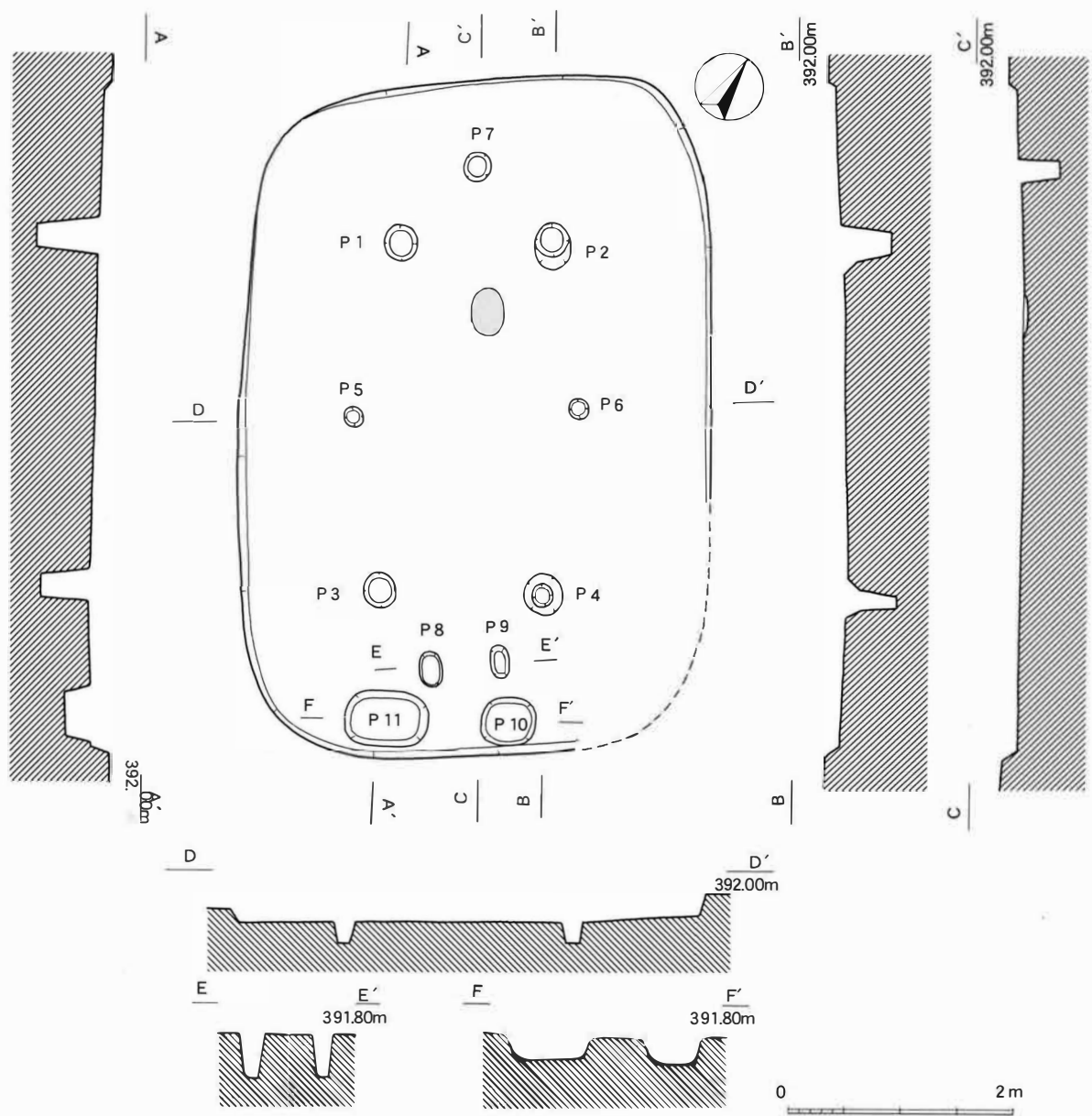
床面は地山の黄褐色土を掘り込んでおり色調は明瞭であるが、全体に軟弱で貼り床や、特に固くしまった部分等は確認されていない。

主柱穴(P1~P4)は4本長方形配列で、長辺3.10~3.20m、短辺1.30~1.40mに配列される。長軸中央に位置するP5・P6はいずれも主柱主軸よりやや外側に位置し、掘り込み規模も小さい点より補助的な支柱と想定される。奥壁側の住居址主軸上に位置するP7は棟持柱的な性格が想定される。

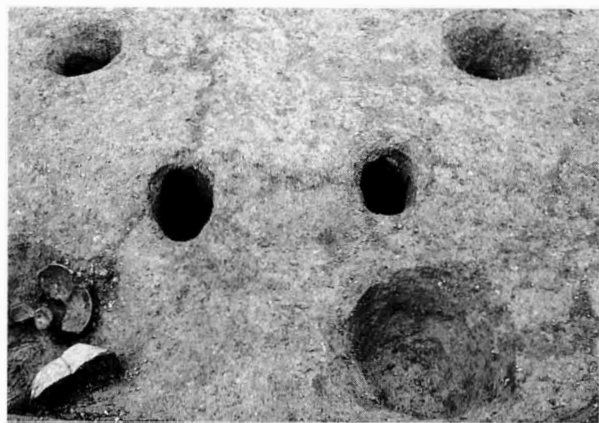
P8・P9は出入口施設に関する2本一対の小支柱であるが、はしご受け穴は伴わない。P8・P9の右下には径40cmほどの円形の掘り込みP10が伴い、また左側には長径70cmほどの楕円形の掘り込みP11が存在する。P



第62図25号住居址(1:100)



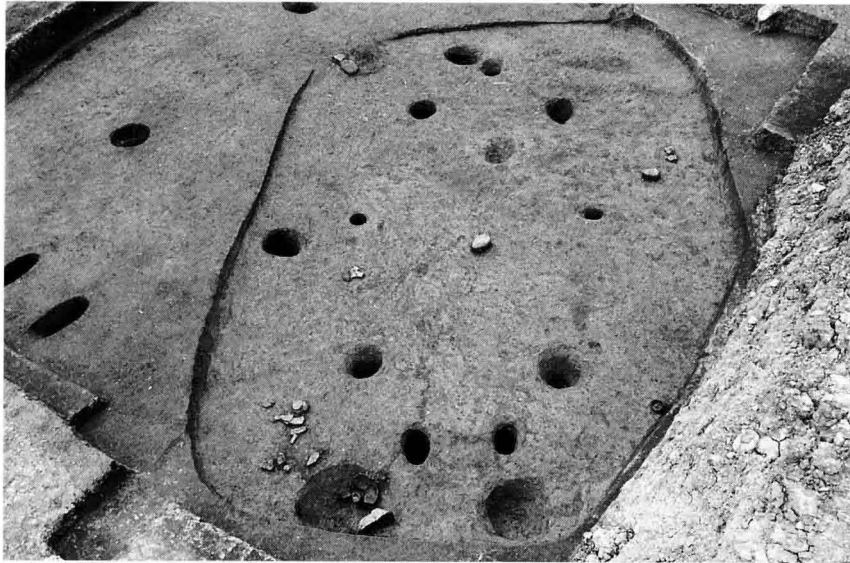
第63図 25号住居址実測図 (1 : 60)



出入口施設



P11周辺土器出土状況

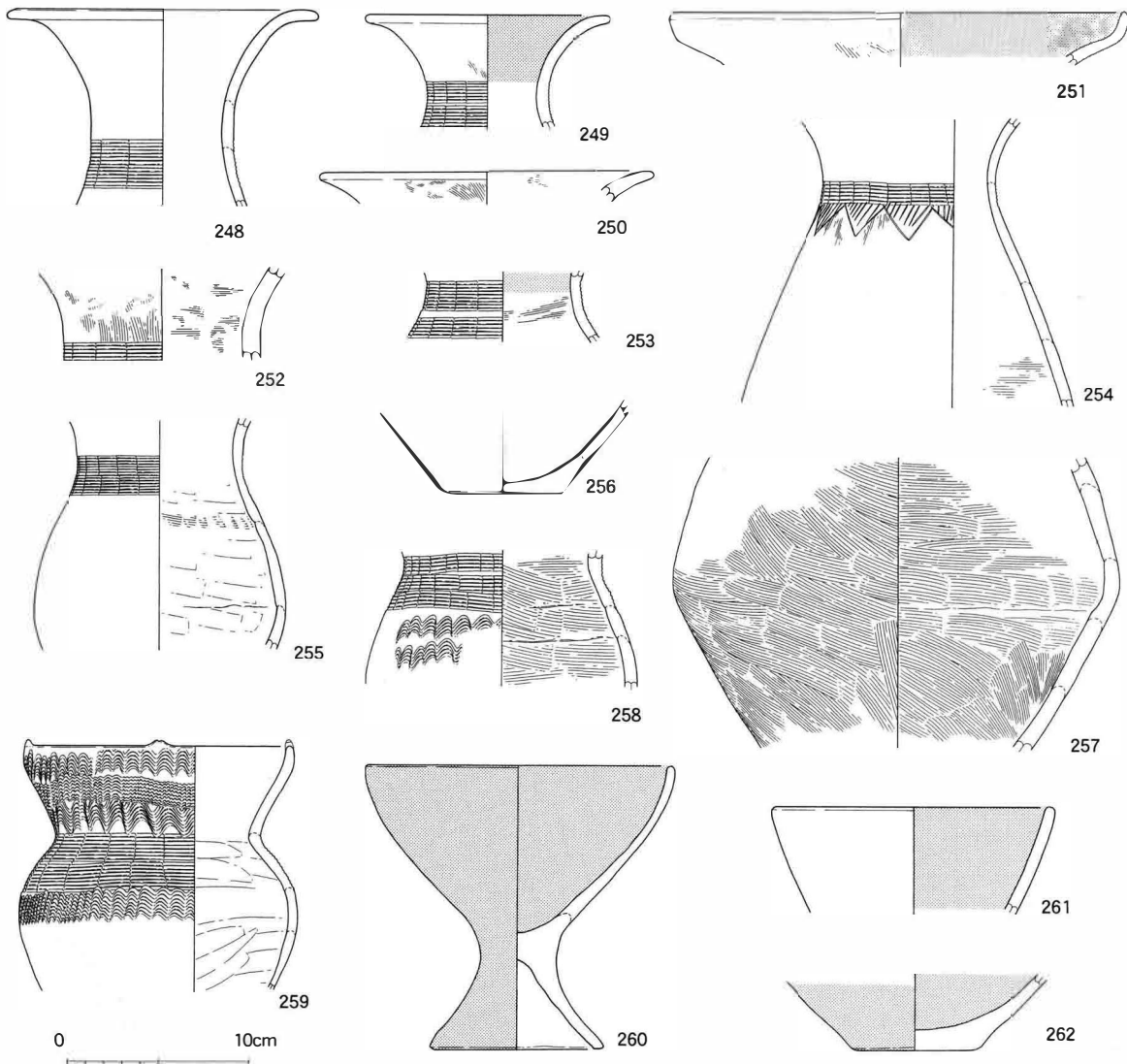


11の内部からは高坏（260）などが出土しており、P 3からP11にかけての床面上より、土器破片が比較的集中して出土している。

炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する地床炉で、長径40cm、深さ5cmほどの楕円形の掘り込みで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されている。

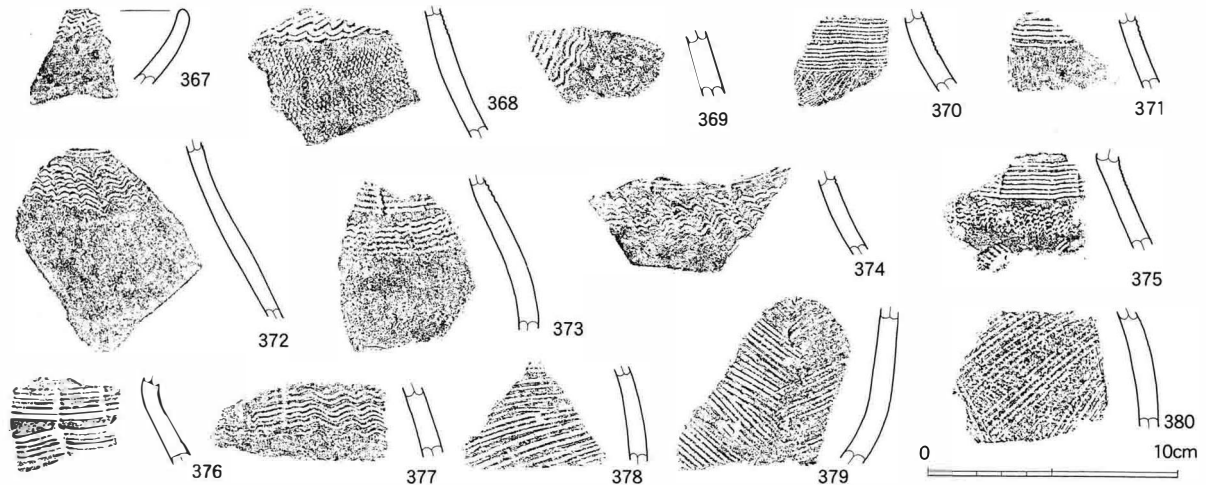
出土土器には第64図があるが前述のごとく24号住居址のものが混入している可能性も高い。

25号住居址



第64図 25号住居址出土土器実測図（1：4）





第65図 25号住居址出土土器拓影（1：3）

26号住居址 （第66～67図）

調査区中央南側付近にて検出された住居址で、奥壁の一部を後世の流路に切られ、また、入口付近の一部に攪乱を受ける。

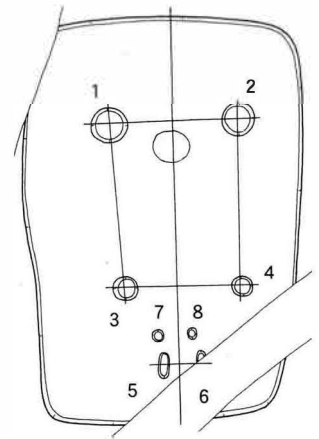
平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.40m、短軸3.60m、床面積約17.2㎡を測り、住居址主軸は北西方向にとる。

覆土は黒褐色粘質土の単層であるが、確認面からの掘り込みは浅く平均5cm前後の堆積しか確認されていない。床面は、地山の黄褐色土を掘り込んでいるために、色調は明瞭であったが、全体に軟弱で、貼り床や特に固くしまった部分等は確認されていない。

主柱穴（P1～P4）は4本長方形配列で、短辺1.60～1.70m、長辺2.10～2.20mに配列される。P5・P6は出入口施設に伴う2本一対の小支柱であるが、

はしご受け穴は伴わない。P7・P8も2本一対の小支柱であるが、出入口施設に関連するものか否か不明である。

炉は地床炉で、奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、直径約45cm、深さ5cmほどの掘り込みで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されていた。

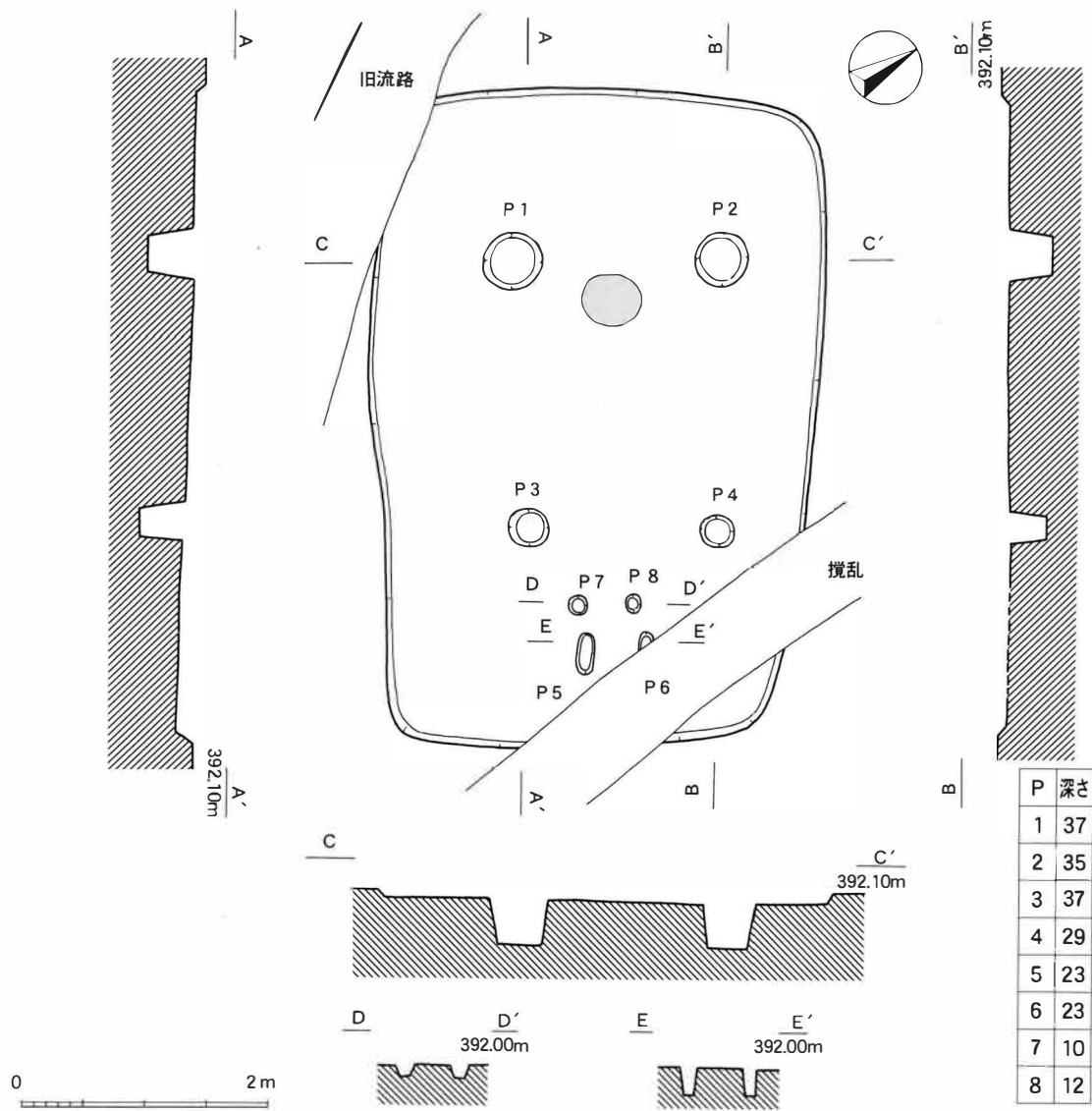


第66図 26号住居址（1：100）

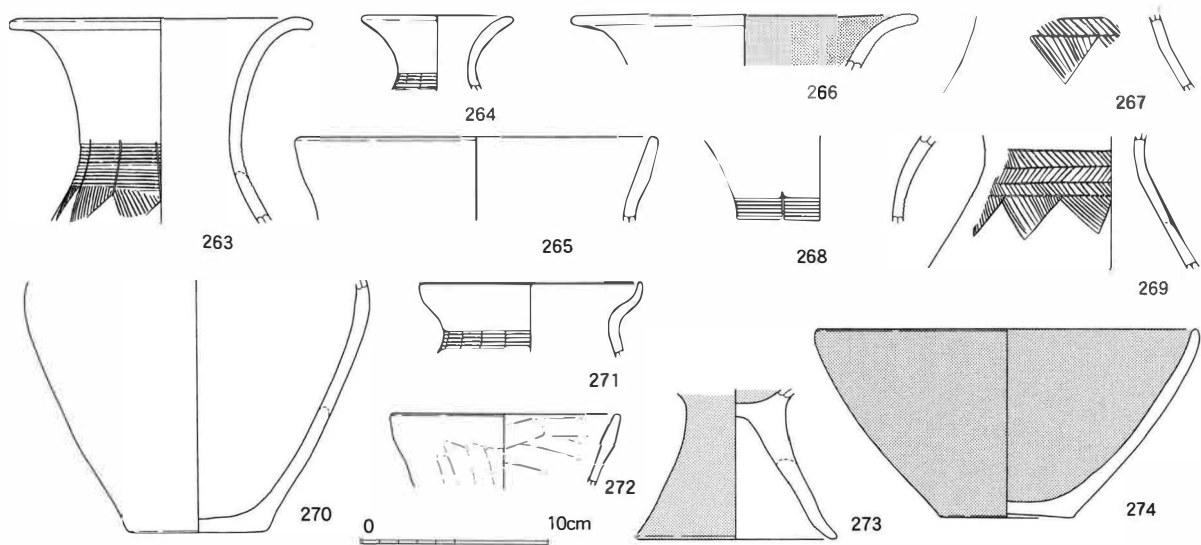


26号住居址

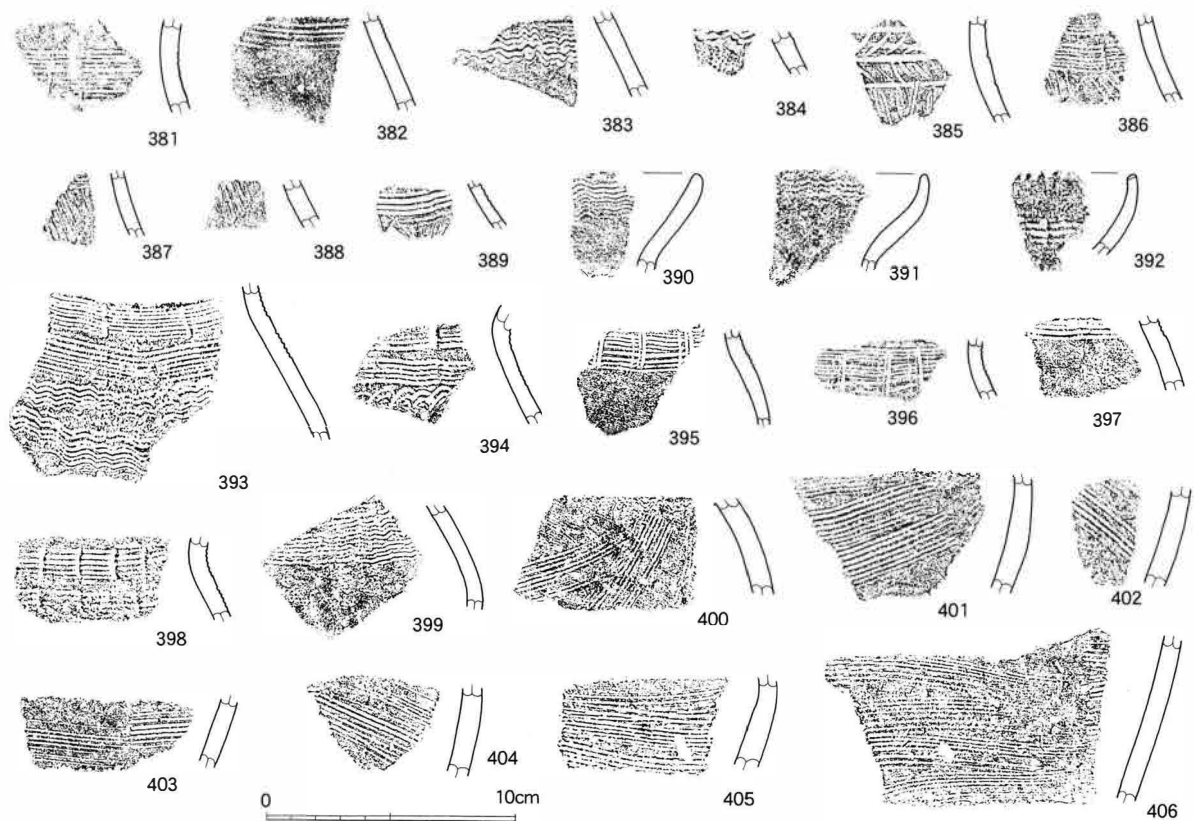




第67図 26号住居址実測図 (1 : 60)



第68図 26号住居址出土土器実測図 (1 : 4)



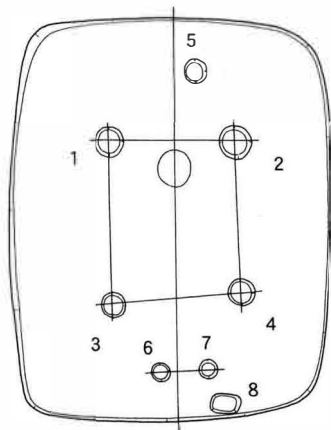
第69図 26号住居址出土土器拓影 (1:3)

27号住居址 (第70~73図)

調査区南側にて検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.10m、短軸4.10m、床面積約18.5㎡を測る。住居址主軸は北東方向にとる。

覆土は黒褐色粘質土の単層で、確認面からの掘り込みは平均10cm前後を測る。覆土内への礫等の投棄は確認されていない。床面は地山の礫層を掘り抜いているために非常に不明瞭で、柱穴・地床炉等の確認をもって床面と判断した状況である。貼り床や特に固くしまった部分等は確認されていない。

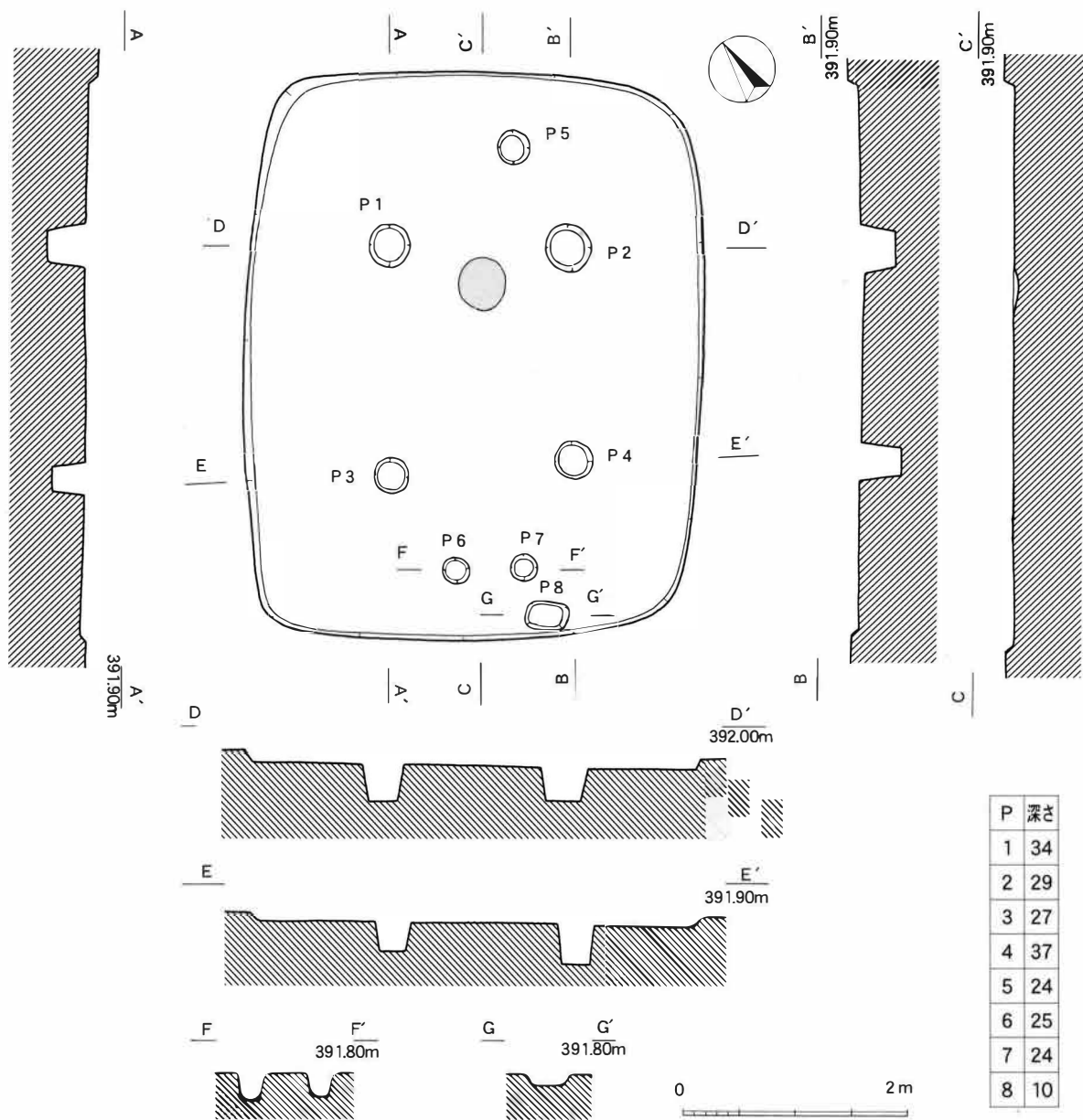
主柱穴 (P1~P4) は4本長方形配列で、短辺1.60~1.70m、長辺1.90~2.00mに配列される。奥壁側に位



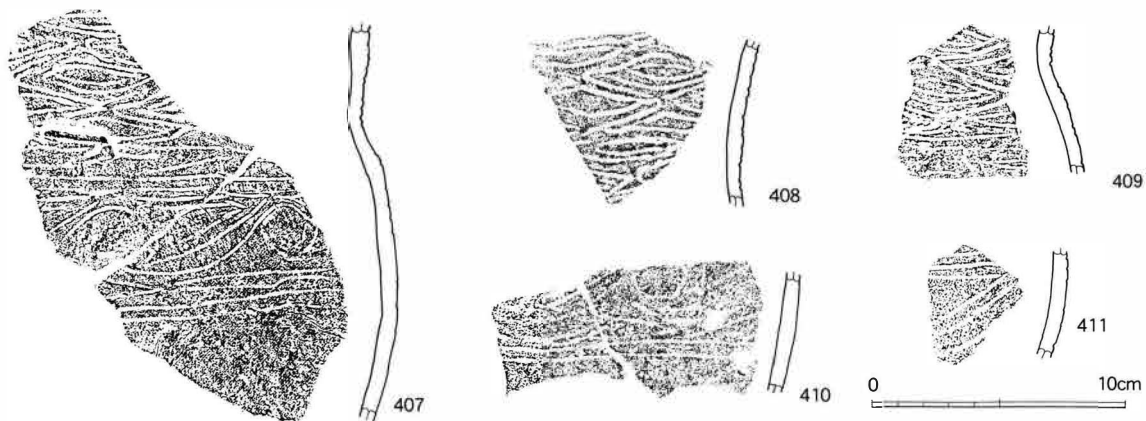
第70図 27号住居址 (1:100)



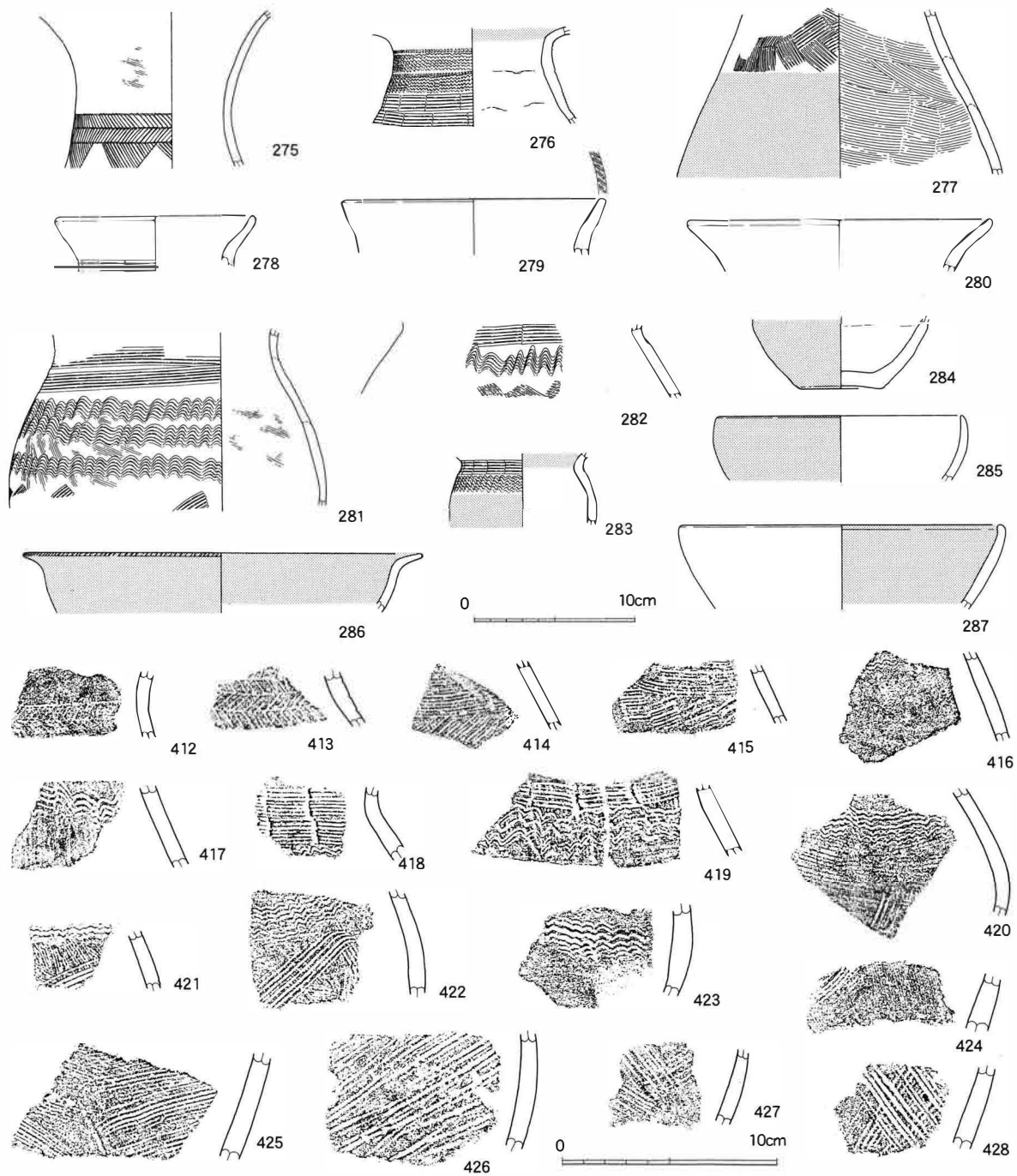
27号住居址



第71図 27号住居址実測図 (1 : 60)



第72図 27号住居址出土土器拓影 (1 : 3)



第73図 27号住居址出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

置するP 5は棟持柱的な支柱であろう。P 6・P 7は出入口施設の2本一対の小支柱であるが、はしご受け穴は伴わない。右側に深さ10cmほどの掘り込みP 8を伴う。

炉は地床炉で、奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する。径40cm、深さ5cmほどの掘り込みで、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されていた。

出土遺物の中で特筆すべきものに、第72図に示した天王山式土器がある。甕形土器の破片で、すべて同一個体と判断される、頸部から口縁にかけては重菱形文を描き、胴部には連繫過文が描かれる。内面は篋削りのような強いナデ調整がなされ、地文の縄文は認められないものの、胎土からも明らかに搬入品と考えられる。

28号住居址 (第74~77図)

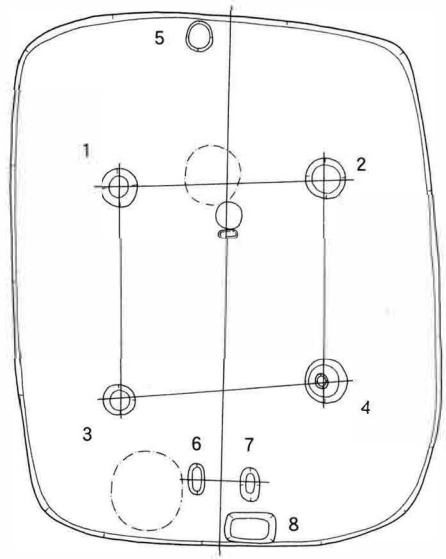
調査区南西で検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。住居址主軸は北東方向をとる。

平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は長軸7.10m、短軸5.70m、床面積約35.6㎡を測り、今回検出された住居址の中では最大規模の住居址である。

覆土は黒褐色粘質土の単層で、確認面からの掘り込みは平均10cm前後を測る。覆土内への土器や礫の多量投棄は確認されていない。

床面は地山の黄褐色粘質土を掘り込んでいるために、色調は明瞭であったが全体に軟弱で、貼り床や特に固くしまった部分は確認されていない。支柱穴(P1~P4)は4本方形配列で、一辺2.70~2.80mに配列される。P6・P7は出入口施設の2本一対の小支柱であるが、はしご受け穴は伴わない。また右下には深さ20cmほどの方形の掘り込みP8が伴う。

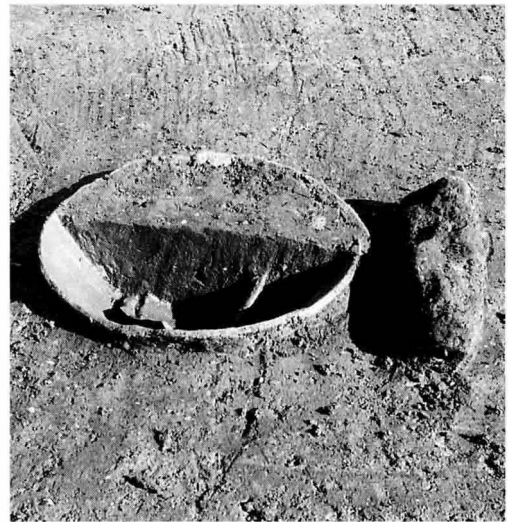
炉は壺胴下半を埋設した土器埋設炉で、奥壁側柱穴間中央やや内側に位置する。また、炉の南側には細長い河原石をおいて炉縁石としている。炉内部には30cm程覆土が堆積していたが、炭化物や焼土の出土はなく、また底面もさほど被熱した痕跡は認められなかった。



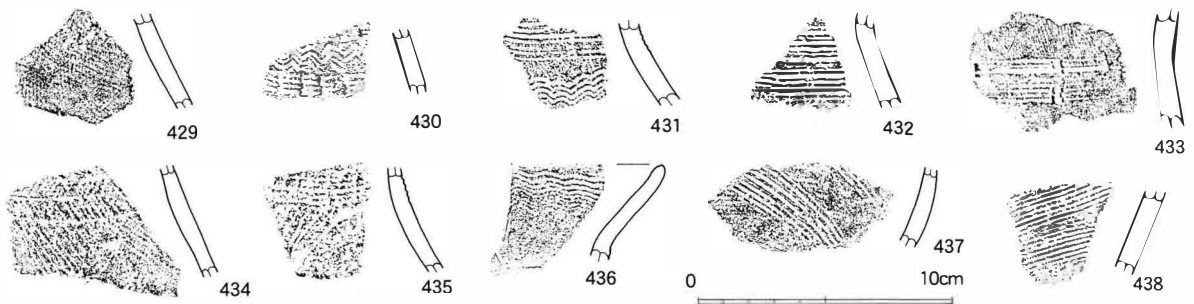
第74図 28号住居址 (1:100)



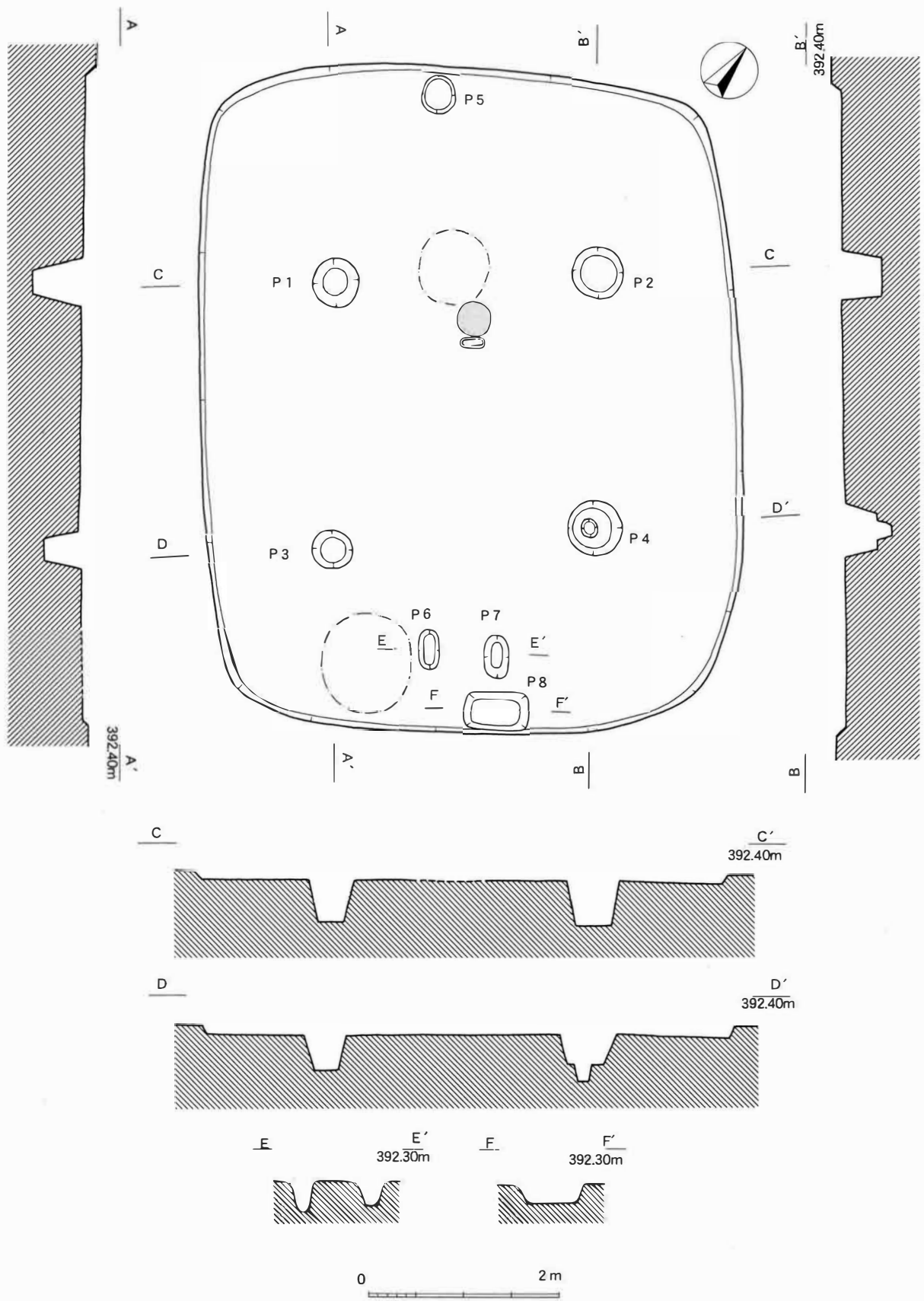
28号住居址



土器埋設炉

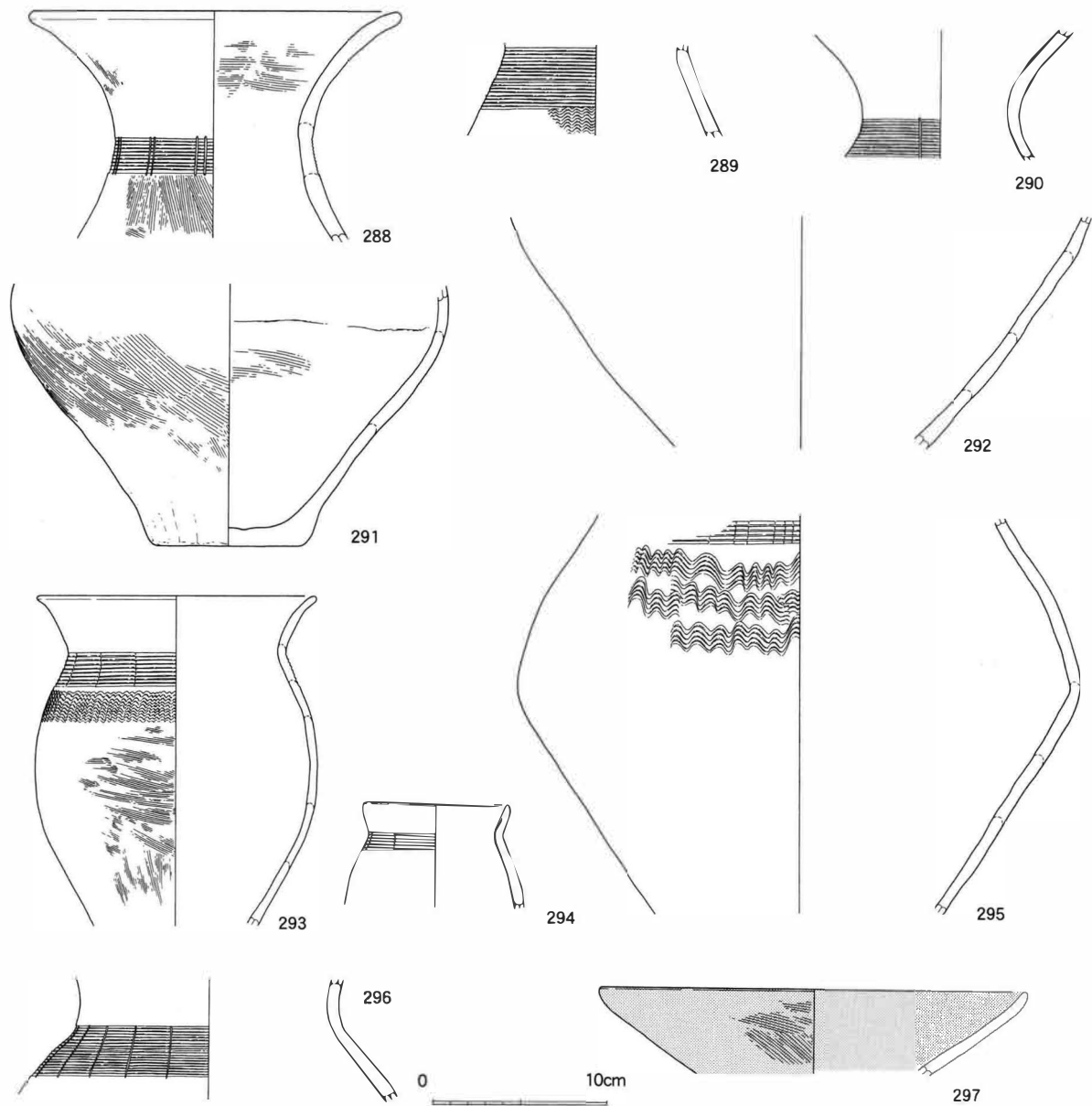


第75図 28号住居址出土土器拓影 (1:3)



第76図 28号住居址実測図 (1 : 60)





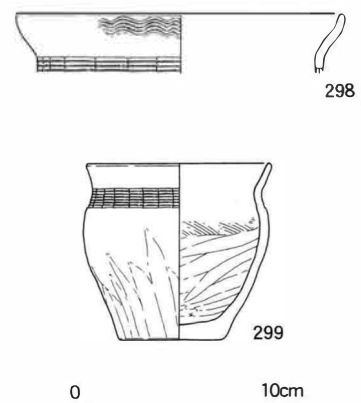
第77図 28号住居址出土土器実測図（1：4）

1号井戸址（第77・78図）

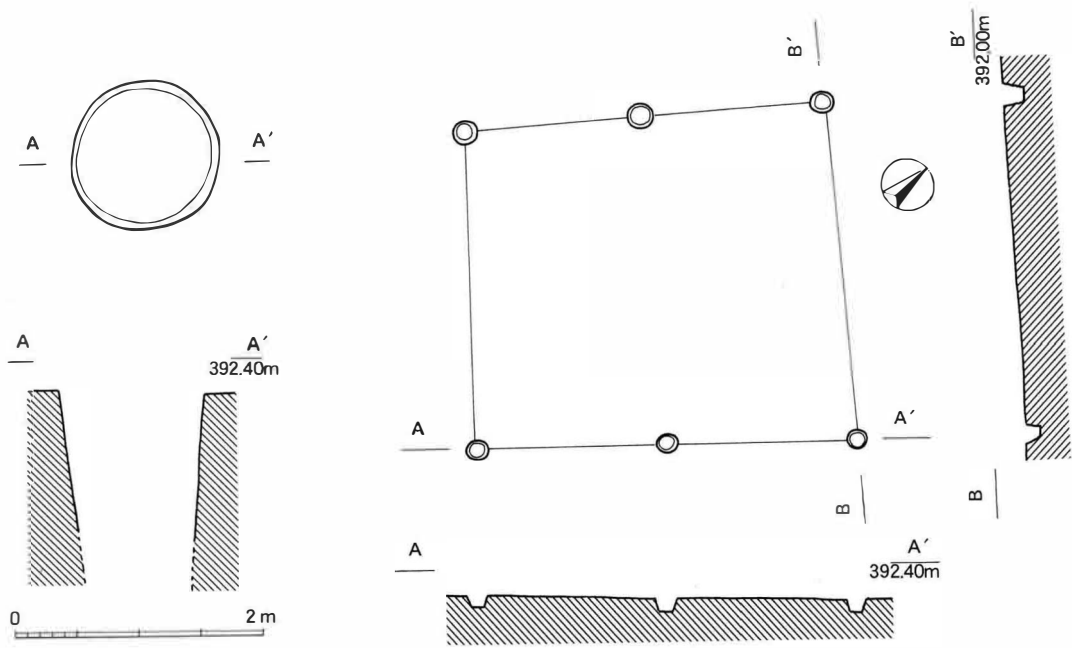
16号住居址の西壁を切って構築された井戸址。平面は直径1.20mほどの円形を呈する。素掘りの井戸と考えられるが、深さ1.50m付近まで調査を行ったが、完掘はしておらず内部施設の詳細は不明である。覆土上層より完形の小型甕1点と甕破片が出土している。

1号建物址（第79図）

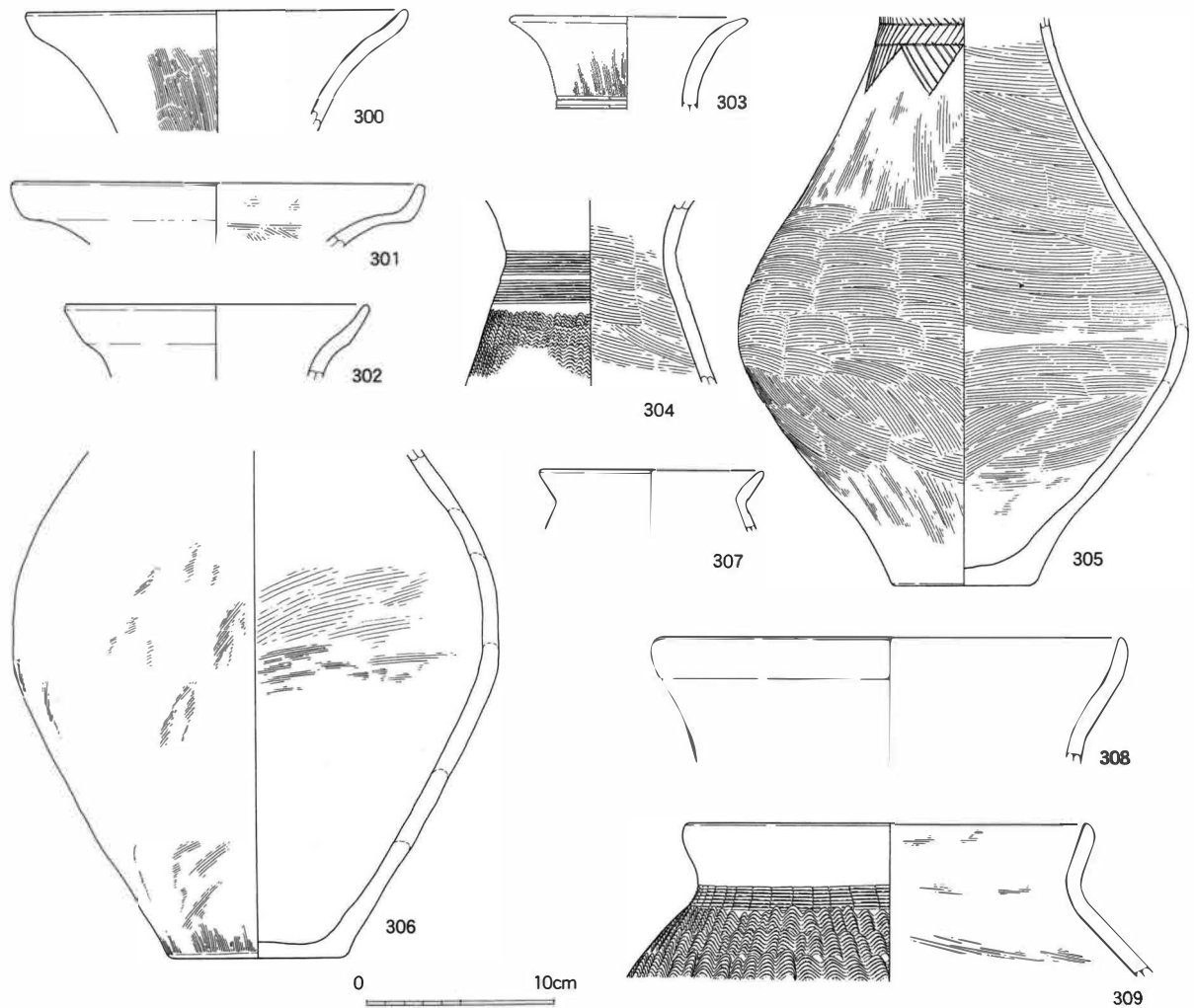
26号住居址と切り合うが前後関係は不明である。6本の柱から構成される小規模な建物址で、長軸3.10m、短軸2.60mを測る。柱穴の掘り込み規模も小さく、平均15cm前後である。本址に伴うと考えられる遺物は出土していない。



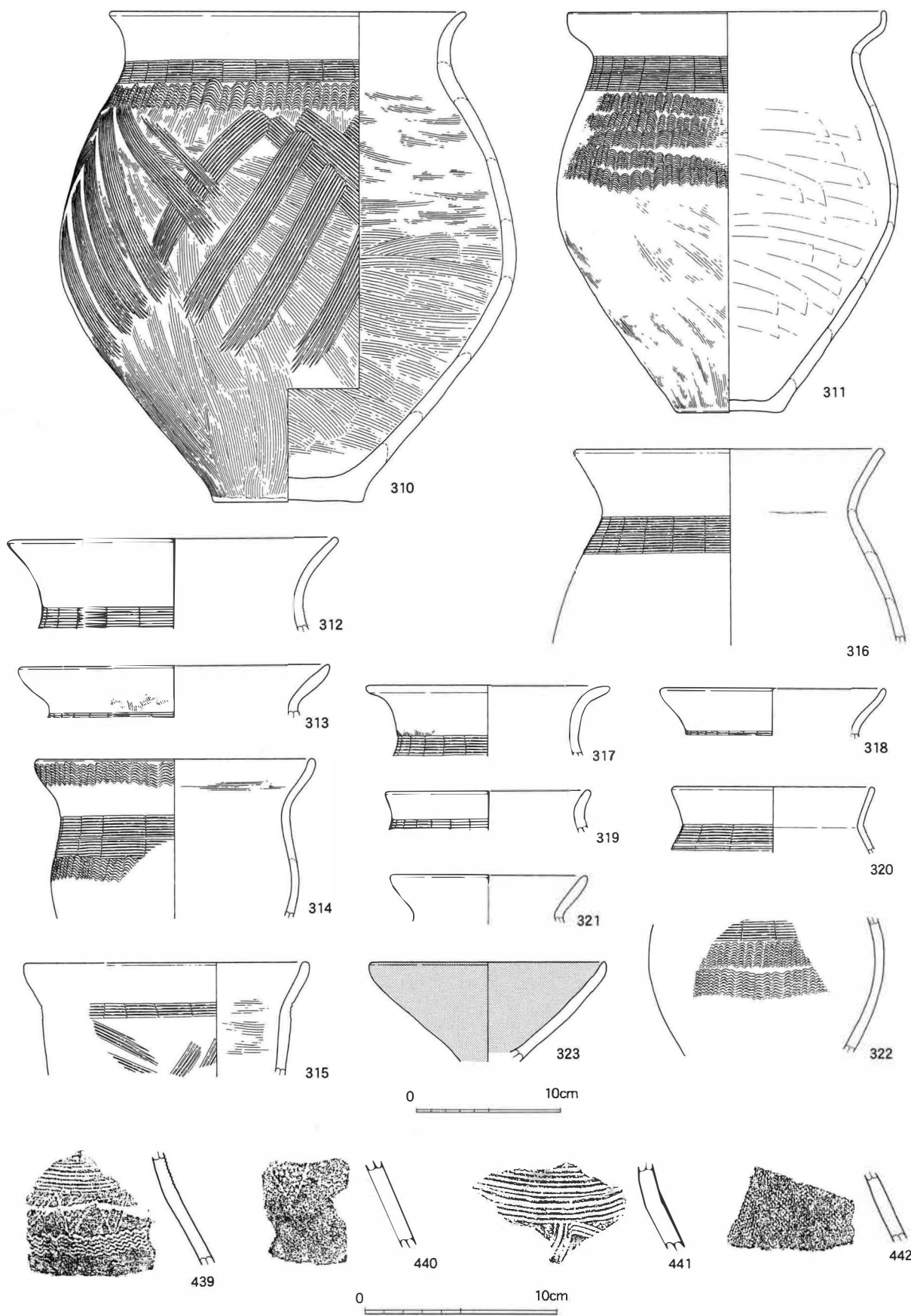
第78図 1号井戸址出土土器実測図



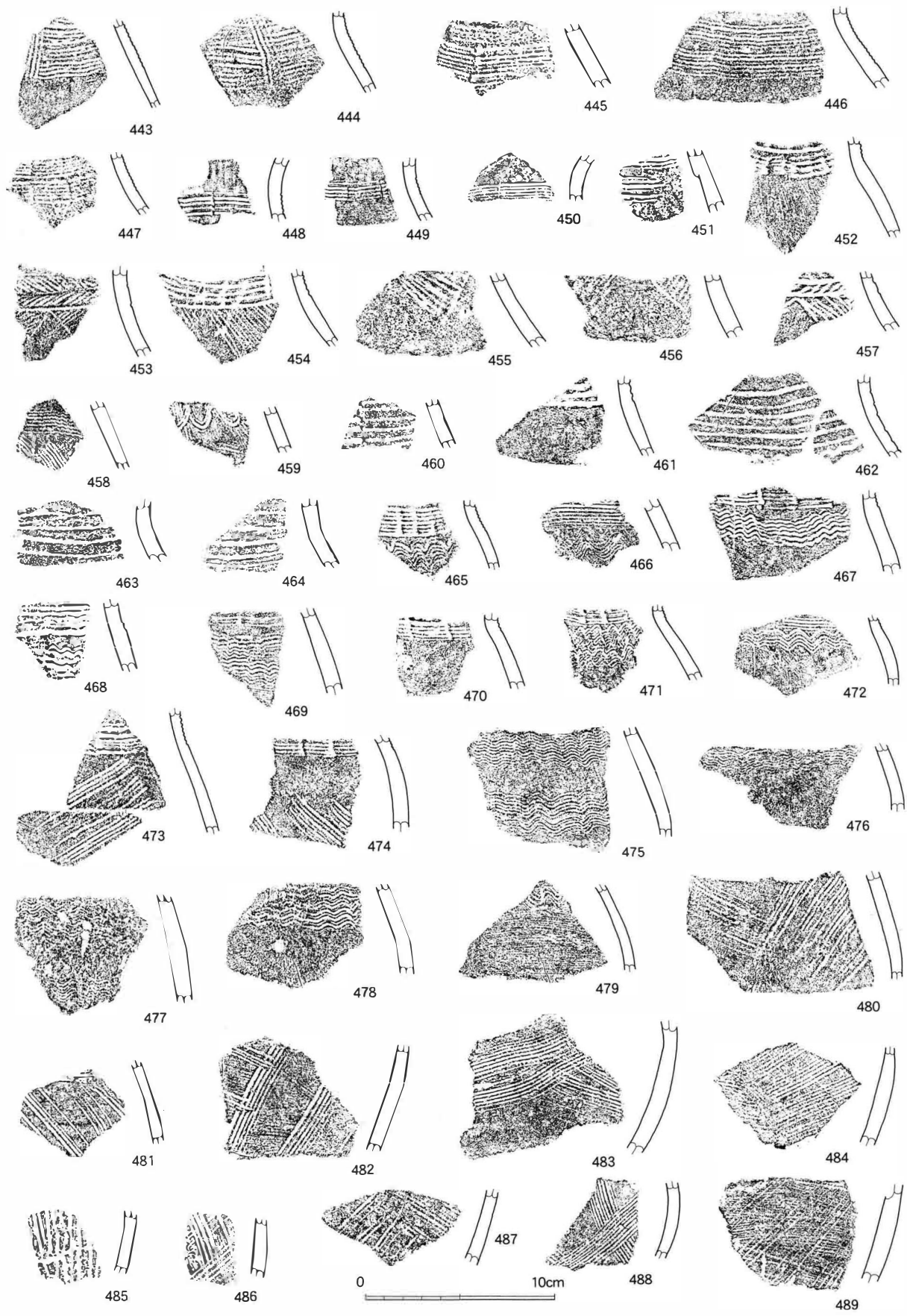
第79図 1号井戸址ならびに1号建物址実測図(1:60)



第80図 遺構外出土土器実測図①(1:4)



第81図 遺構外出土土器実測図②(1 : 4) ならびに出土土器拓影①(1 : 3)



第82图 遺構外出土土器拓影②(1 : 3)

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
11号住居址									
1	壺	21.9	—	—	3/4		口縁：ナデ、頸部：等間隔止め簾状文2、波状文1（断絶なし） 胴部：ハケ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ（磨きなし） 頸部：剥落不明	覆土下層
2	壺	15.6	—	—	完		口縁：ハケ→横ナデ、頸部：直線文→右回り等間隔止め簾状文1、胴部：ナデ→軽いヘラミガキ	口縁：強横ナデ（磨きなし） 胴部：ヘラナデ→ナデ	床直上
3	壺	21.8	—	—	1/2		口縁：ハケ→ていねいなナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文2（上→下）	口縁：ヘラミガキ・赤彩、頸部：横ナデ	床直上
4	壺	18.4	—	—	1/4		剥落詳細不明	剥落詳細不明	覆土下層
5	壺	16.8	—	—	1/8		口縁：強横ナデ	ハケ→ナデ	覆土下層
6	壺	14.6	—	—	2/3		磨耗詳細不明	ヘラミガキ・赤彩	トレンチ
7	壺	—	—	—	1/3		口縁：ハケ→ナデ、頸部：2本一對の半載竹管状工具による右回り簾状文2	剥落詳細不明	覆土
8	壺	—	—	—	1/6		篋描横羽状文+鋸歯文	ハケ→ナデ	トレンチ
9	壺	—	7.8	—	完		口縁：横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：櫛波状文4（上→下）、底部：ヘラケズリ	口縁：磨耗不明、胴部：ハケ	P2内
10	壺	—	—	—	1/3		口縁：ナデorヘラミガキ、頸部：櫛波状文1	ナデもしくはミガキ（詳細不明）	覆土
11	壺	—	—	—	1/3		頸部：篋切りT字文、櫛直線文3帯残（上→下）、胴部：ハケ→ナデ	頸部：ナデ、胴部：ハケ	床直上
12	壺	—	—	—	4/5		頸部：2本一對の篋切りT字文→鋸歯文 胴部：ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	覆土下層
13	壺	—	—	—	1/3		頸部：櫛直線文2残（上→下） 胴部：ハケ→ナデ	ハケ	覆土
14	壺	—	7.8	—	2/3		胴上部：ハケ→ヘラミガキ 胴下部：ハケ 底部：ヘラケズリ	ハケ	覆土
15	壺	—	10.0	—	2/3		磨耗、詳細不明	磨耗、詳細不明	床直上
16	甕	23.4	—	—	1/8		口縁：ヘラケズリ→強横ナデ、胴部：ハゲ（ハケ原体は内面と異なる）	口縁：ハケ→強横ナデ、胴部：ハケ・ヘラケズリ	覆土下層
17	甕	17.8	—	—	1/3		口唇：ヘラ刻み、口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文2（上→下） 胴部：ハケ	口縁：横ナデ、胴部：ハケ	覆土下層
18	甕	18.5	—	—	4/5		口縁：ハケ→強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文 胴部：ハケ→波状文2	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ→ヘラミガキ	覆土下層
19	甕	16.8	—	—	1/2		口縁：強横ナデ、頸部：直線文2（上→下） 波状文1	口縁：強横ナデ、胴部：ナデ	床直上
20	甕	12.5	—	—	1/3		口縁：横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文2（上→下）→波状文2（上→下） 胴部：剥落	口縁：ハケ→横ナデ、胴部：ハケ	覆土
21	甕	15.4	—	—	1/10		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文	口縁：ハケ→横ナデ	覆土
22	甕	14.4	—	—	1/8		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：横ヘラミガキ	ハケ→横ヘラミガキ	覆土下層
23	甕	13.5	—	—	1/2		口縁：強横ナデ、頸部：直線文→波状文→直線文 胴部：ハケ→縦ヘラミガキ	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ→ヘラケズリ	覆土下層
24	甕	13.4	—	—	1/8		口唇：山形突起+刻み、口縁：横～斜ヘラミガキ、頸部：右回り等間隔止め簾状文	口縁：横ヘラミガキ	覆土下層
25	甕	12.0	—	—	1/8		口縁：ハケ→強横ナデ、頸部：直線文2	口縁：ハケ→ヘラミガキ	覆土
26	甕	17.0	—	—	1/6		口唇：ヘラ刻み、口縁：波状文（下→上） 頸部：右回り等間隔止め簾状文	口縁：ハケ→ヘラミガキ	床直上
27	甕	—	—	—	1/3		口縁：横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：波状文	口縁：ヘラミガキ、胴部：ヘラケズリ	覆土下層
28	甕	—	—	—	1/10		頸部：右回り等間隔止め簾状文 胴部：波状文（下→上）	口縁：横ヘラミガキ、胴部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	覆土
29	甕	—	—	—	1/8		口縁：ハケ→ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文→波状文、胴部：ハケ→ナデ	口縁：ナデ、胴部：ハケ→ナデ	覆土
30	甕	—	—	—	1/4		頸部：篋切りT字文（直線文上→下）、胴部：ハケ→ナデ（磨耗不明）	ハケ→ナデ	覆土下層
31	台甕	—	—	—	1/2		頸部：右回り等間隔止め簾状文→篋描波状文（部分的）、胴部：縦ヘラミガキ	ハケ→ヘラケズリ→縦ヘラミガキ	覆土下層
32	甕	11.8	—	—	1/3		口縁：強横ナデ、胴部：ハケ→ナデ（磨耗不明）	横ヘラミガキ	覆土下層
33	甕	—	7.6	—	1/3		胴部：ヘラミガキ、底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	トレンチ、覆土下層

表2 出土土器観察表①

表3 出土土器観察表②

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
34	甕	—	6.3	—	3/4		胴部：ヘラミガキ、底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
35	坏	10.6	—	—	1/6		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土上層
36	高坏	—	—	—	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ナデ	覆土
37	高坏	17.8	—	—	1/4		口唇：山形突起+ヘラ刻み、坏部：ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層
38	鉢	17.5	6.4	7.7	1/3		坏部：ヘラミガキ（磨耗、詳細不明）底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ・赤彩	床直上
39	鉢	12.4	—	—	4/5		口縁：強横ナデ、坏部：ヘラケズリ	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	覆土
12号住居址									
40	壺	23.4	—	—	1/6		口縁：ていねいなナデorヘラミガキ 頸部：右回り等間隔止め簾状文2	磨耗、詳細不明	覆土
41	壺	16.2	—	—	1/4		口縁：ハケ→強横ナデ、頸部：筥直線文	口縁：強横ナデ	覆土
42	壺	18.2	—	—	1/8		磨耗、詳細不明	ナデ？	覆土
43	壺	—	—	—	1/2		口縁：磨耗、詳細不明 頸部：櫛直線文2	口縁：ナデ？ 頸部：ハケ→ナデ	覆土
44	壺	16.1	—	—	3/4		口縁：磨耗、詳細不明 頸部：右回り等間隔止め簾状文2→波状文2	口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：ハケ 胴部：ヘラケズリ	覆土下層
45	壺	—	9.0	—	4/5		口縁：ナデ、頸部：筥描横羽状文→鋸歯文、胴部：ハケ→ナデ（ヘラミガキの有無不明）	口縁～頸部：ハケ→ナデ 胴部：剥落、詳細不明	覆土下層
46	壺	—	8.4	—	3/4		縦ヘラミガキ、底部周辺：横ヘラケズリ	ハケ	覆土下層
47	壺	—	9.8	—	2/3		胴部：ハケ→ナデ 底部：ヘラケズリ	ハケ（外面のハケとは原体異なる）	覆土下層
48	壺	—	8.6	—	2/3		胴上部：縦ヘラミガキ 胴下部：ハケ→ナデ	ハケ	覆土下層
49	甕	22.1	7.4	26.2	4/5		口縁：横ナデ、波状文1 頸部：右回り等間隔止め簾状文 胴部：縦羽状文、ヘラミガキなし、底部：ヘラケズリ	口縁：磨耗不明 胴部：ハケ（ヘラミガキなし）	覆土下層
50	甕	14.1	5.8	15.1	完		口縁：横ナデ、波状文1 頸部：右回り2連止め簾状文、胴部：縦羽状文、ヘラミガキなし、底部：ヘラケズリ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	覆土下層
51	甕	17.2	—	—	1/6		口縁：磨耗不明 頸部：右回り等間隔止め簾状文1、波状文1	ハケ→ナデ	覆土下層
52	甕	15.2	—	—	1/8		口縁：強横ナデ 頸部：右回り等間隔止め簾状文	ハケ→強横ナデ	覆土上層
53	甕	13.6	—	—	1/4		ナデ	ナデ	覆土下層
54	甕	13.2	—	—	1/4		口縁：波状文2（下→上）、頸部：右回り等間隔止め簾状文1、波状文1	横ヘラミガキ	覆土上層
55	甕	11.1	—	—	1/8		口縁：波状文2（下→上） 頸部：右回り等間隔止め簾状文1、波状文1	横ヘラミガキ	覆土上層
56	甕	—	—	—	1/6		口縁：ハケ→ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文1、波状文2	口縁：横ハケ→ヘラミガキ、胴部：磨耗詳細不明	覆土下層
57	甕	—	—	—	1/8		口縁：不明 頸部：右回り等間隔止め簾状文2、波状文	口縁：横ミガキ 胴部：ハケ→ナデ	覆土下層
58	甕	—	—	—	1/4		頸部：右回り等間隔止め簾状文2（上→下）→波状文1、胴部：ハケ	ハケ→ナデ（ヘラミガキなし）	覆土下層
59	甕	—	—	—	2/3		胴部：櫛波状文→縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	覆土下層
60	甕	—	7.0	—	1/3		胴部：ハケ→縦ヘラミガキ、底部：ヘラケズリ→ナデ	ヘラミガキ？	覆土上層
61	台甕	18.3	9.8	22.5	3/4		口縁：強横ナデ、波状文1、頸部：右回り等間隔止め簾状文1→波状文、胴部、ハケ、胴部：縦ヘラミガキ	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ（ヘラミガキなし）	覆土下層
62	台甕	—	5.8	—	3/4		頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：磨耗詳細不明、胴部：縦ヘラミガキ	磨耗、詳細不明	覆土下層
63	台甕？	—	—	—	1/3		ナデorヘラミガキ	ナデ	覆土下層
64	蓋	16.0	—	6.5	完		つまみ：指頭押捺→ナデ 体部：ハケ→ナデ	つまみ：ナデ 体部：ハケ→ヘラミガキ	覆土下層
65	鉢	22.8	6.6	10.8	3/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層
66	高坏	17.8	9.5	16.8	2/3		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ナデ	覆土下層